

サリン日本 ゆくえ知れず



— 生か死か・毒ガスの
死闘五〇〇日

矢上直樹 著

サリン日本 ゆくえ知れず

—生か死か・毒ガスとの
死闘500日

矢上直樹 著

The Visitors
from the Sky

空からの訪問者

オウム真理教施設に飛来した航空機



▲95年1月31日11:43 C-130H (第1上九)



▲95年1月6日11:10 E-2C (第2上九)



▲95年1月20日15:10 F-15 (第2上九)

95年2月1日12:43 E-2C ▶
(第2上九)

94年5月23日13:53
E-2C米海軍 (第2上九) ▼



早期警戒機 E-2C HAWKEYE

▼94年10月13日10:50 E-2C (第2上九)



▲94年5月23日13:53 E-2C 米海軍 (第2上九)



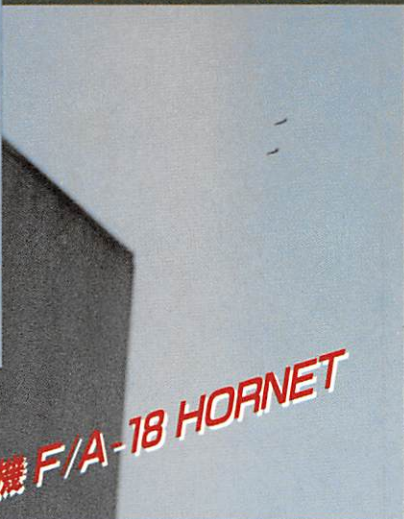
▲95年1月11日13:56 E-2C (第2上九)

▲95年1月6日11:10 E-2C (第2上九)



The Visitors
from the Sky

◀ 11月29日12:30 F/A-18 (第1上九)



戦闘攻撃機 F/A-18 HORNET

▲ 94年11月29日12:30 F/A-18 (第1上九)

▼ 94年5月17日15:07 HSS-2B 海上自衛隊 (第2上九)



▲ 94年5月29日10:05 F-15 EAGLE
百里一静浜間飛行 (第2上九)

▼ 94年6月17日15:16 HSS-2B (第2上九)



対潜哨戒ヘリ HSS-2B





▲94年12月3日11:35 C-130H (第1上九)

◀上・94年12月3日 9:52 C-130H (第2上九)

下・94年12月3日10:00 C-130H 同じコース

輸送機 C-130H HERCULES



▲94年6月22日9:29 C-130H (第2上九)



▲94年6月2日9:20 C-130H (第2上九)



◀94年2月13日14:05 C-130H (第1上九)
94年2月13日14:05 C-130H (第2上九) ▼





輸送ヘリ CH-47



▲94年10月27日11:21 CH-47 (第2上九)

▲95年1月26日9:32 CH-47
(第2上九)

95年1月11日15:11 SH-60H ▶
厚木第1ヘリ軽対潜飛行隊
(第2上九)



攻撃機 A-6E INTRUDER

▲94年12月16日14:33 A-6E 米海軍
(第1上九)



▼94年12月6日14:33 A-6E 米海軍 (第1上九)



94年5月25日9:52 US-1A ▶
海上自衛隊 (第2上九)

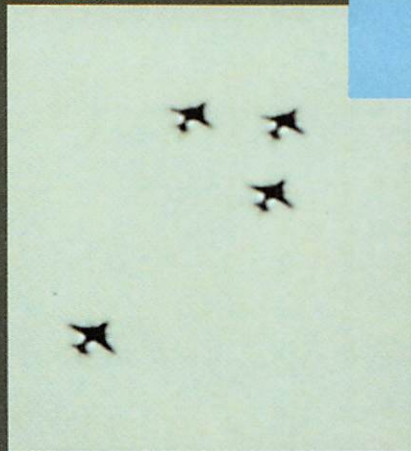
▼95年1月6日 ?
(富士山総本部道場)



▼94年12月16日10:40 OD色ヘリ 自衛隊 (第2上九)



▼94年12月30日11:13 ? 4機編隊
(第2上九)



▼94年6月22日10:00 OH-6 (第2上九)





The Visitors
from the Sky

▶ 95年1月26日? (第2上九)



◀ 94年12月6日 OH-6 (第2上九)

▼ 95年2月1日 C-130H (第2上九)

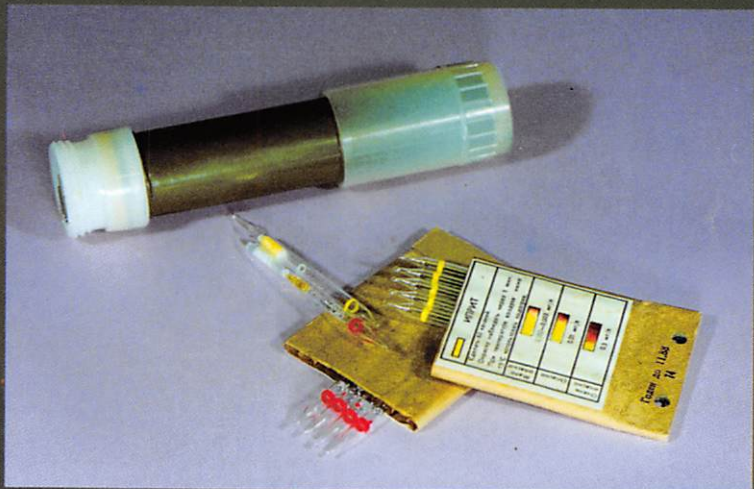


▼ 94年4月13日13:41 UH-1 (第2上九)



毒ガス検知器

これらの機械によって、オウム真理教がイペリット、サリン等の毒ガス攻撃を受けていることが判明した。



手動検知器



自動検知器

【はじめに】

◆あなたの知らないサリンとオウム

94年6月松本サリン事件、95年3月東京地下鉄サリン事件、そしてオウム真理教への強制捜査、多くの逮捕者……過熱ぎみのマスコミ報道を受け入れるならば、オウム真理教がサリンを製造し、そして大量殺人を行なったということになっている。

だが……実際には何がどのように行なわれたのか。わたしたち日本人は何一つ知らされていないと言っている。警察の公式発表は極めて少なく、マスコミが報道する内容に頼るしかないのだが、それも曖昧なニュースソースによるものでしかない。こっそりと訂正・修正が繰り返されているのは周知のとおり。警察が押収した物件も公開されていないため、わたしたちはサリン事件の実態を直接知ることができないのだ。

本書は毒ガス事件関係の未公開資料を初公開する。

今、日本人は膨大な情報を与えられていながら、皮肉なことに肝心な情報、根本となる情報が与えられていないた

めに、欲求不満に陥り、かえって不安をかき立てられているのではなかろうか。

本書では、衝撃的な資料を提示しよう。オウム真理教、あるいは麻原彰晃導師は、なぜ松本サリン事件発生以前から「サリン」という耳慣れない物質の名前を知っていたのか。なぜ、オウム真理教には毒ガス除去装置が完備されていたのか。なぜ、オウム真理教は「毒ガス攻撃を受けている」などという、にわかには信じがたいことを主張するのか。

本書では、マスコミが入手できなかった初公開資料、内部資料を惜しみなく提供しよう。その中には、今の日本ではおそらくタブーとされて、巨大なマスコミなら確実に公開を避けるような内容もあるだろう。しかし、毒ガス事件に関して濃厚な嫌疑をかけられたオウム真理教の社会的責務であるとも考え、これらの資料の公開に踏み切った。

毒ガスによる大量殺人事件は、再発してはならない。もちろん、一度たりとも起こってはならない事件であった。そのためにも、事件をよく知り、そして対処しなければならない。わたしたち自身の身を守るためにも……。

だが、わたしたちは知らなさすぎるのではないか。例えば、日本で起こった毒ガス事件は、松本・東京地下鉄だけではないことを、あなたはご存じだろうか。

次のような例がある。

◆謎のヘリコプター

「あ、あれは……」

黒いヘリコプターからは、確かに霧状のものが噴霧されている。2機のヘリコプターが重なって見える。その手前のヘリから何か薄い霧状のものが噴霧されているのが、後ろのヘリの黒い機体をバックにしてははっきりと見える。その「霧」は下に向かって吹き出していた。

94年4月13日午後1時41分ごろ。真昼の空を背景にしていると薄すぎて見えない霧状の「もの」は、一瞬の偶然によって、黒い機体をバックにくっきりと浮かび上がったのである。一瞬後にはもう見えなくなってしまっていた。

この、ヘリコプターから霧状のものが噴霧されている瞬間を目撃したのは、第2上九南東警備ボックスにいた出家修行者E・Dである。オウム真理教に対する毒ガス攻撃が激しくなり、自衛策として警備を強化した矢先のことであった。

そのときの様子をEはこう語る。

「通常の飛行機の音に比べると、かなり大きい音が聞こえてきて、びっくりして空を見上げると、北の方角から真っ黒い2機のヘリコプターが横に並んで、かなり低空でまっすぐこちらに向かって来ていたんです。そして、敷地のちょうど真上で90度旋回して東の方へ去っていきました」

そのヘリが第2上九を目指してやってきたことは明らか

である。だが、2機のヘリはそれで去ってしまったのではなかった。

「2機が東の空に消えたと思った瞬間に、また大きな音がしました。それで再び空を見上げると、同じように真っ黒いヘリコプターが2機並んで直進して来たんです」

1回目は望遠鏡で捉えようとしたのだが、倍率が高すぎてかえってよく見ることができなかった。そこで、Eは、今度は肉眼で注意深く見ることにしたのである。直進して来たヘリコプターは先程と同じように、敷地上空で90度旋回して、東の方角を向いた。その瞬間に見えたのが、まさに霧状のものの噴霧の現場だったのである。

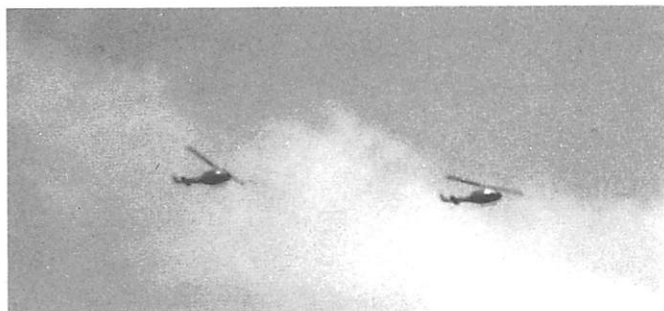
このヘリコプターが去った後、Eをはじめとして、第2上九にいた修行者たちは体調の不調を訴えた。不審な航空機が飛来すると必ず起こる現象である。

さて、このヘリコプターはどこ所属なのだろうか。

「機体を真横から見たときに、後部に赤い小さなマークが見えました。後で友人が自衛隊の写真集をわたしに見せてくれたんですけれども、その巻頭カラーの部分に、わたしが見た真っ黒いヘリコプターとほんとにそっくりの——色も形も赤いマークももうそのままの——ヘリが載っていたんです」

赤いマークは自衛隊を表わす日の丸であった。そして、このヘリコプターの機種はUH-1であることが確認された。自衛隊機がオウム真理教上空で「何か」を撒いたのだろうか

か。この日以降、ヘリコプターや小型飛行機が毎日のように低空で飛来しているが、自衛隊機だけではなく米軍機も数多く確認された。



当日撮影された2機の陸自UH-1。このヘリコプターから霧状のものが噴霧されていることが目撃された。（下は同型機——「自衛隊装備年鑑1994」朝雲新聞社より）。

◆一体、何が起きているのか

もちろん、出家修行者たち自身も最初は、毒ガス攻撃を受けているなどということはなかなか信じられなかった。だが、数々の証拠を目にし、そして自分自身の身体に起こっていることを認識するにつれ、毒ガス攻撃の存在を認めるようになったのである。

しかし、今や、毒ガスによって被害を受け、肉体的にほろほろになったオウム真理教の信者が、逆に犯人とされようとしている。一体、これはどういうことなのか。

さらに95年5月4日、オウム真理教顧問弁護士青山吉伸が「名誉毀損」によって逮捕された。

これによって、オウム真理教の毒ガス被害そのものが「ウソ」とされようとしている。では、出家修行者たちの肉体に生じた健康被害は、存在しなかったとでもいうのだろうか。

証人がいる。1000名を超える出家修行者である。
あなたにはこの現実を知ってほしい。



**サリン日本
ゆくえ知れず**



サリン日本ゆくえ知れず

—生か死か・毒ガスとの死闘500日

C O N T E N T S

はじめに..... 1

第1章

忍び寄る奇妙な病気..... 13

第2章

イペリットとサリン..... 29

第3章

激しい攻撃..... 39

第4章

毒ガスとの闘い..... 63



第5章

毒ガス被害の実態 97

第6章

出家修行者の毒ガス被害 117

第7章

攻撃は空から、地上から 137

第8章

波 紋 175

第9章

新たなる攻撃——Q熱リケッチア 183

追補編

国家権力による毒ガス使用

少数反対派抹殺、そして人体実験 201

あとがき

「人を犯す者は乱亡の患いあり」 217



山梨県上九一色村富士ヶ嶺

至富士吉田

至富士吉田

139



第1上九
(第2・3・5サティアン)

第3上九
(第7サティアン・
クシティガルバ様)

第6上九
(第10サティアン・
ジューヅカ様)

第2上九
(第6サティアン)

第5上九
(第9サティアン)

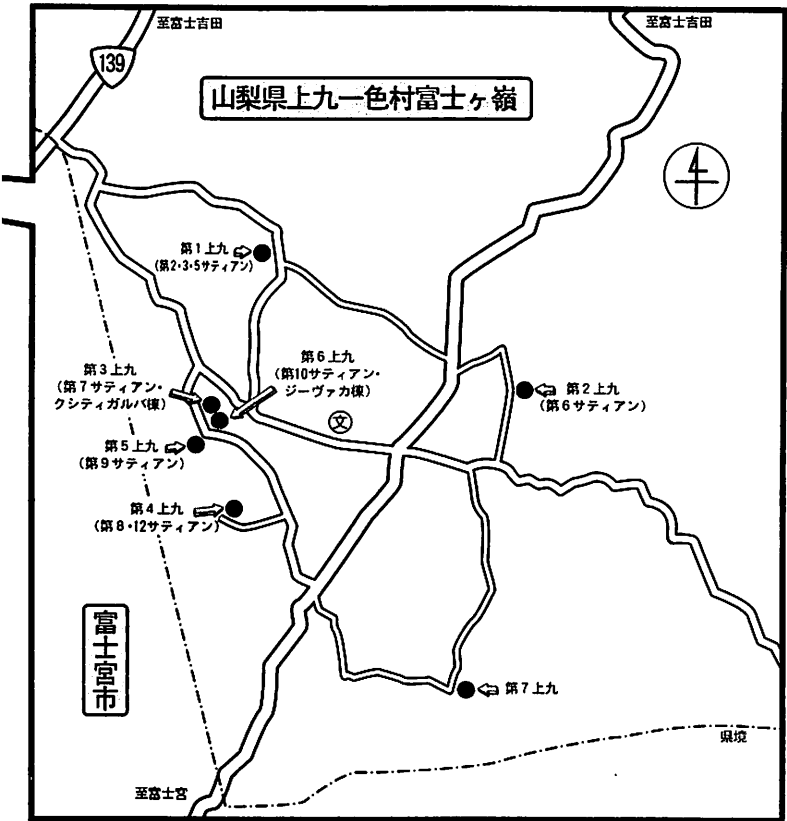
第4上九
(第8・12サティアン)

富士宮市

第7上九

県境

至富士宮





【第1章】
忍び寄る奇妙な病気

◆奇妙な病気

麻原尊師の第5子鏡暉^{あきてる}君の病気は不思議なものであった。

1日30分程度の日光浴をしていたところ、2～3日で顔中から黄色い汁が出て、カサブタになったのである。鏡暉君がかゆがって手で引っかくと、顔面血だらけになってしまう。枕^{まくら}に乗せていたバスタオルや服が血で染まってしまった。

当初は原因がわからなかった。

医師によると、子供によく見られるアトピー性皮膚炎に似ているので、それを含めた、乳児期に起こる湿疹^{しっしん}について調査してみた。しかし、いずれも該当しない。

麻原尊師の第1子から第4子までにはこのような皮膚炎を呈した者はおらず、遺伝的な素因も認められなかった。

問題の湿疹は皮膚の露出部に発症しており、アトピーによく見られる「下行性進展」ではない。アトピーならば、ひじ、膝関節^{ひざ}のくぼみ、うなじや首といった部分によく発症するのだが、そうではなかった。しかもアトピーでは見られない小水疱からなる湿疹である。

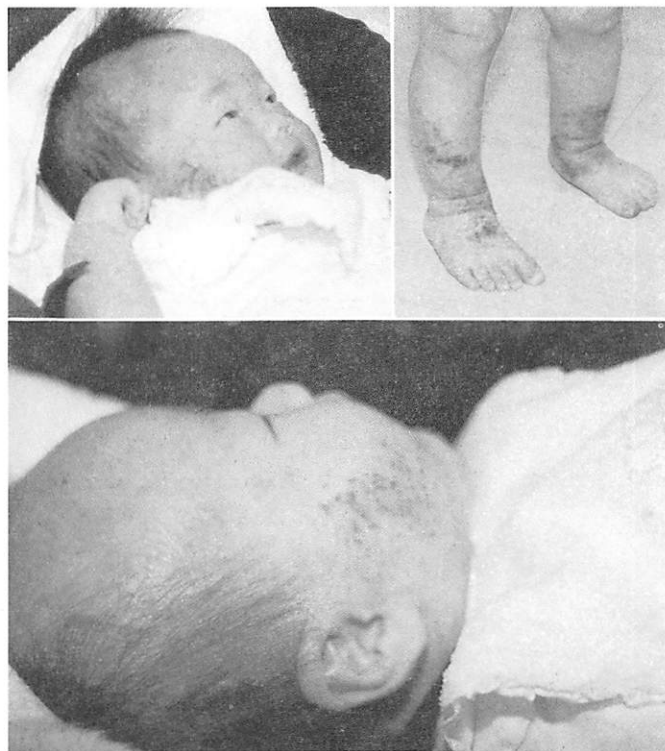
また、アトピーは冬季に増悪するのだが、鏡暉君の湿疹には、季節との関連は見られなかった。さらに、日光浴をした直後の発症の仕方が、アトピーその他の皮膚炎と比べて非常に急激であるという特徴がある。

接触性湿疹、脂漏性湿疹も否定された。さらに、アトピー

で特徴的な白色皮膚描記症というテストも陰性であった。湿疹の原因とされている卵・牛乳・大豆は、母乳で育てているため、もともと摂取していない。

さらに、ダニ・家塵・塗料等をチェックしても該当しなかった。

そのころ、麻原尊師も体調をひどく崩していた。発熱と



第5子鏡暉君と第6子羅暉君のびらん性ガスによる被害

咳せもが長い間止まらず、体が衰弱していったのである。そこで、上九一色を離れて療養することになった。尊師と一緒に鏡暉君も転地療養したところ、たったの2～3日で鏡暉君の顔の湿疹が改善したのである。

しかし、一週間経って上九一色村施設に戻ったところ、またすぐに元のただれた顔に戻ってしまった。

オウム真理教の施設のある上九一色村富士ヶ嶺地区は牧畜地帯であり、また別荘地でもある。つまり、本来ならば転地療養すべき土地はこの上九一色のはずなのだ。しかし、上九一色を離れると病状が良くなり、帰ってくると病状が悪化するのである。明らかに異常な事態であった。

麻原尊師の体調は、さらに悪化していった。症状は、皮膚に水疱ができる・湿疹けったん・血痰・歯ぐきからの出血・頬脈・全身倦怠感けんたいかん・手足のむくみ・皮膚が黒ずむ・微熱・肝臓や脾臓ひぞうが腫れる・呼吸停止に近づく、といったもので、とても尋常とはいえない。最終的に心不全も起こされた。

ちょうどその時期に、他の信者も同じ症状を訴え始めていたので、尊師個人の病気でないことはすぐわかった。では感染症かということ、そうでもない。感染症は、ほとんど急性のもので、尊師に認められた多彩な症状を慢性的に示すものはまずないからだ。それに、検査の結果、何にも感染していないことは明らかであった。

この原因について、オウム真理教の医師たちは懸命に調べたが、なかなか判明しなかった。

◆感染症の可能性は？

これらの健康被害に対して、医師たちはあらゆる仮説を立てて原因を検証した。

感染症の可能性はないだろうか。

感染症は急性疾患——つまり、急激に発症する。しかし、出家修行者の症状は長期にわたっており、慢性的である。そもそも、

結膜炎	鼻炎	乱視	血痰
鼻出血	血生臭い口臭		
皮膚炎	皮膚潰瘍 <small>かいよう</small>	皮下出血	筋肉の痙攣 <small>けいれん</small>
咳	易疲労性	下痢	頻尿
腹痛	頭痛	視力障害	

呼吸がしづらい

といった症状は、感染症では説明しきれない。それに、感染症でないことは、検査の結果からも証明されている。

また、上九一色村施設で疲れやすさを訴えていた者が、東京に行ってさらにハードな仕事をしたところ、むしろ疲れやすさをはじめ種々の症状が消失したという報告例がある。もちろん、食事内容は同じである。これは、感染症や栄養を原因と仮定すると、説明がつかない。

◆ 栄養面に問題はないか

症状は多人数に及ぶ。食事の栄養面に問題はないのか？

栄養は、専門の栄養士のもとで厳重に管理されており、全く問題はない。出家修行者の食事は、人間が必要とするカロリーおよび栄養素のすべてにおいて、平均的日本人の摂取量を十分満たすように用意されている。そして、それぞれの年齢や体調に応じて適切な量に変えることができるのである。

オウム真理教の出家修行者が栄養失調であるというのは、マスコミの流した悪質なデマである。実際には平均的日本人の基準を上回る栄養を摂取しているのだ。

また、富士宮・上九一色の出家修行者と、離れた山梨県富沢町の清流精舎の修行者は、どちらも全く同じものを食べている。にもかかわらず、清流の方は被害がはるかに少ない。このことから、この健康被害の原因が、食べ物ではなく「場所」によるものであると考えられよう。

さらに、出家したばかりの人間にまで症状が現われていることを考えると、健康被害の原因は「栄養」ではないといえる。

食品成分 (単位)	A.オウム真理教 の食事の成分	B.日本人の 栄養所要量	日本人の栄養 所要量との比較 (%) $A/B \times 100$
エネルギー (kcal)	2341.0	2130.0	109.9
タンパク (g)	88.2	79.6	110.8
脂 質 (g)	66.5	58.0	114.7
糖 質 (g)	411.0	306.0	134.3
Ca (mg)	1170.0	559.0	209.3
Fe (mg)	31.0	10.8	287.0
VA (I.U.)	3970.0	2120.0	187.3
VB1 (mg)	3.4	1.38	246.4
VB2 (mg)	4.1	1.26	325.4
VB6 (mg)	4.8	2.0	240.0
VB12 (μ g)	20.0	6.0	333.3
VC (mg)	412.0	132.0	312.1
VD (I.U.)	150.0	100.0	150.0
VE (I.U.)	72.8	30.0	242.7
ナイアシン (mg)	22.1	17.0	130.0
パントテン酸 (mg)	10.0	10.0	100.0
葉 酸 (mg)	0.4	0.4	100.0

オウム真理教の食事の栄養素・カロリーと、平均的日本人のそれとを比較する（1日あたり）。栄養面に何ら問題はないことがわかる

◆修行で体を壊さないか？

では、多くの出家修行者が修行で体を壊したという可能性はあるのか。

オウム真理教で行なっている修行は、瞑想、呼吸法、ヨーガ行法、気功法などが中心である。「苦行」などと報道されているが、滝行などの荒行・苦行は行なっていない。

オウム真理教で行なっている修行はいずれも、本来、自律神経を安定させるものである。血圧・心拍・呼吸・脳波等を安定させ、心身に好影響を与えることは、各種の実験によって判明している。

ヨーガ、気功が健康増進に良いことは科学的に明らかであり、世間でも広く健康法として実践されている。

例えば、オウム真理教ロシア・モスクワ支部道場の信者で、走り幅跳びの世界記録保持者であるチスチャコワ・ガリーナさんは、以前にけがをしてから不調が続いていたが、「修行を始めると以前の絶好調のときの状態に戻ることができた」と語っている。修行によって病気やけがが治ることがあっても、害が及ぶということは決してありえないのだ。

それなのになぜ、こういった「健康法」を日常的に熱心に行なっているオウム真理教の出家修行者が、あたかも慢性疲労症候群のような状態を呈さなければならないのか。

【修行者の証言】

◎Y・Mさん

91年5月ごろから、体がだるくなったり、よく眠るようになりました。

もともと少し乱視があったのですが、視力がどんどん悪くなり、今では夜の運転は怖くてできないくらいです。

92年12月ころから、症状がどんどん悪化していき、一番悪くなったのは93年6月ころでした。このころは血痰が出たり、下痢したりして、体がだるく、朝起きることができず、起きても体がとても重くてだるく、少し作業をするとすぐ寝てしまっていました。

一度、呼吸が止まり、一時心臓も止まりかかり、あわや死ぬという状態に追い込まれました。

このころは呼吸困難がひどく、胸が圧迫されて苦しく、階段を途中まで上ると息が切れて、休み休み上がらないといけない状態で、常に微熱が続き、集中力がなくなり、仕事の能率が半分以下に落ち、気力が全くといっていいくらいなくなってしまいました。

けがをしてもなかなか治らず、通常なら1日か2日でカサブタができて治る傷も、全く傷がふさがらず、おできができて治りませんでした。舌も常にピリピリしていました。

このころは、換気扇を回して常時換気していたので、外と同じ状態だったことが毒ガスの影響をもろに受けた原因

だと思えます。

◎S・Eさん

91年の秋ごろから健康状態が優れず、いくら睡眠をとっても疲れがとれず、同時に思考力の低下を感じるようになりました。自分自身でも「このままではいけない」と感じ、その後ずっと原因を探ってはみるのですが、これといった原因は見あたらず原因不明のまま今日までその症状が続いています。

また、視力の低下が91年より徐々に強くなりました。91年当時は眼鏡なしで日常生活上なんら支障がなかったのに、今では大きな標識の字すら見えず、日常生活に大変な支障を来すまでになっています。この間、視力の低下の原因になるような目の酷使はありませんでした。

体力の低下も、通常では考えられないような甚だしいものがあります。91年より日に日に体力が低下してゆき、休養をとっても体力が回復しませんでした。

◎S・Kさん

わたしが体の異常をはっきり感じたのは、93年の9月ごろからです。

その当時は清流精舎（山梨県富沢町）で奉仕活動をしていたのですが、めまいと吐き気がして寝込んだことがあります。熱・だるさ・吐き気がひどいときは、食事もとれず、2日間も寝込んだことがあります。

視力も低下し、眼鏡をかけていてもダブって見えることがありました。

また、ある時間帯になるとワークをしていても、その最中に寝てしまうことがよくありました。睡眠時間は以前と変わらないくらいとっていたのに、そのような状態になったのです。

◎K・Kさん

南青山の東京総本部道場で、93年11月ごろ、出家修行者全員が寝込んだことがあります。そのときわたしも身体に異常を来たしました。頭痛や吐き気がし、目や喉にも痛みがあり、黄色い鼻と痰が2週間出続けたのです。また、咳もずっと出続けました。

93年12月末ごろから、第8サティアンに移動しました。そこでは体調が非常に悪化し、倒れるほどひどい状態になりました。咳、喉の痛みがあり、頭痛がし、頭もボーッとして回転しなくなり、とても作業ができる状態ではありませんでした。

身体が異常にだるくなり、目も霞^{かす}んできて物を見るのが困難になりました。食べたものも全部吐いてしまうという状態で、体力もなくなり、また、鼻血、血痰も出るという最悪の状態で倒れてしまったのです。

◆ 提示された仮説「毒ガス」

転地療養によって症状が改善される原因不明の健康被害。それは、医学常識では考えられない事態であった。そこで麻原尊師が提示した仮説が「毒ガス攻撃」なのである。

93年10月25日、オウム真理教清流精舎（山梨県富沢町）で行なわれた尊師説法で、出家修行者に向けて次のように語られている。

ところで、ここ一週間の中に、家族や、あるいはいろんな弟子が、わたしに対していろんなことを言ってきた。

「頭痛がする」

「吐き気がする」

あるいは、

「目の奥が痛い」

等である。これらはすべて、例えばマスタードガス——つまりびらん性のガス——や、あるいは神経ガス——つまり、これはまあサリン、あるいはVXと呼ばれるようなものなどがそうだが、要するにわたしたちの神経を侵し、そしてわたしたちを死に至らしめるもの——である。

そして、この第2サティアンの出来事は、このびらん系のガスと神経系の毒ガスが混ざったもの、これを長期間にわたり第2サティアンに対して攻撃した結果としての現象であった。

実は昨日、38名いる2階の修行者——第2サティアンの2階に修行者がいるわけだが——にアンケートを取ったところ、そのうちの25名は、先程述べた神経系のガスや、あるいはびらん性のガスの影響を受けていることが判明した。そして家族と、まあ、わたしがそうであった。

実はこの出来事というのは、去年の11月の終わりぐらいから続いているのである。

確かに、入手された文献によれば、これらが毒ガスの症状と考えればつじつまが合う。しかし、まさか毒ガス攻撃とは……。

読者の皆さんが「オウム真理教は毒ガス攻撃を受けてきた」と聞いてもなかなか信じられないように、この当時、出家修行者にとっても、毒ガス攻撃を受けているという麻原尊師の発言は信じがたいものだったのである。

◆2つの自覚症状

健康被害症状の特徴は、次のように、皮膚粘膜を侵された症状である「自覚症1」と、神経に関連がある「自覚症2」とに大別できる。

◎自覚症1

異様な臭いととも、目や鼻が痛い

目が赤くなる

鼻血

口内炎

喉が痛い

血痰

脇の下や股間の、汗をかいて擦れる部位や、靴下の

ゴムの部位に水泡ができる

手の平が赤くなり水泡ができる

皮膚のただれやけがが治らない

◎自覚症2

吐き気

下痢

めまい

頭痛

目の焦点が合わなくなる

視力低下
平衡感覚の異常
脈が速い
息切れ
呼吸が止まる
心臓が止まりそうになる
疲労感
階段が昇れない
睡眠時間が長くなる
思考力が低下する

◎症状を訴えるときの特徴

これだけの多くの症状を、1人の人間が同時に訴える。

◎症状を訴えたときの場所

特定の教団施設において発症したというのではなく、全国の教団施設において発症している。

室内に外気が入ってくる建物や、屋外での作業において、発症あるいは症状が悪化している。つまり、室内より室外にいる者の方が症状がひどい。

◎症状の同時多発

1人でなく、多くの人が同時期に同様の症状を一斉に訴える。

発症の仕方も奇妙である。もし感染症ならば、潜伏期というものがあるので、多くの人が一斉に同じような症状を同時期に示したりはしない。

しかも、多くの症状がいくつも発生する。この多彩な症状を説明できる病気はないのである。

しかし、この症状の発現は、外気との接触と密接な関連がある。よって、外気に含まれる有毒物質による症状と考えるほかはない。

また、慢性的になると、上記の症状に加えて、

肝臓・腎臓・^{こつすい}骨髄といった内部臓器の機能異常
傾眠

思考力低下

しびれ

脳神経や脊髄神経まで侵す

という症状を示している。

確かに、これが毒ガスによる症状だと仮定すると、説明がつく。「自覚症1」は、びらん性で、しかも細胞を侵すマスタードガスの症状である（このガスからナイトロジェンマスタードという史上初の抗ガン剤が作られた。細胞毒である）。したがって、けがも治りにくし、抗生物質も効きにくい。「自覚症2」は、神経ガスによる症状と考えられるものである。

それでも、毒ガスが実際に検出されるまでは「毒ガス攻撃が行なわれている」とは信じられなかったのだ。



【第2章】 イペリットとサリン

◆毒ガスは存在した

医学的に考えても、オウム真理教は毒ガス攻撃を受けているのではないかという推測が大勢を占めるようになった。しかし、毒ガスそのものの存在が証明されたわけではない。医師も、まだ毒ガス攻撃であるということ信じることができなかった。

そこで、ロシアから毒ガス検知器を取り寄せたのである。この毒ガス検知器は、旧ソ連軍が正式採用し、ロシアを含む旧ソ連圏および東欧諸国で現在も使用されている。そのため、信頼性は高いと考えられる。

最初に手に入ったのは、手動タイプの毒ガス検知器であった。

水鉄砲のようなポンプ式の空気吸引装置がある。これを引くと、検査したい空間の空気が、検知器内に吸い込まれることになる。

本体には、ガラスでできた検知管をはめ込むようになっている。この検知管の中には特殊な試薬が入っており、ガスごとに違う検知管を使う必要がある。

この検知管を空気が通過することになる。検知管の両端は閉じているが、使用時にその部分を破壊して、ガスの検知を行なうようになっている。

検査にあたっては、以下のガスに対する検知管を使用し

た。

イベリット (びらん性)

ルイサイト (びらん性)

フォスゲン (窒息性)

ジフォスゲン (窒息性)

アダムサイト (嘔吐性ガス)

サリン・ソマン・タブン・VX等の神経ガス

クロルシアン (血液毒)

シアン化水素 (血液毒)

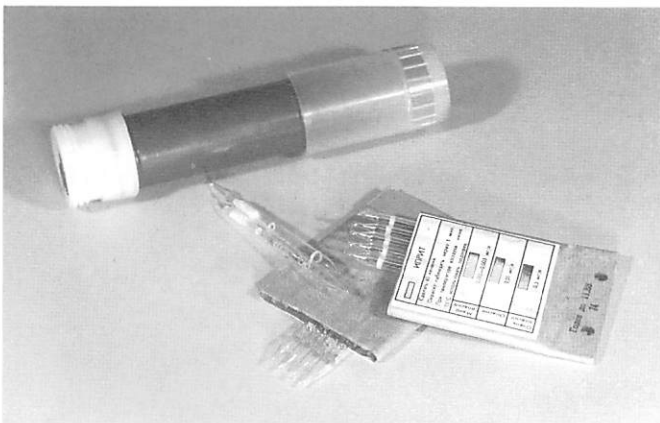
塩化シアン (催涙剤)

クロロピクリン (催涙剤)

クロロアセトフェノン (催涙剤)

等である。

もし、毒ガスが空气中に存在していれば、検知管内の薬



手動検知器

品の部分の色が変わる。これを比色表と比べれば、どの程度の濃度で毒ガスが存在するかわかるようになっている。評価は、「安全」「やや危険」「危険」の3段階。

調査を行なったのは94年1月上旬。

富士宮市と上九一色村にある3つの教団施設

教団とは無関係の富士宮市内の一地域

上九一色村の精進湖湖畔

で検査を行なった。

〈実験結果〉

	イペリット	神経ガス	その他
第1サティアン(富士宮)	やや危険	やや危険	安全
第2サティアン(第1上九)	やや危険	やや危険	安全
第6サティアン(第2上九)	やや危険	やや危険	安全
静岡県富士宮市矢立地区	安全	安全	安全
上九一色村精進湖湖畔	安全	安全	安全

これによって、オウム真理教施設に対して、神経ガスならびにイペリットガスが噴霧されているという一見信じられないような事実が証明されたのである。

◆そしてサリンを検出

この手動式検知器によってイベリットと神経ガスが存在することが明らかになったが、神経ガスの種類を特定するには至らなかった。特別の試薬がなかったためである。

オウム真理教施設の屋外では、日に日に毒ガスの濃度が濃くなっていった。出家修行者は気功法の修行によって何とか乗り越えようとしていたが、それにも限界があった。

気功法の修行によって、毒ガスによると思われる症状は軽減されるのだが、毒ガス攻撃は強まっていく。やがて、修行だけでは攻撃に対処するのが難しくなってきたのである。

毒ガス攻撃が非常に強まった3月、新たな毒ガス検知器を入手することができた。これもロシア製だが、手動ではなく、自動である。

2種類の化学溶液と空気を反応させることによって、大気中に毒ガスがあるかどうか、自動的に検出する仕組みになっている。毒ガスが検出できた場合、「ピー」という検出音を鳴らし、その存在を知らせてくれる。

この試薬を変えれば各種のガスを検出することができるが、今回入手することができたのは、神経ガス・サリンを検出するための化学溶液だけであった。ただしこれは、たまたま入手できたのがサリン用の溶液であったというだけ

で、特に「サリンが存在するだろう」と予期してのことではなかったことを断わっておかなければならない。

この検知器の仕組みを、詳しく解説しよう。図を参照していただきたい。

布テープがある。これがリール1から一定の速度で送られ、リール2に巻き取られるようになっている。

図の3と4の2つが薬品のタンクである。

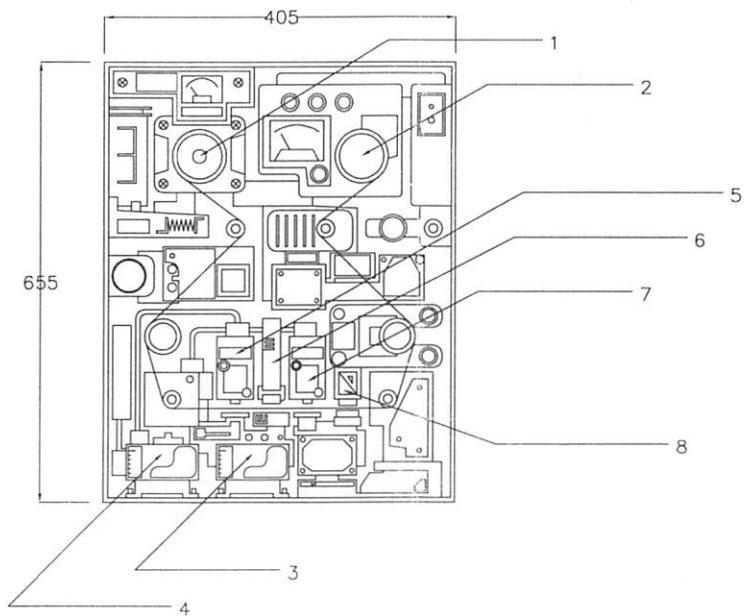
まず、ポンプ5から一定間隔で、赤い試薬 α がたらされる。これがテープに染み込む。

試薬 α の染み込んだテープに、空気が吹き付けられる。6が毒ガスが入っているかどうか調べたい空気を送る送風機である。

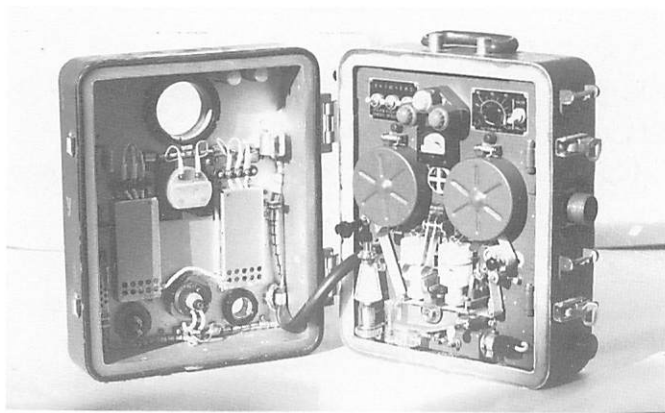
次に、ポンプ7から白色の試薬 β がしたたり落ちる。ここで、空気中にサリンが入っているかどうかは、赤い試薬 α の色が変わるかどうかでわかるのである。

この色の変化を、8の光電比色計によって検知する。光電比色計とは、色を見る機械だ。これでサリンが存在しなければ、青ランプが点灯する。逆にサリンが存在する場合には、赤ランプが点灯し、検出音が鳴るようになっているのだ。

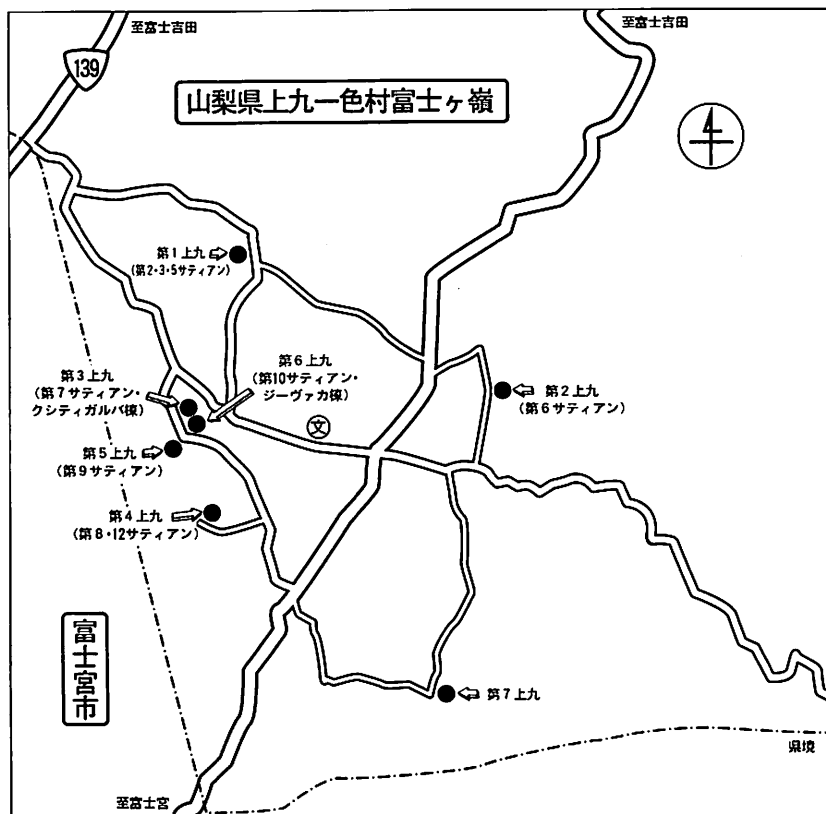
検出は約1分に1回行なわれ、連続的に大気を調べることもできる。



検知器の仕組み



自動検知器



なお、第6上九（第10サティアン他）・第7上九（倉庫群）は、この時点ではまだ存在しなかったため、調査対象となっていない。



**【第3章】
激しい攻撃**

◆ 戦闘機の飛来

最初は小さな点が2つ見えただけだった。

その小さな点がどんどん大きくなって迫ってくる。それは空を飛んでいる以上、やはり飛行機のようなのだ。しかし、その進路は異常だった。

第1上九で作業していた出家修行者たちはその目を疑った。その2機の飛行機はまっすぐに第1上九に向かって飛んでくるのである。

単に飛んでくるというだけではない。それは敷地上空で突然垂直降下し始めたのだ。灰色の機体が突っ込んでくる。だれが見ても疑いようのない状況で、その灰色の2機は第2サティアンに機首を向け、一直線に急降下してきたのである。

両翼の端には何かがついている。戦闘機だ。もしこの体勢でミサイルを発射されれば、第2サティアンは確実に爆破されてしまう。

だが、目に見える攻撃はなかった。戦闘機は第2サティアンのまさに真上で機首を転じ、旋回、そしてアフターバーナーを噴かして急上昇していったのだ。

第2サティアンに戦闘機が来た。

その戦闘機は、オウム真理教の敷地に飛来した航空機の中では初めて確認されたタイプであった。もちろんそれ以

前にも来ていたかもしれないが、確認されたのは初めてということである。

その形の特徴から、機種を特定する作業が始まった。その結果判明したのは、^{きょうがく}驚愕の事実であった。

F/A-18ホーネット。

上九一色村オウム真理教施設上空に飛来したのは、米軍の誇る最新鋭戦闘機であった。アメリカ海軍所属のはずのこの戦闘機が一体なぜ……？

【在日米軍】

日本国内には外国の軍隊が駐留している。それが在日米軍だ。関東近辺だけをとりても、

横 田：在日米軍司令部

第5空軍司令部

第374空輸航空団

座 間：在日米陸軍／第9軍団司令部

横須賀：在日米海軍司令部

厚 木：西太平洋艦隊航空部隊司令部

上瀬谷：第7艦隊哨戒・偵察部隊司令部

第1哨戒航空団司令部

などが存在している。

陸軍や空軍ならともかく、山間の遊牧地にあるオウム真理教第2サティアン上空でわざわざアメリカ海軍機が急降下・旋回・急上昇の訓練を行なう必要があるのだろうか。答えは当然、否である。

しかも、ホーネットの飛来は1度や2度ではない。オウム真理教は何度もこのホーネットの「訪問」を受けているのである。それだけではなく空軍機、さらには陸海空の各自衛隊機も続々と訪れる。

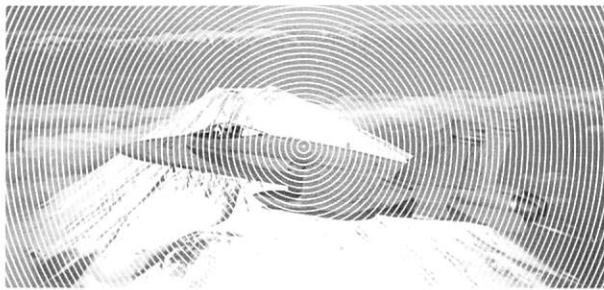
そして、それらの航空機が去った後、出家修行者が急に、しかも大量に体調の不調を訴えるという事実がある。

【マクダネルダグラスF/A-18ホーネット】 McDonnell Douglas F/A-18 HORNET

戦闘機 (Fighter) と攻撃機 (Attacker) の両方の性格を備えたF/A-18ホーネットは、アメリカ海軍、海兵隊などで採用されている最新鋭機である。空対空、空対地双方において非常に高い能力を持っている。現在も改良が続けられ、F/A-18Dまでが実用化されており、さらにF/A-18E/Fの開発も進められている。

核搭載能力、夜間作戦能力などを持ち、数多くの兵器を搭載可能となっている。現在、旧型機に換えてこのホーネットが採用されつつあり、21世紀に入っても主力作戦機として扱われることは間違いない。

今後、第3次世界大戦が勃発するならば、当然主力を担うことになる。まさにアメリカ軍の最新鋭機と呼ぶことができよう。



◆ 仙台の衝撃

オウム真理教ではINS、つまり光ファイバーを使ったデジタル通信の専用回線を使って全国の本部・各支部を結んでいる。この専用線を利用して、93年12月から、麻原尊師の説法が全国の本部・各支部一斉に生中継放送されているのである。

94年3月11日、麻原尊師は仙台からINS説法を行なった。それはつまり、出家修行者だけではなく、道場に来ていた全国の在家信徒も一斉にそのメッセージを受け取ったことを意味する。

今夜のこの仙台支部からの説法は皆さんに大きな衝撃を与えるかもしれない。それは近い未来の予言であると同時に、それから「今までオウム真理教がどのような危険な状態にあったか」の説明を、皆さんにしたいと考えているからである。そして、この日本の国家が、ちょうど今から約2000年前にイエス・キリストを弾圧したユダヤと同じような運命を歩きつつあることについて、皆さんにお話ししたいと思う。

では、この日本を闇からコントロールしている組織等が、今までオウム真理教に対してどのような弾圧をなしてきたか、そしてそれはこの教団が存亡——つまり完全

に存在できるのか、あるいは滅びるのかというこの2つの選択肢——ではなく、単に滅びの運命を歩かされるそのような方向性に、彼らがどのような形で計画をしてきたのかについて話をしたいと思う。

皆さんもご存じのとおり、もともとわたしの目が失明に向かい、そして病にかかりだしたのは89年の初めからである。そして90年にはガンにかかり、そして今、わたしのこの左のこめかみのところに水疱ができています。わたしの口の中には水疱があり、そしてわたしの長男である鏡暉^{あきてる}の皮膚はまさにガサガサ、一般的には「アレルギー反応」と呼ばれる症状を呈している。しかし実際、これはアレルギー反応ではない。わたしはその話を弟子たちに対して、今から2年半前からよく話したものだ。

ではいったいこのガスの正体とは何かというと、これは「イペリットガス」あるいは「マスタードガス」と呼ばれるものである。このマスタードガスとは何かというと、第2次世界大戦中、日本軍がたくさん作った、要するに毒ガス、C兵器である。しかし弟子たちはそれに対して半信半疑だった。

皆さんもご存じのとおり、オウム真理教とロシアとは深い関係がある。そして、すでにロシアにおいては数万人の信徒を有している。そこで、わたしはあるラインを通じてロシアから毒ガス検知器を取り寄せた。そのデー

タから間違いなくイペリットガス、先程言ったマスタードガスの反応が出ていることは間違いない。しかも、それだけではない。神経ガス、あるいは精神錯乱剤と呼ばれるものがオウム真理教に対して、特にあなた方が今まで修行を行ってきた富士山総本部道場を中心とし、第2サティアン、あるいは第6サティアンと呼ばれる空間に対して噴霧され続けてきたことは間違いない事実である。

この間の経緯については、すでに記したとおりである。そして、この尊師の言葉からもわかるとおり、3月11日の時点で、オウム真理教が受けている毒ガス攻撃の内容は、「イペリットガス、その他神経ガスなど」であると認識されていた。

ここで、攻撃の中心となっているガスがイペリットガスとして認識されているのには深い意味がある。イペリットガス等のびらん性ガスは長期的攻撃に向いているらしい。オウム真理教に対する毒ガス噴霧攻撃が数年前から長期的に行なわれているとすれば、イペリットガスが使われているという事実はつじつまが合うことになる。

その後——松本サリン事件が起こるまで——わたしたちは、オウム真理教に対する毒ガス攻撃といえば「イペリットと神経ガス」という認識であった。

さらに尊師の言葉は続く。

このイペリットガスの症状は4期に分けられる。そして、わたしとわたしの家族、弟子たちのすべてがこの4期の必ずどの期かに属しているということである。

なぜわたしがこのような話を今日皆さんにしたのだろうか。それはいよいよわたしの生命もこのまま彼らの攻撃を受け続けるならば、一カ月と持たないと判断したからである。今までわたしは多くの毒ガス攻撃に対してツァンダリー、トゥモ[※]等で対決してきた、そしてガンを消し、あるいは口腔に生じた水疱等についてはそれを消すまでに至った。

しかし、彼らは……毒ガス攻撃を続けている。

※それぞれ誤想法の名称。

で、いったいこれらは何のための監視なのか。それはだれが出、だれが入りの監視だけではなく、自分たちのまいた毒ガスがどの程度効果をあらわし、そしてそれによってオウム真理教の活動がどの程度弱っているのか、あるいは教祖がいつ死ぬのかについての彼らの監視である。

もう一度言おう。わたしが今日皆さんにこの話をしたのはオウム真理教がこのままでは存続しない可能性がある。つまり「みんな特別な病が生じた」とか、あるいは「特別な集団自殺をしたんだ」とかいうかたちで——例

えばそれはバグワン・シュリ・ラジニーシのアシュラムがそうであったように、あるいは去年同じようにアメリカで起きた宗教弾圧で宗教団体が一つつぶされたわけだが——そのようなかたちの形態に、このオウム真理教も持っていかれつつあるということである。

※ブランチ・ダヴィディアンのこと

マスコミではこの説法のごく一部分だけを取り上げ、「オウム真理教は松本サリン事件以前から毒ガスについて詳しかった。怪しい」と論評し、あたかも毒ガス製造を行っていたかのような印象を意図的に与えようとしているが、毒ガス攻撃を受けていたからこそその毒ガスの知識であることは一目瞭然である。

◆なぜ毒ガスで死なないか

オウム真理教は長期間にわたる毒ガス攻撃を受けているにもかかわらず、直接その攻撃が原因で亡くなった者がいない。それはなぜか。

麻原尊師の説法の中で、その理由が明確にされている。

もう一つは「緩急の法則」である。この「緩の法則」と「急の法則」とは、「緩」とは要するにじわじわと攻め、見えない形で滅ぼしてしまう方法であり、「急の法則」とは、逆に——例えばそれはちょうど去年の4月だったと思われるが、アメリカで起きた宗教団体つぶし、FBIの宗教団体つぶしのように——武力を行使したり、あるいは政治的な圧力によって、あるいは司法における圧力によって完全に対象をつぶしてしまう方式である。

（94年3月13日大阪支部にて）

「緩の法」とは「急の法」の反対を意味し、例えば——「急の法」とは射殺をしたり、あるいは毒ガスによっても、例えば急激に生命を奪うような薬剤を使う——のではなく、徐々に徐々に体を弱らせ、組織を弱らせる。

例えば例を挙げるならば、ここにいるティローバも例えば血を吐いたわけだし、あるいは君たちもよく知って

いる正大師であるマハー・ケイマヤヤソーダラーも同じように喉から血が出る、あるいは血を吐く等の現象を起こしている。あるいは、そのままでいて鼻粘膜が破られ出血した者といったら、それはかなりのサマナ[※]がいる。そしてこの特徴のもう一つは視力を弱めるということがある。実際問題、89年から視力を弱め、そして実際今回、完全なる乱視の状態になった者も存在していると。

これは「緩の法」と呼ばれる法則、つまり相手の組織そのものを徐々に弱体化し、そして死滅させる法則である。

(94年3月12日大阪支部にて)

※サマナ=出家修行者

まず「急の法」というのは、即座に現象を現わし、例えば相手を直接的に射殺したり、あるいは一撃で殺すような——例えば第2次世界大戦中に研究されたVXガスとか、あるいはソマンとかサリンとか、そういうもの、あるいは原爆等による——瞬間的な、その対象の生命を断つ方法、これを急の法則であると説きました。しかし、逆に「緩の法則」の方が危険性は大きいだけではなく、大きい対象に対して、その対象を死滅させる場合、有効であることをここで説かなければならない。

(94年3月14日高知支部にて)

つまり、オウム真理教を秘かに葬り去る手段として、イペリット等によって緩やかに弱体化させる方法が使われて

いたということである。急激にオウム真理教の者が死んだならば、その陰謀が明るみに出てしまうだろう。それは陰謀者にとって非常に不都合であることは明白ではないか。

よって、毒ガスによる攻撃だということを悟られないように出家修行者が謎の「病死」を遂げるのが、彼らにとっての理想だったと考えられるのではなからうか。実際、毒ガス検知器で確かめるまでは、出家修行者のだれ一人として自分たちが毒ガス攻撃を受けていることを信じられなかったのだ。

しかし、オウム真理教は真実に気づいてしまった。そして、対策を講じ始めた。オウム真理教の修行者は生き延びる可能性が高まった。この状況に焦った彼ら攻撃者は、第2作戦、つまりオウム真理教を毒ガス事件犯人に仕立てる工作を始めたのではなからうか。

ところでこの3月14日高知支部での説法で、サリンの名前が登場している。しかし、この一連の説法の流れから見ると、ことさらにサリンによる攻撃が特別視されているわけではないことはもうおわかりだろう。もちろん、オウム真理教側が攻撃するというような意志は全くない。

この断片的な言葉を根拠にして「オウム真理教が94年3月からサリン研究をほのめかしていた」などと称するマスコミ報道は、まさに陰湿な意図の下にあるものと言わざるを得ないのである。

◆ 専守防衛

毒ガス攻撃を受けているとわかっていても、オウム真理教では毒ガスマスクを使用しなかった。その理由は、次の説法に説かれている。

では、なぜオウム真理教の科学研究チームが、例えば毒ガスマスクを作らなかったのかについて話をしたい。それをもし作るならば、彼らの思うつぼということになる。

なぜならば、毒ガスマスクがあり、そしてそこにイペリット、つまりマスタードガスが存在する、検知として存在するとするならば「オウム真理教で毒ガスを作ってたんだ」というまたぬれぎぬ・デッチ上げが生じ、それによってオウム真理教に対しての攻撃がいっそう強まると考えたからじっと耐えたのである。

(94年3月11日仙台支部にて)

このときから現在に至るまで、オウム真理教には毒ガス用防毒マスクは存在しない。もちろん、単純な粉塵マスクや、あるいは工業用の防毒マスクはある。しかし、工業用防毒マスクではイペリットやサリンは全く防げない。

市販の工業用防毒マスクのカートリッジには何種類もある。それは、防ぐべきガスごとにカートリッジを換えなければならない。そして、そのカートリッジの中には、イペリット用やサリン用などのものが存在しないのは当然である。しかも、顔面等が露出するマスクの形態そのものが、毒ガスを防ぐのには適さない。口・鼻のみを覆っても毒ガスには全く役立たないのである。

オウム真理教では、こうして毒ガス攻撃を受けていながら、毒ガスマスクによる防御は行なわなかった。それは、毒ガスによって麻原尊師・オウム真理教を攻撃し、しかもばれそうになるとその罪をオウム真理教になすりつける、という攻撃側の計画が完全に予測できたからである。



毒ガスマスクのようなものと報道されたパーフェクト・サーヴェーション・インシエーションの帽子



毒ガスマスク

◆ 尊師を狙う黒い影

毒ガスの最大の攻撃目標は、もちろん麻原尊師であった。3月になって特に激しくなった毒ガス攻撃は、富士宮・上九一色で活動している出家修行者を容赦なく襲ったが、それ以上に麻原尊師に対する攻撃は徹底的なものだったのである。

麻原尊師はしばらくの期間、上九一色に帰れない日々が続いた。その理由の一つとして、麻原尊師が出家修行者たちの命を守ろうと考えられたということがある。もし出家修行者たちとともにいたならば、弟子たちを巻き添えにしてしまう。彼らの狙いが自身である以上、弟子を巻き込まないように……との心配りから、麻原尊師は出家修行者から離れ、各地を転々とするようになる。実際、麻原尊師がたまに上九一色に戻られると、途端に毒ガス攻撃が激しくなる。だが、麻原尊師が上九一色を離れた途端、毒ガス攻撃は弱まったのだ。

その尊師をつけ狙うように、毒ガス噴霧部隊は各地を転々とする。

まず、13日の大阪支部から14日の高知支部に車で移動する際にも、毒ガスが車の中に撒かれていた。麻原尊師はこの移動にあたり、

「毒ガスが撒かれているから、3時間窓を開けっ放しにし

て走るように」

という指示を出されている。3月中旬の夕暮れ時はまだ寒い。それでも車は窓を開けて走り続けた。

3月25日から、麻原尊師一行は都内の某ホテルに泊まった。1日目は何ともなかったが、翌日の深夜、このホテルに毒ガスが撒かれたのである。それは極めて巧妙なやり方であった。

通気口から麻原尊師の部屋に毒ガスが激しく吹き込んできたのである。

ホテルの通気口に、同行者たちがあわただしくガムテープを貼り、応急処置をする。この犯人はわからないが、麻原尊師の行動を完全に把握していたことは間違いない。

その結果、真夜中でありながらホテルをチェックアウトすることになったのである。

ある日、沼津の海岸で、麻原尊師は同行者たちにトレーニングの指導をされていた。そこへ、青か緑色の下地にオレンジの蛍光色のラインの入ったヘリコプターが飛んできたのである。

このヘリコプターは超低空飛行であった。麻原尊師の真上よりも少し陸寄りの空を、海岸と並行に飛んでくる。

「撒いてるなあ」

麻原尊師がおっしゃった。

しかし、そのまま指導は続けられた。このとき、皮膚の

かゆみ、頭痛などを訴える者が出ている。

ヘリコプターはもう一度やってきた。だが、今度は先ほどとコースが違う。海岸と並行して飛んでいるのは同じだが、今度は麻原尊師の真上より海寄りなのである。

2度の飛行の経路が違うのはなぜか。その理由はすぐに判明した。風向きである。この短い間に風向きが変わっていたのだが、ヘリコプターは2度とも風上を飛んでいたのである。

このヘリコプターは、なぜ麻原尊師の風上を執拗に飛行したのだろうか。

さらに4月16日。尊師一行は千葉県に向かった。このころ、一行はしきりに空を眺め、ヘリコプターの写真を撮ろうとしていた。しかし、明るいうちにはなかなか現われない。

暗くなって京葉道路出口付近で、ヘリコプターが待ち構えていた。しかも3機。ヘリは、国道16号線を走る一行を上空旋回しながら追ってくる。取り巻くように、夜空にランプを光らせながら旋回し続けているのである。

目的地に到着すると、今度はヘリコプターはその建物上空を旋回し始めた。これは単なる監視とは考えられない。

◆謎のジェットバック

4月20日、富士宮道路を走る麻原尊師一行の車の前方を、異様にスピードの遅い車が走っていた。タンクを積んだ車である。こちらがスピードを落とすとその車もゆっくり走り、スピードを上げると速くなる。常に一行の前を走ろうとしているのだ。

その車種はジェットバックという。セメントの粉を積んでいる車で、エアでセメントを出し入れするタイプのものである。つまり、毒ガスを撒こうとするなら最適なのである。1車線の間、一行は毒ガス特有の臭いを嗅ぎ続けなければならなかった。

2車線になり、赤信号で横に並んだとき、その不審なジェットバックの異様さが浮き彫りになった。車体に書かれた「(有) Tコンクリート」の文字。その最初の「○○コ」の部分には会社名を消そうとした跡があった。社名のペンキが3文字分、剥がされたようになっているのである。

その後、5月16日にもこのジェットバックが富士山総本部道場前を通過した。ナンバーから同じ車であるとわかったのだが、大きな違いがあったのである。会社名がすべて塗りつぶしてあったのだ。なぜ、4月20日には記されていたはずの社名が塗りつぶされていたのであろうか。

このジェットバックはP-CXZ19Qの改造車で、正式には

「粉粒体運搬車」という。「山梨」ナンバーのこの車両は「フライアッシュの専用運搬車」とされていた。その容積は12330リットル、比重は0.80である。この「フライアッシュ」とは、セメントの材料である。しかし、特殊なもので、普通のセメントの材料には使われない。つまり、通常のコンクリートには不要なものなのである。この珍しい原料であるフライアッシュ専用車とされているジェットパックは、何のためにオウム真理教の周辺に出没するのか。

なお、この「Tコンクリート」社のジェットパックがほかに3台、富士山総本部道場前を走っている。これらはすべて「バラセメント専用運搬車」となっていた。そして、3台とも先の不審なジェットパックと違い、個人名義で「静岡」ナンバーとなっている。

この3台のジェットパックの所有者T氏は、もう1台、草色で社名が入っていないジェットパックを所有している。これは富士山総本部道場前で目撃されたときには「京都」ナンバーだったが、後に「静岡」ナンバーに変わった。

つまり、「Tコンクリート」には、毒ガス噴霧が疑われる「山梨」ナンバー・社名なしのジェットパック、同じく社名なし・「静岡」ナンバー、そして社名入り・「静岡」ナンバーのジェットパックがあるということになる。

社名を隠したコンクリート材料運搬車が、麻原尊師・オウム真理教施設周辺に出没していた。ただし、この背後にどのような力が動いているかはわからない。

◆ 死を招く黄色い粉

4月21日午前2時ごろ。

千葉県某町にいた尊師一行に、自動車が突撃してきた。

正確にいうならば、尊師一行の車が並んでいる駐車場へ、黒のスープラが衝突したのである。駐車場は少し高くなっており、スープラはその壁に激突、大破した。車の警備をしていた者の証言によると、舞い上がったガラス片が上から降ってきた上、煙も上がっていたのである。もしスープラが爆発炎上していたら、一行の車はすべて巻き込まれて爆発していたところだった。

この「事故」にも不審な点は極めて多い。このスープラが道から外れて一直線にこの駐車場を「狙って」いたことが目撃されている。また、運転手は窓を開けていた。4月の真夜中である。この寒い時期に、100キロ近くの猛スピードで飛ばしていて、窓を開けるような人がいるだろうか。

そのほかにも不審な点は多いが、本書の主旨とはずれするため、省略する。ただ、この事故が純粹に「事故」と言い切れない要素を持っていることは間違いない。

さて、この事故の翌朝、この上空を飛行機が飛んでいった。それは、旅客機などではなかった。明らかに軍用機である。写真が撮れなかったので断定はできないが、それは対潜哨戒機または輸送機であった。

その飛行機は1時間ほど経って再び舞い戻ってきた。激しく、大きなプロペラ音が響きわたる。この軍用機は超低空をかすめていったのである。

そこへ、再びプロペラの音が響く。今度はヘリコプターである。このヘリは低空を飛んでいった。しばらくすると、再びやってくる。沼津の海岸のときと同じく、必ず風上を飛んでいくのである。しかも、この日は特に念入りであった。2度や3度ではなく、何度も何度も往復しているのがあった。

ところでこの日、建物の屋上には数多くの黒いハチが飛んでいた。このハチは恐るべき事実を伝えてくれることになる。

翌朝、つまり22日の早朝、車の上に黄色い粉がたくさん付いていた。ほこりではない。かなり粒子が大きいのである。

その周囲には、数多くの黒いハチが死んでいた。どのハチも黄色い粉にまみれて死んでいるのである。瀕死だが、生きているハチもいた。ハチは、まず粉にまみれて飛べなくなる。よたよたと歩くことしかできない。次に体の力が失われ、やがてバタバタと死んでいくのである。

この黄色い粉は、やはり前日の激しい毒ガス攻撃と関係があると思われる。小動物なら殺してしまうだけの致死量の毒が、麻原尊師を狙って噴霧されていたのだ。

◆ナンバープレートのない車

4月22日。

麻原尊師に随行することの多い車が中央高速谷村パーキングエリアで待機していたところ、毒ガス特有の症状が起こり始めた。そのとき横に停まっていたのは4トンアルミトラック。車体の横には黄色く「T〇〇〇〇〇〇〇」という文字が書かれている。

その車を見た出家修行者がおかしいと感じたのは、ナンバープレートを目撃した瞬間である。そのプレートは、数字が削られていたのだ。業務用の緑のナンバープレートの白い数字が削り取られている。これでは、近くで見なければ決してナンバーを判別することはできない。

そのナンバーは「名古屋11□99*+」であった。

この4トンアルミは、名古屋のT株式会社のものである。後日、この会社の「S倉庫」で、同様にナンバープレートの削られた4トンアルミがもう1台発見された。このトラックのナンバーは「名古屋11□92*+」。先に谷村パーキングで目撃されたものと、数字が1つしか違わない。

前に目撃されたジェットパックと同様、その正体をわからないようにした不審な車が近づき、その後、体調の不調などが現われる。このように、攻撃者たちはさまざまな手を駆使して秘密裏に攻撃を繰り返しているのである。



**【第4章】
毒ガスとの闘い**

◆毒ガス資料を求めて

毒ガスとは何か。

その性質や防御法、毒ガスによる健康被害などについて調べようと考え、書店、そして図書館に向かった。そのような文献資料は、素人でも手に入れられるのだろうか。

それは意外なほど簡単に見つかった。生物化学兵器全般について最も要領よく概説しているのが、中公新書から出ている『生物化学兵器』（和気朗著）である。

また、過去の資料を集大成した大型本もあった。清水勝嘉著『生物化学・毒素兵器の歴史と現状』である。不二出版から発行されている1万5000円の豪華本だ。

その他、図書館にはいろいろな文献がそろっている。宮田新平著『毒ガスと科学者』光人社、永瀬唯著『市民よ毒ガスマスクを装着せよ』グリーンアロー出版社、など。

わたしたちの知りたい情報——つまり毒ガスとはどのようなものか、その症状はどのようなものか、毒ガスを防ぐにはどうしたらよいのか、過去にどのような使われ方をしてきたのか——というようなことについては、これらの文献、特に最初の2冊を参照するだけでかなり詳しくわかった。これらの本はいずれも広く市販されているものであり、だれもが手に取ることができるものだ。特に、中公新書の『生物化学兵器』は、調べた図書館すべてにあった。

なお、念のために申し添えるならば、これらの資料には

「サリンの製法」あるいは「サリンの撒き方」などは一切載っていない。わたしたちも、毒ガスの製法などに関しては、ここ数カ月の間にマスコミで報道された以上のことは皆目わからないのである。

また、出家修行者の症状が毒ガスの被害症状と一致するかどうか、正確に知る必要があったため、医学文献を当たった。特に、びらん性ガスの症状と比較するため、皮膚病学(Dermatology)などの文献を調べた。これを探し出すには多少時間がかかったが、それでも十分に目的を果たすことができたのである。

以下に、オウム真理教が闘った敵＝毒ガスの素性を明らかにするため、以上の文献に書かれていたこと、つまりだれもが入手できる情報をまとめてみた。読者の皆さんも、少し丹念に調べれば、これ以上に詳しい内容を知ることができるだろう。

◆毒ガスとは何か

毒ガスは化学兵器に含まれる。化学兵器には、

- 1 毒物（毒ガス、毒液）
- 2 発煙剤
- 3 発色・蛍光剤
- 4 焼夷剤

の4種類があるが、その中でも中心的なものが毒ガスなのである。毒ガスには次の種類がある。

- 1 神経性ガス（Gガス）……………致死剤
- 2 びらん性ガス……………致死および無能力剤
- 3 窒息性ガス……………致死剤
- 4 血液ガス（血液毒）……………致死剤
- 5 嘔吐（くしゃみ）性ガス……………^{じょうらん}擾乱剤
- 6 催涙性ガス……………擾乱剤
- 7 精神錯乱性ガス……………無能力剤

松本・東京地下鉄等で使用されたと「断定」されているサリンは、この中の神経性ガスに属する。これは非常に致死性が高い。また、世界的に毒ガスの中でよく研究されているのが、この神経性ガスだという。

一方、オウム真理教攻撃にあたっては、各種の毒ガスが使用されている。中心となるのがイペリットガス（びらん性）であり、一部神経性ガス（サリン、VX等）、精神錯乱性ガス（BZ等）なのである。つまり、オウム真理教攻撃にあたっては、致死剤ではなく無能力剤——すぐに殺すのではなく、その活動能力を奪うための毒ガス——が使用されていることがわかる。

また、複数の種類の毒ガスを混合して使用するのが一般的だといわれる（『生物化学兵器』より）。一般報道では、オウム真理教が「サリン攻撃」を受けていたと主張しているかのようになっており、「致死ガスであるサリンの攻撃を受けながら死なないのはおかしい」と称している。しかし、実際には、サリンは補助的に薄めて使用されているようである。

攻撃者の目的は、オウム真理教を即刻殺戮^{さつりく}することではない。毒ガスによる攻撃そのものが存在したと気づかれなないように噴霧し、徐々にオウム真理教の活動を弱め、ゆっくりと生殺しにしていくことである——と、この攻撃の形態から推測できる。

では、主な毒ガスの性質について、詳しく見てみよう。

◆びらん性ガス——イペリット

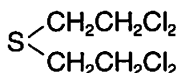
オウム真理教攻撃に最も頻繁に使われているのが、このびらん性ガスのイペリットガスである。

1917年7月、第1次世界大戦の西部戦線においてこのガスはドイツ軍によって初めて使用された。ドイツ軍での名称は「黄十字」。イーブル (Ypres) 攻防戦で使われたため、フランス軍は「イペリット (Yperite)」と呼ぶ。

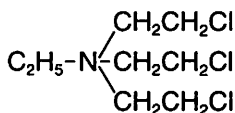
純粋なものは無色無臭であるが、不純なものはカラシ臭がする。このため、イギリスでは「精製マスタード」と呼んでいる。米軍識別コードは「HD」。旧日本軍では、ドイツ式のもの「きい1号甲」、フランス式のもの「きい1号乙」と呼んでいた。

このイペリットガスには4種類ある。

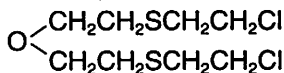
精製マスタードガス (HD/硫化ジクロルエチル)



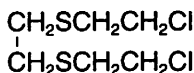
ナイトロジェン・マスタードガス



T剤 (O-マスタード)



Q剤 (セスキ・マスタード)



また、精製マスタードとTとの混合物(HT)や、Qとの混合物(HQ)なども存在する。これらは気象条件・運搬方法などによって使い分けられる。

このイペリットガスはびらん性ガスである。「びらん」とはただれのことであり、ガスが触れた部分をただれさせる。特に皮膚、眼、鼻、そして気管を侵し、最終的には死に至らしめることになる。つまり、危険なのは吸った場合だけではなく、皮膚につくだけでも被害を受けることになるのだ。

イペリットガスは、濃度によってはもちろん即効性もあるが、実際には長期的な攻撃によって気づかれないうちに敵を弱めるために使用されることが多い。

「イペリットは使い方によって、一時的に盲目にしたり、手足に水疱などの損傷を引き起すので、無能力化剤の一種として、最近、その点が改めて注目されている」(『生物化学兵器』より)という記述は、それを裏付けている。

このガスを長期的に曝露(ばくろ) (ガス等を浴びること) した場合の症状を次に示すことにしよう。これらの症状は4期に分けられる。

【イペリットガス曝露による症状】

〔第1期〕

眼・鼻・咽喉および気道粘膜

刺激痛（眼）、鼻血

皮膚

症状なし

全身

症状なし

〔第2期〕

眼・鼻・咽喉および気道粘膜

急性の充血、浮腫（＝むくみ）、分泌過剰、

急性結膜炎、角膜腫脹（90%）、角膜潰瘍（10%）

（異物混入感、疼痛、まぶしさ、眼瞼けい変）、

鼻汁過多、くしゃみ、鼻血、細かい咳、しゃがれ声

皮膚

症状なし

全身

症状なし

（皮膚、全身症状は数時間～数日の潜伏期をもって
発症してくる）

〔第3期〕

眼・鼻・咽喉および気道粘膜

流涙過剰、疼痛。

鼻汁は2次感染を起こし、化膿状態となる。

声帯浮腫増加し、しゃがれ声進行、発声困難となる。

皮膚

紅斑・搔痒・感覚過敏が、皮膚曝露部および発汗・摩擦部（脇の下、外陰股間部）に現われる。

全身

嘔気、嘔吐、腹痛が間歇的に起こる。

出血性下痢は重篤だが、まれ。

[第4期]

眼・鼻・咽喉および気道粘膜

びらん、潰瘍、出血、浮腫、壊死、剥離が進行。

2次感染が加わる。

皮膚

紅斑部が浮腫化し、水疱が生じる。破れるとびらんと
なり、周辺部にさらに水疱が生じる。

2次感染を起こす。難治性となる。

全身

肺水腫、気管支肺炎により、発熱。

頻脈、呼吸困難が重篤化。

2/5は死亡（イラン・イラク戦争）。

呼吸器の障害が死因となる。

死亡は曝露2日目～6週間の間に生じる。

皮膚の治療は、感染がなくとも6週間以上かかる。

[慢性期]

骨髓形成不全（白血球減少、血小板減少、貧血）、
発ガン等

(参考文献)

International Journal of Dermatology Vol.30,
October, 1991

Arch Dermatol Vol.127, August, 1991

Annals of Emergency Medicine Vol.21, March,
1992

Journal of Forensic Sciences, May, 1991

つまり、最終的には皮膚の湿疹、胸の締めつけ、出血、
心臓の苦しきなどによって死に至る。また、後遺症として
肺ガンの発生、そのガンの腸への転移なども見られる。

また、このガスの症状には再現性がある。つまり、ガス
がなければ症状は治まるのだが、再びガスの存在する空間
に入れば症状がすぐに復活する。つまり、このガスの被害
者は体の中に爆弾を抱えているようなものなのだ。

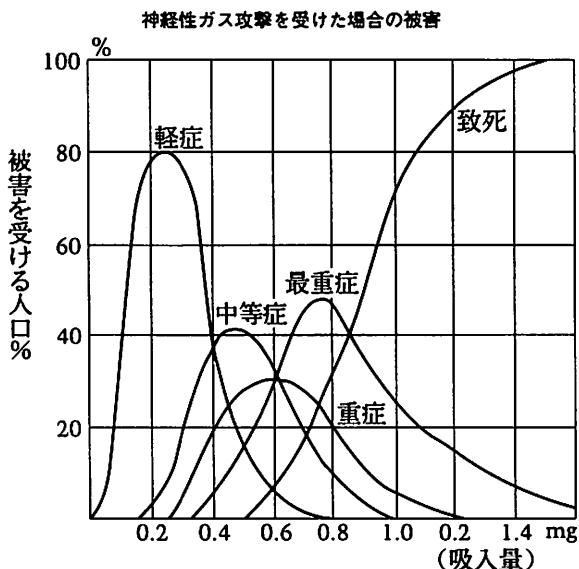
「資料によると、このイペリットガスの症状は4期に分
けられる。そして、わたしとわたしの家族、弟子たちの
すべてが、この4期の必ずどの期かに属しているという
ことである」 (94年3月11日仙台支部 麻原尊師説法にて)

「右手のここにあるできもの、これはイペリットガスによるできものである。例えばここにある水疱、これも同じようにイペリットガスによる水疱である。これらの水疱やできものができているということは、すでに肺はかなり侵されていると見た方がよろしい。したがって、体力等の消耗がなされた後は、気管支喘息^{ぜんそく}あるいは気管支炎のような症状が出る」

(94年3月26日杉並道場 麻原尊師説法にて)

◆神経性ガス——サリンとVX

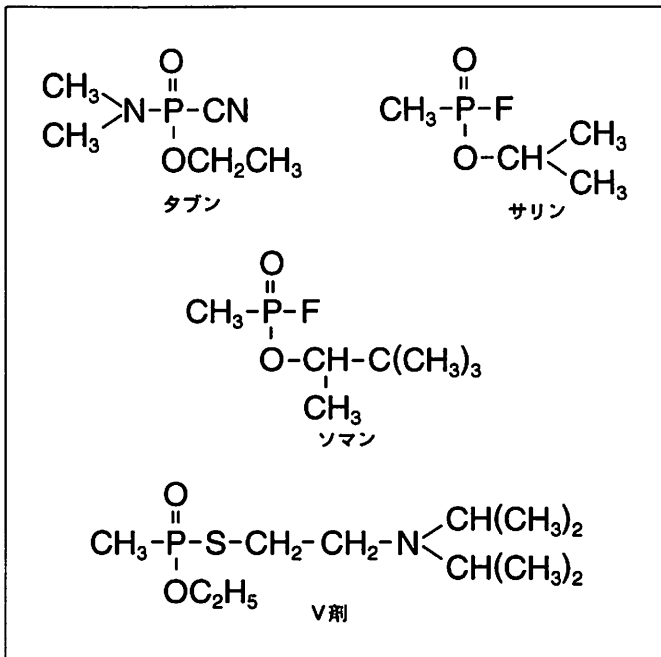
オウム真理教施設周辺の大気から検出された毒ガスは、びらん性ガスのイペリットだけではなかった。神経性ガス、特にサリンとVXが検出されている。神経性ガスはそもそも致死性のものだが、濃度を薄めることによって、やはり慢性的効果を狙ったものと思われる。



吸入量が0.5mg以下なら、致死性の神経性ガスでも死には至らない（『生物化学兵器』より）

神経性ガスにはG剤とV剤の2種類が存在する。第2次大戦中にドイツ (German) で開発されたG剤には、1938年開発のタブン (GA)、そしてサリン (GB)、ソマン (GD)、エチルサリン (GE)、エチルソマン (GF) 等がある (カッコ内はいずれも米軍識別コード)。これらに共通するのは、5価のリンを含むことである。

また、これをさらに強力にしたV剤も各種存在している。特に有名なのが VXガスである。



【生物化学・毒薬兵器の歴史と現状】より

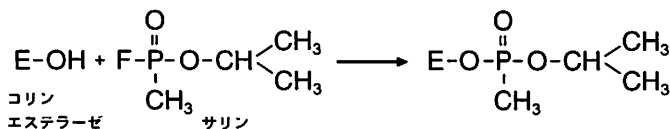
この神経性ガスは、どのような効果を及ぼすのだろうか。
わたしたちの全身の筋肉は、脳から神経を通じて信号を受けて縮んだり伸びたりして動いている。

この神経の末端と筋肉の間には10万分の1 mmという小さな隙間がある。脳からこの神経末端まで信号が伝わると、アセチルコリンという物質が出て、この小さな隙間を埋め、筋肉に信号が伝わることになる。

しかし、アセチルコリンがずっと存在していると、筋肉は緊張したままになってしまう。そこで働くのがアセチルコリンエステラーゼ（略してコリンエステラーゼ）という酵素である。この酵素は、神経末端と筋肉の間のアセチルコリンを、コリンと酢酸に分解する働きを持っているのである。

サリンなどの神経性ガスは、このアセチルコリンエステラーゼという酵素を破壊してしまう。

サリンとアセチルコリンエステラーゼの反応図



(「生物化学・毒素兵器の歴史と現状」より)

【神経性ガス曝露による症状】

[局部の曝露後]

〈ムスカリン様作用〉

瞳孔

縮瞳（ひとみが小さくなる）、一般的に縮瞳最大（ピンポイント）になる。左右不ぞろいの場合も

毛様体

前頭の頭痛、焦点調整時の目の痛み、視覚不明瞭。
嘔気と嘔吐もある

粘膜

充血

鼻粘膜

鼻漏、充血

気管支

胸の引っ張り、呼気あるいは分泌の増加を示す気管支
収縮を伴う喘鳴、咳

汗腺

液体に曝露された部位で発汗

〈ニコチン様作用〉

横膜筋

液体に曝露された部位でけいれん

[全身に吸収された後]

〈ムスカリン様作用〉

気管支

胸の引っ張り、呼気あるいは分泌の増加を示す気管支収縮を伴う喘鳴、咳、呼吸困難、肺水腫

胃腸

食欲不振、悪心、嘔吐、腹部けいれん、胸焼けとおくびを伴う上腹部および胸部下の引っ張り、下痢、しぶり腹、不随意の排便

汗腺

発汗増加

唾液腺

分泌増加

涙腺

流涙増加

心臓

軽度の徐脈

瞳孔

軽度の縮瞳、ときどき左右不ぞろい、後に著明な縮瞳

毛様体

視力障害

膀胱

不随意排尿

〈ニコチン様作用〉

横紋筋

疲れやすい、軽度の脱力感、単収縮、繊維束性攣縮^{れんしゅく}、けいれん、呼吸困難とチアノーゼを伴う呼吸筋を含む
全般的な脱力感

交感神経節

蒼白、血圧上昇

中枢神経系

めまい感、緊張、不安、神経過敏、情動不安、多夢、不眠、悪夢、頭痛、振顫^{せん}、無関心、逃避と抑うつ、多眠、精神の集中困難、回復緩徐、錯乱状態、言語不明瞭、運動失調、全身脱力感、反射を欠く昏睡、チェー
ンストーク呼吸、けいれん呼吸困難とチアノーゼを伴う呼吸、循環中枢の抑制と血圧の下降

※ムスカリン様作用＝副交感神経末梢刺激作用。アトロピンで打ち消すことができる。

※ニコチン様作用＝横紋筋に対する作用。アトロピンで打ち消すことができない。

【有機リン剤による中毒症状】

〈軽症〉

食欲不振、胸部圧迫感、発汗、よだれ、嘔気、嘔吐、腹痛、下痢、倦怠感、不安感、頭痛、めまい

〈中等症〉

軽症に加えて

視力減退、縮瞳、顔面蒼白、筋繊維性けいれん、血圧上昇、徐脈、言語障害、興奮、錯乱状態

〈重症〉

失禁、縮瞳、気管支より分泌増加（口から泡を吹く）
湿性ラ音、肺水腫による呼吸困難、意識混濁、昏睡、
体温上昇（37～38℃）、全身けいれん、呼吸マヒ、
死に至る。

※有機リン剤＝神経性ガスと有機リン農薬中毒症状は共通しているため、関連づけた方が理解しやすい。そのため、ここでは有機リン剤中毒症状も示すことにした。もちろん、神経性ガスの症状はそのまま当てはまる。

(参考文献)

清水勝嘉『生物化学・毒素兵器の歴史と現状』不二出版

神経性ガスを致死量以上に浴びると、呼吸筋がマヒするため、窒息死する。手足がマヒし、顔面筋肉がひきつり、脂汗を流し、顔面蒼白となって、けいれんしながら死んでいくのである。

【精神錯乱ガス——BZ】

3-キヌクリジニル-ベンジレートという化学物質が、米軍識別コードでBZと呼ばれる化学兵器である。対象を殺すのではなく、行動力を奪う無能力剤として用いられるもので、オウム真理教攻撃にもこの毒ガスが使用されている可能性が高い。

BZは一時的なマヒ状態、盲目状態、あるいは音が聞こえないようにする力を持っているとされる。ただし、殺傷能力はほとんどないようである。

◆毒ガス防御法

毒ガスを防ぐ方法としてだれもが真っ先に思いつくのは、やはり防毒マスクであろう。実際、オウム真理教強制捜査にあたって、ものものしい防毒マスクをつけた警察官の姿が報道された。

しかし、あのマスクがサリン対策というのであれば、実は警察は本気ではなかったという証拠になってしまうのである。

窒息性ガスや血液毒に関しては、それに対応するマスクをつければ防ぐことができる。しかし、サリンをはじめとする神経性ガス、そしてびらん性ガスは、鼻や口から吸うだけではなく、皮膚に付着するだけでも影響があるのである。つまり、地下鉄サリン事件のときに見られたような全身防毒衣を用意しなければ、サリンを防ぐことはできない。マスクだけではサリンを防ぐことができないのは、最初からわかっているのである。

つまり、あの大げさな防毒マスク姿も、サリンに対しては全く役に立たない。このことは警察もわかっていたはずなのだが、あえてあのような装備を行なったのはマスコミに対するデモンストレーションでしかなかった、ということを図らずも自ら暴露してしまうという結果になっているのである。



さて、オウム真理教では、我が身を我が身で守る必要があった。そこで残された方法が、空気清浄機の開発と治療薬の使用だったのである。

◆コスモクリーナー

毒ガスは、化学的手段によって分解し、毒性を奪うことができる。

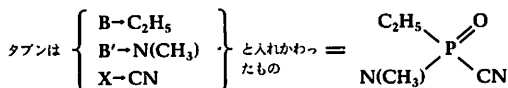
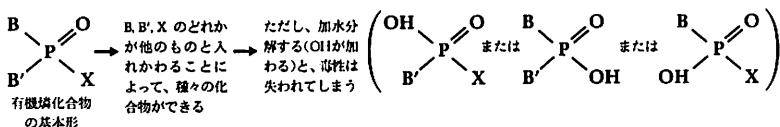
まず、イペリット等びらん性ガスに対しては、酸化させることによって毒性をなくすことができる。

日本では、旧日本軍・自衛隊を通じて、サラシ粉（次亜塩素酸カルシウム、 $\text{Ca}(\text{ClO})_2$ ）を撒く方法が採用されている。サラシ粉に含まれる塩素酸（ ClO ）が、イペリットを酸化するのである。

逆に、サリン等神経性ガスは、アルカリによって加水分解することができる。

「有機燐化合物は有機化学的には、図7に示した一般式であらわされる。B・B'・Xのどの一つがOHと入れかわる——すなわち加水分解されただけでも、まったく毒物としての作用は消失してしまう」（『生物化学兵器』）

図7 有機燐酸系化合物の構造



（『生物化学兵器』より）

オウム真理教の科学的毒ガス防御法も数々の試行錯誤を繰り返したが、最初はオゾン発生器の製作から始まった。サラシ粉よりも10倍以上酸化力の強いオゾンを空中に撒き散らすことによって、空中のイペリットを酸化しようという試みである。これは効果を発揮した。

しかし、散布されているのはイペリットだけではなく、少量でも効果を発揮する神経性ガスも含まれていた。そのため、空中に水酸化物を噴霧する方法も採られたのである。市販されているような加湿器を使用してアルカリ溶液を空中に撒き散らすことになった。

これらの方法によって毒ガス被害は軽減したが、いくつかの問題があった。

一つは、空中散布の効率が悪いこと。まんべんなく確実に毒ガスを酸化・還元することは難しい。

また、オゾンそのものが毒性を持つことが挙げられる。言うなれば「毒をもって毒を制す」という状態だったのである。そこで、本格的な空気清浄機製作が始まった。

空気浄化装置は「コスモクリーナー」と命名された。このコスモクリーナーにもさまざまなタイプがある。

最初に完成したのが、屋外設置型大型コスモクリーナーである。第7サティアンや清流精舎の横の、巨大な塩ビ管が鉄骨で支えられた姿はよく報道されているようだ。現在、より効率的な小型コスモクリーナーが完成しているので順次撤去されてしまっているが、94年6月の完成時にはすべてのサティアンに数台ずつ設置されていた。警察によって「サリン工場」と名指しされた第7サティアンだけに設置されたのではないことを強調しておきたい。

さて、この屋外設置型コスモクリーナーの構造について、簡単に説明しよう。

まず、ブロワーによって空気を取り入れる。当初は毒ガスに汚染された外気を取り入れて、内部に浄化された空気を送り込む計画であったが、あまりにも外気の毒ガス濃度が高すぎるため、建物内部の空気を循環させることになった。

取り入れられた空気は、まず酸のシャワーを浴びることになる。この酸は、下のタンクからポンプで汲み上げられ、塩ビ管の上部から降り注ぐ。空気は下から上に吹き上げられ、ここで酸化させられることになる。つまり、イペリットはここで分解してしまう。このとき、空気と酸の接触面積が大きくなるよう、小さなイガグリ状のもの（ヘッジ）を詰めることによって酸化効率が上がった。なお、このヘッジもオウム真理教のプラスチック製造技術によって製造し

たものである。

酸化させられた空気は、フィルターで酸を除いた後、アルカリのシャワーにさらされることになる。この仕組みは、酸部分と全く同様だ。このアルカリによって、サリン等神経性ガスが無毒化されることになる。

酸化・還元後、最後は水にさらされる。水に溶ける有毒物質は、ここで空気から取り除かれることになる。

最後に、超高性能フィルターが存在する。これは微細な塵、粒子等を取り除くもので、放射性物質を含む極めて小さい粒子から細菌・ウイルス等も除去することができるものである。オウム真理教では、来たるべき第3次世界大戦では化学兵器のみならず生物兵器・核兵器が使用されると考えている。この3種を総称してABC兵器、またはCBR兵器などと呼ぶが、このコスモクリーナーは、核兵器の直撃を受けない限り、毒ガス・細菌兵器・死の灰による放射能被害をすべて防ぐことができるように考案された。

こうして完全浄化された空気が再び室内に送り込まれる仕組みになっている。

この製造には約1カ月かかった。設計に始まり、ポンプや塩ビタンクの製造、そして全体の組み立てに至るまで、極力自分たちの力で造ることになったのである。

このコスモクリーナーが稼働し始めた94年6月から、毒ガス攻撃そのものは弱まっていないにもかかわらず、健康被害を訴える者が減少したことは特筆すべきであろう。空中にただオゾン・アルカリを撒き散らすより、集中的に浄

化するコスモクリーナーの方が効率がいいのは当然である。

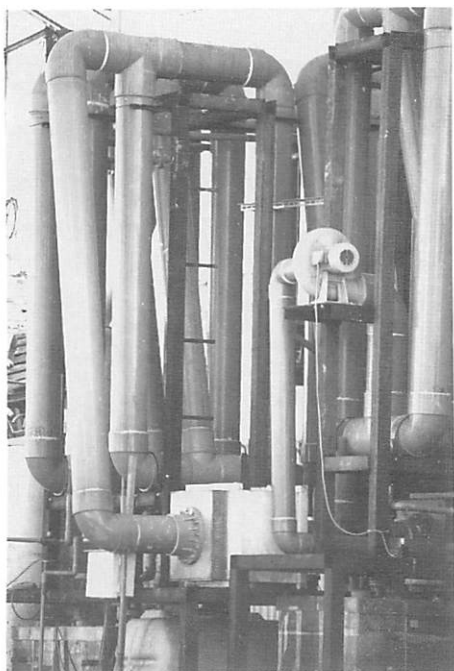
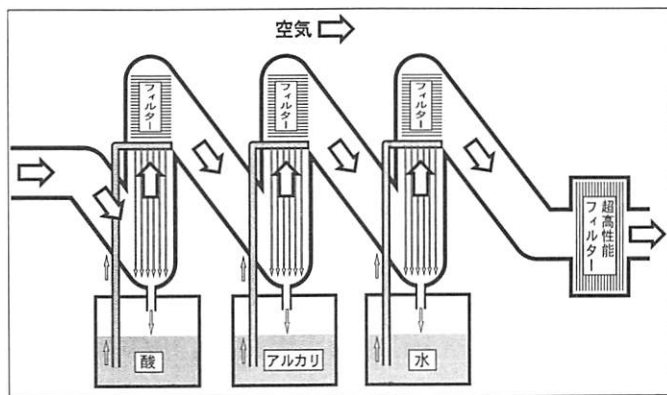
なお「このコスモクリーナーの性能を確かめるために、自分たちで毒ガスや細菌兵器を作ったのではないか」と考える人がいるようだが、それはあり得ない。なぜなら、外気は十分に毒ガス等で汚染されており、コスモクリーナーを稼働させるだけでその効果は確認できたのである。

この大型コスモクリーナーの欠点についても述べておこう。それは、メンテナンスが非常に煩雑であるということである。非常に強い酸・アルカリを使用しているため、その扱いが極めて難しい。この酸・アルカリを扱うための化学班が設置されたほどである。

なお、この化学班は酸などを浴びる危険があったため、「耐酸衣」という特殊な服に身を包んでいた。「消防服のような奇妙な服に身を包んだ人を目撃した」、つまり防毒衣を着ているような人がいた、という証言は、おそらくこの耐酸衣のことを指しているものと思われる。

そして、さらに効率の良い浄化装置を探して、オウム真理教科学部門は検討を続けた。

この94年6月後半から、オウム真理教では部署名に「省庁」の呼び名を取り入れることになった。世間では「官僚制」うんぬんと称しているが、当の出家修行者は単に名称が変わったという程度の出来事にとらえたものである。さて、この名称変更に伴い、コスモクリーナーの開発・製造



屋外型コスモクリーナー

は「科学技術省」担当、そして設置・メンテナンスに関しては「防衛庁」が担当することになった。

防衛庁という名称は物々しいが、実質的にはこのコスモクリーナー（各種）の設置とメンテナンスのみがその担当作業である。つまり、防衛庁という名称には「外部からの毒ガス・細菌兵器攻撃に対して防衛するコスモクリーナー整備担当」という意味しかない。

この名称をとらえて「オウム真理教の防衛庁は暴力組織」などどこじつける人もいるようだが、「専守防衛」に徹する点では、日本の防衛庁よりも徹底しているのである。

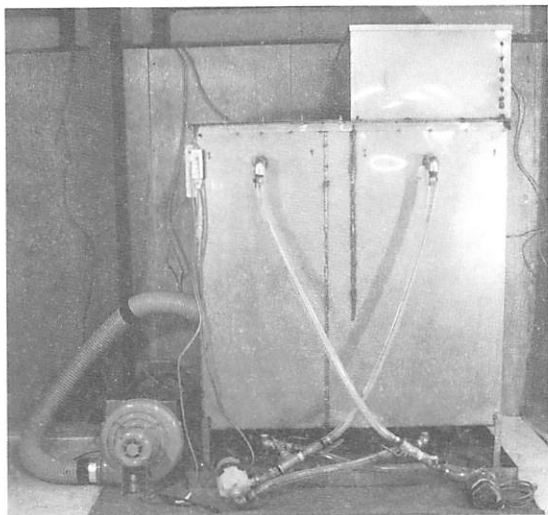
その後もいくつかの試行錯誤を繰り返して、室内型コスモクリーナーが完成した。これが南青山・東京総本部道場や各サティアン内のテレビ取材等で報道された銀色の四角いものである。これは、基本的な仕組みは最初の大型コスモクリーナーとあまり変わらない。

まず、ブロワーで空気を取り入れる。次に酸の代わりにオゾンで酸化する。それをアルカリに通し、さらに水を通して、最後に超高性能フィルターを通す。小型ながら、大型コスモクリーナーの機能を完全に備えているといえる。もちろん、ステンレス溶接から消音器の製造に至るまで、自前で行なった部分が多いことは前と同様である。

このタイプに関して、東京理科大学教授（元・東京大学教授）の森謙治氏がこう語っている。

「空気浄化装置のコスモクリーナーというやつは、わたく

し青山で見せていただいたけど、わたしはあれは合理的にできていると感じました。つまり、イペリットはオゾンで酸化して駄目にする。サリンはアルカリ性、水酸化ナトリウムの水溶液で処理することによって加水分解する。ですからあれは、プロテクターとしてはきちっとしているという具合に考えます」(4月1日「朝まで生テレビ」より)



室内型コスモクリーナー

最新型コスモクリーナーは、先の屋外型・室内型と浄化方法が完全に異なる。それは、化学変化を利用するのではなく、活性炭を利用しているということである。

活性炭は、日常用品でも冷蔵庫や靴の臭い取りに使用されている身近な物質である。

「吸着剤として気体あるいは蒸気を吸着し、溶剤の回収、

ガスの精製に、あるいは液体と混合して、溶剤の精製、脱色などに用いられる」(『岩波理化学事典』)

活性炭型コスモクリーナーでは、7種類の活性炭を使用している。活性炭の種類によって、吸着する物質がそれぞれ異なるためである。ただし、活性炭は毒ガスを分解することはない。毒ガスを吸着するだけであるため、長期間使うと活性炭そのものが毒まみれという状態になってしまうのである。そのため、定期的に活性炭を交換しなければならない。このような不便さはあるものの、その欠点を打ち消して余りある効果が実際に現われている。

毒ガスを吸着した活性炭を再生し、再利用する計画も始まっていた。ただし、95年3月以降続いている弾圧のため、この計画は実用化されるに至っていない。



活性炭型コスモクリーナー

この活性炭型をさらに小型にしたものが、車用コスモクリーナーである。ジュラルミン製と報道されているが、実際にはステンレスである。富士宮・上九一色の屋外に駐車しているだけで車の内外が毒ガスに汚染されるため、運転者・同乗者の生命を守るために開発された。



車用コスモクリーナー

このように、数々のコスモクリーナー開発によって、毒ガスそのものを分解、あるいは除去するシステムが整えられていったのである。もしこの空気浄化装置がなかったならば、オウム真理教出家修行者から毒ガスによる死者が続出していたことは想像に難くない。

◆ 解毒剤の使用

地下鉄サリン事件の報道で有名になった「PAM」など、毒ガスの影響を弱めるための解毒剤も、空気清浄機と並んで使用された。

神経性ガスに対しては、次のような治療法がある。

アトロピン：2～3mg筋肉注射または静脈注射。

散瞳まで3～10分間隔で繰り返す。

オキシム：PAM-2 1～2g静脈注射または0.5g/h筋肉注射

オビドキシム (LUH6) およびトリメドキシムを
125～150mg静脈注射

オキシム錠を2～4錠あるいはそれ以上を投与

他の薬剤：けいれんにはジアゼパム5～10mgをゆっくり
静脈注射

全身機能の維持：強心剤、抗ヒスタミン剤、抗生剤

(『生物化学・毒素兵器の歴史と現状』より)

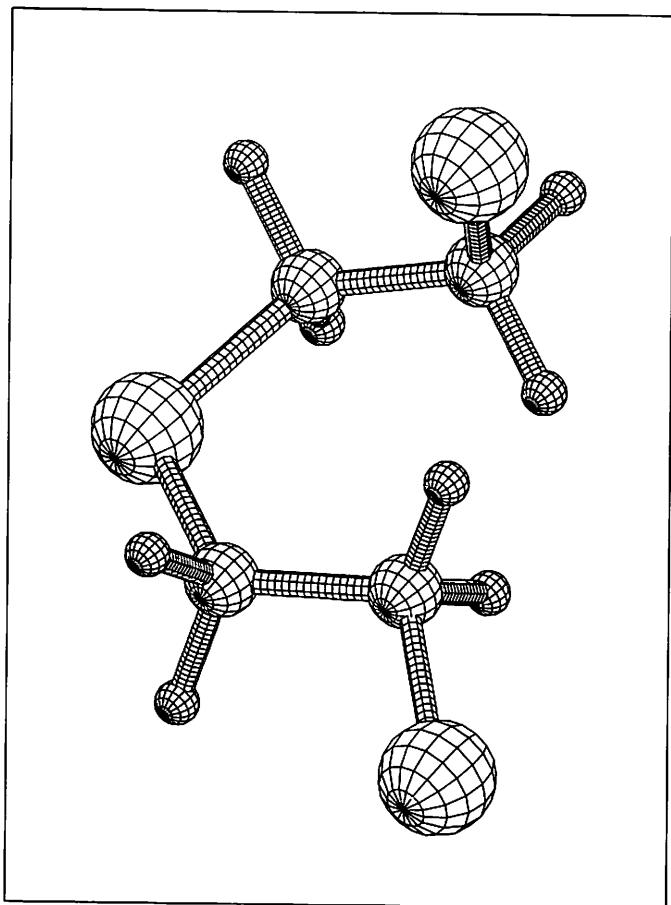
なお、アトロピンの効果は一時的であることがわかっている。また、PAM (ヨウ化プラリドキシム) は、酵素アセチルコリンエステラーゼにくっついた神経性ガスを取り除き、神経作用を正常にする作用がある。つまり、これら

の薬は神経性ガスそのものを無毒化するのではなく、神経性ガスの効果をなくすための薬剤ということになる。

このPAMと硫酸アトロピン、ジアゼパムの3種類の薬剤によって、神経性ガスの症状を抑えることが可能になる。オウム真理教施設からこれらの解毒剤が発見されたという事実が、なぜ「オウム真理教が毒ガスを製造していた」証拠となるのであろうか。もちろん、これらはすべて、外部からの毒ガス攻撃に対して用意されたものなのである。

びらん性ガスに対しては、その性質上、消毒が中心となっている。内服薬に関する資料は特にないようである。

ただし、イペリット等によって角膜が侵され、乱視になるという現象があるため、重曹水で洗眼するなどの対策はとっている。



イペリット分子模型図



【第5章】
毒ガス被害の実態

◆疫学的証明

続出する健康被害を見かねたオウム真理教附属医院の医師は、94年6月、健康アンケート調査を行なった。このアンケートの対象者は1000名以上で、ロシアを除く全国の教団施設の出家修行者を対象にしている。

その結果、実に、上九一色・富士宮の各教団施設にいる出家修行者の90パーセントが、何らかの自覚症状を持っていることがわかったのである。

通常、医学・生物学的統計で、対象が500人を超える疫学的統計は、十分評価に値するとされており、この疫学デー

		環境	症状	血痰	鼻出血	皮下出血 その他	血生臭い 口臭	皮膚炎	皮膚潰瘍	易疲労性 (疲れやすい)
総数 および 有症数 (人)	①屋内	総数	270	269	270	267	270	270	268	
		有症数	24	45	18	29	43	13	124	
	②屋内(外気流入)	総数	159	158	158	159	158	157	158	
		有症数	17	29	16	23	30	11	97	
	③屋外	総数	206	206	206	202	205	205	203	
		有症数	32	49	22	36	34	14	138	
発症率	①屋内		9%	17%	7%	11%	16%	5%	46%	
	②屋内(外気流入)		11%	18%	10%	14%	19%	7%	61%	
	③屋外		16%	24%	11%	18%	17%	7%	68%	
χ^2 乗検定	①屋内: 屋内(外気流入)		0.540	0.668	0.201	0.272	0.416	0.343	0.003	
	②屋内(外気流入): 屋外		0.178	0.210	0.864	0.393	0.552	0.947	0.193	
	③屋内: 屋外		0.026	0.056	0.118	0.031	0.847	0.348	<0.001	

出家修行者の健康被害調査結果。①密閉された屋内 ②外気が流入する屋内 ③屋外、でワーク（奉仕修行）をする出家修行者の3グループに分類。各グループとも一般人に比較して異常に高い発症率である

タを見ても、やはりマスタードガスや神経ガスなどによってオウム真理教に対して長期にわたって攻撃が行なわれてきたことは否定できないことがわかるのである。

【出家修行者にみられた症状】

血痰・鼻血・皮下出血・血生臭い口臭・皮膚炎・口内炎・皮膚潰瘍・結膜炎・鼻炎・咳・水疱・湿疹、さらには、易疲労性（疲れやすい）・下痢・頻尿・腹痛・呼吸障害（呼吸しづらい）・頭痛・視力障害・乱視（目の焦点が合わない）・筋肉のけいれん・胸の圧迫感・めまい・吐き気

出家修行者に見られるこれらの症状の発症率は、通常に

下痢	頻尿	腹痛	呼吸障害 (呼吸しづらい)	頭痛	視力障害	結膜炎	乱視 (目の焦点が合わない)	鼻炎	筋肉の 痙攣	咳
270	270	269	269	268	270	270	268	268	268	175
77	76	39	47	40	65	96	40	32	17	37
159	159	159	159	159	159	159	158	158	159	98
53	64	40	50	41	35	78	26	35	19	23
206	205	203	205	201	203	203	202	202	202	126
80	76	37	63	46	57	115	36	54	20	30
29%	28%	14%	17%	15%	24%	36%	15%	12%	6%	21%
33%	40%	25%	31%	26%	22%	49%	16%	22%	12%	23%
39%	37%	18%	31%	23%	28%	57%	18%	27%	10%	24%
0.295	0.010	0.006	0.001	0.006	0.626	0.006	0.673	0.005	0.043	0.656
0.279	0.536	0.110	0.884	0.523	0.188	0.151	0.733	0.317	0.534	0.953
<u>0.018</u>	<u>0.039</u>	0.275	0.001	<u>0.027</u>	0.324	< 0.001 >	0.399	< 0.001 >	0.156	0.583

(P=危険率 P<0.05→下線 P<0.01→太字斜体)

比べるとはるかに高い。

『1992年国民衛生の動向』には、在宅者1000人の中で症状を訴える人の割合が記載されているが、本来ならば超健康を自他ともに認める出家修行者たちが、どの症状においても、一般人の10倍以上の者が症状を訴えているという異常性に注目してほしい。

例えば、

血痰・鼻出血・血生臭い口臭

は、出血しやすい状態を表わしている。この原因は何か。イペリット等のびらん性ガスが長期的に噴霧されたためと考えられる。そうでなければ10~20%もの人間にこのような症状が出ることはありえないのである。

その中でも、以下の症状は、神経ガスによるものであると考えられる。

疲れやすい.....60%

結膜炎.....50%

頻尿.....40%

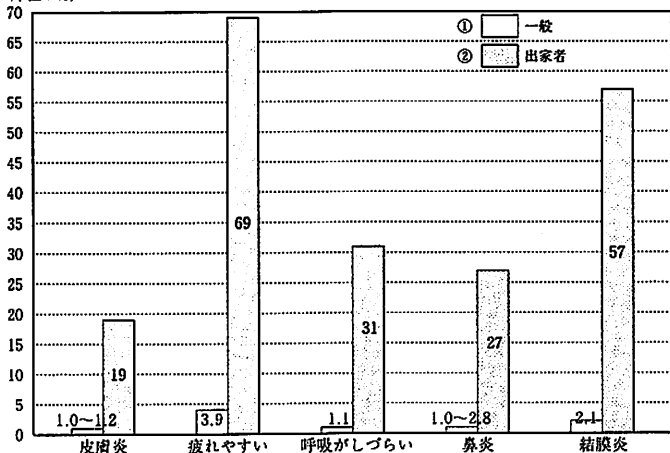
息苦しさ.....30%

視力低下.....20%

ものがダブって見える.....20%

いずれも異常なほどの高率で発症している。

(単位：%)



一般と出家者の比較

◆毒ガス攻撃を裏付ける現象

これらの症状が毒ガス攻撃によるものと考えざるをえない証拠がいくつか存在する。

- 1：出家修行者に多発している症状が、びらん性ガス、神経性ガスに特徴的なものである。
- 2：多くの患者は、上九一色村等の教団施設に近づくと症状が悪化し、そこから離れると明らかに症状が軽減している。
- 3：空気清浄機を設置して空気を浄化すると症状が軽減した。
- 4：神経性ガス用の特異な解毒剤、有機リン系殺虫剤や農薬に対する解毒剤が治療効果を発揮した。

この解毒剤の一つが、医学文献上も神経性ガスに効くとされている硫酸アトロピンである。例えば、昨年9月1日から30日まで、この硫酸アトロピンを投与された出家修行者は、以下のように症状が改善されたと報告している。

目の痛み	95%
頭痛・頭重感	77%
呼吸困難	75%
めまい・たちくらみ	74%

胸の圧迫感……………74%

脱力感・だるさ……………67%

視力低下・目のかすみ……………52%

以上のことから、富士宮・上九一色の教団施設にいる出家修行者の健康被害の原因が毒ガスであることが疫学的に証明されたといえよう。

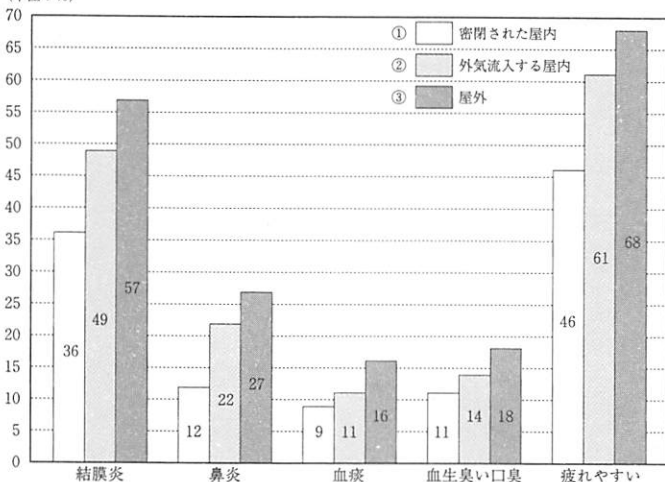
◆外部からの攻撃

では、毒ガス攻撃はどこから行なわれているのだろうか。室内か、室外か。疫学的データを統計処理すると、興味深い結果が出てくる。

グラフをご覧ください。これは、健康アンケートを集計し、

- 1：密閉された屋内でワークをする出家修行者
- 2：外気が流入する屋内でワークをする出家修行者
- 3：屋外でワークをする出家修行者

(単位：%)



①密閉された屋内②外気が流入する屋内③屋外、でワークをする出家修行者の3グループが症状を訴える率。それぞれ左から①②③を示す

の3グループに分類し、それぞれのグループの出家修行者が症状を訴える率をグラフ化したものである。

ご覧のとおり、外気に触れる可能性の高い者ほど、

結膜炎

鼻炎

血痰

血生臭い口臭

易疲労性

といった症状を訴える率が高いことがわかる。これ以外でも、下痢・頻尿・呼吸障害・頭痛においても、屋外でワークをする者の方が発症率の高いことが判明している。

このデータに対して、 χ^2 （カイ2乗）検定という統計学的処理を行なった。

検定とは、この場合、屋内と屋外の数値の違いが偶然のものか、それとも偶然では片づけられないものかをチェックするということである。データを見る限りでは、屋内と屋外とでは、違いがあるともいえそうだし、違いがないともいえそうだ。そこで、統計的処理を用いて、違いがあるかどうかを調べるのである。

この場合「危険率」という数値を計算する。「危険率」とは、「その違いが偶然に起こる可能性」を示すものである。「危険率」が高ければ、2つの数値の違いは単なる偶然の可能性もある。逆に危険率が低ければ、その違いは偶

然のものではなく、何らかの意味を持つといえる。

意味を持つ＝「有意である」とする危険率の水準は、5%以下にする場合と、1%以下にする場合とがある。一般的には、危険率5%以下であれば、明白な違いがある＝「有意差がある」といえる。

その結果、同じ症状に対して、屋内で働く者と屋外で働く者を比較した場合、実に危険率0.1%以下という明らかな有意差を示す項目が4つも存在したのである。

疲れやすい

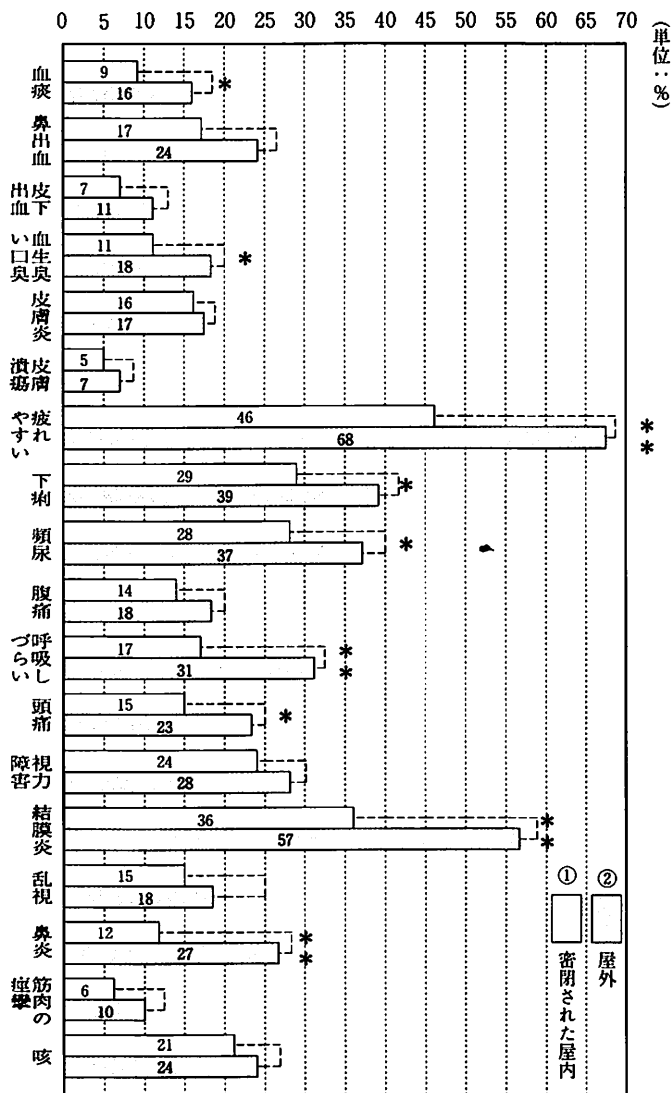
呼吸しづらい

結膜炎

鼻炎

もとより、屋内といっても密閉することができない。屋内、屋外で働く者ともに、一般と比較すれば極めて症状を訴える者が多い。その中でも、特に屋外で活動する者の症状が激しいことが明らかになったのだ。

外気に触れる者ほど症状が重い——これは紛れもなく、毒ガスが教団施設の外部からやってきていることを意味している。こうして、統計からも、屋内ではなく屋外に何らかの「原因」があることが明らかになったのである。



①密閉された屋内②屋外、でワークをする出家修行者の2グループが症状を訴える率。さらに、2グループについて χ^2 検定を行ない、危険率5%以下の有意差のあるものを*、危険率1%以下の有意差のあるものを**で示す

◆ 毒ガスは教団施設の外から噴霧されたもの

ところが、一部のマスコミの中には、「教団内部で作った毒ガスが漏れて信者に被害を及ぼしているのではないか」というニュアンスの報道を行なっているところがある。

しかし、それがいかに荒唐無稽な主張であるかということとは、次のデータに照らし合わせれば一目瞭然である。

「第7サティアンと隣のプレハブがサリンを生成していた」と報道されているが、もしそこから漏れたのであれば、その施設のある第3上九が最も被害が大きいはずである。

しかし、統計的処理をするまでもなく、特に第3上九の被害が際立って大きいわけではないことがわかる。むしろ、そこから速く離れたところで、被害が多く出ている。これ

	血痰	鼻出血	皮下 出血他	血生臭 い口臭	皮膚炎	皮膚 潰瘍	易 疲労性	下痢	頻尿
富士宮	9%	15%	18%	10%	32%	6%	67%	37%	29%
第1上九	16%	23%	12%	15%	18%	4%	66%	33%	36%
第2上九	9%	23%	9%	22%	16%	7%	56%	32%	36%
第3上九	9%	23%	7%	0%	18%	0%	52%	7%	41%
第4上九	10%	7%	3%	7%	10%	2%	52%	29%	30%
第5上九	10%	10%	0%	0%	14%	10%	52%	38%	33%
清流	7%	16%	2%	8%	11%	5%	51%	39%	42%
阿蘇	14%	15%	9%	14%	20%	14%	23%	37%	28%
青山	14%	23%	0%	18%	14%	14%	64%	36%	18%
名古屋	14%	29%	33%	0%	0%	43%	71%	43%	29%
国内支部	10%	17%	9%	7%	9%	10%	48%	23%	13%
海外支部	5%	11%	15%	5%	15%	5%	45%	25%	15%
合計/平均	11%	18%	10%	13%	17%	8%	54%	32%	30%

最下段の全体平均より高い数値を示すものに色をつけた。第3上九はむしろ症状が軽い部類に属する

は明らかに、教団外部から噴霧されていることを裏付けるものである。

また、上九一色・富士宮だけではなく、全国の各支部でも健康被害が出ている。これは「内部で作った毒ガスが漏れて周囲の修行者が健康被害を訴えた」などという主張に何の根拠もないことを示しているのである。

腹痛	呼吸障害	頭痛	視力障害	結膜炎	視界がダブる	鼻炎	筋肉痙攣	咳	標本数(人)
16%	32%	30%	35%	54%	17%	29%	17%	32%	121
19%	23%	20%	26%	52%	17%	22%	7%	27%	160
19%	29%	22%	24%	46%	14%	22%	12%	24%	190
9%	16%	9%	9%	52%	9%	18%	16%	14%	12
27%	25%	18%	19%	43%	12%	17%	7%	12%	41
0%	14%	24%	10%	29%	15%	14%	10%	0%	21
20%	22%	18%	18%	33%	20%	11%	2%	12%	85
31%	13%	23%	4%	35%	3%	12%	4%	28%	97
27%	36%	27%	55%	59%	27%	14%	5%	35%	27
14%	43%	14%	43%	43%	14%	14%	0%	50%	7
14%	18%	17%	30%	34%	15%	16%	2%	17%	146
20%	5%	20%	10%	10%	15%	10%	0%	13%	24
19%	23%	21%	24%	43%	15%	19%	8%	23%	931

◆攻撃は93年以前から

さらに次のグラフをご覧ください。これは、出家修行者に対する健康アンケートを集計し、

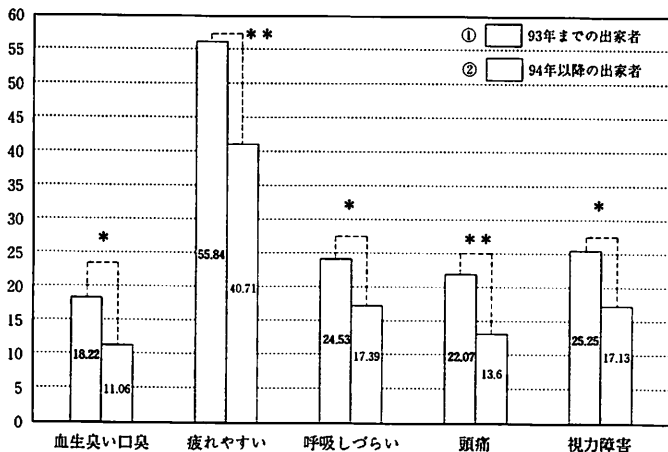
①93年までに出家した出家修行者

②94年以降に出家した出家修行者

の2グループに分類し、それぞれのグループの修行者が症状を訴える率をグラフ化したものである。

これからわかるように、93年までに出家した修行者の方が、症状を訴える率が高いことがわかる。これは、少なくとも、93年以前から継続して教団に対して長期的な毒ガス攻撃が行なわれていたことを示している。

(単位：%)



①93年までに出家した者②94年以降に出家した者、の2グループが症状を訴える率。それぞれ左から①②を示す。さらに、2グループについて χ^2 検定を行ない、危険率5%以下の有意差のあるものを*、危険率1%以下の有意差のあるものを**で示す

【コリンエステラーゼ値】

松本サリン事件の被害者のようなコリンエステラーゼの大幅な低下が、オウム真理教ではあまり見られない点を疑問とする声もあるようだ。

しかし、矛盾はしない。

第1に、一時的で大量な曝露による被害が出た松本サリン事件と、微量かつ慢性的な曝露によるオウム真理教の被害状況の違いを考えなければならない。一般的にも、急性と慢性の症状が医学的に違って現われることは常識である。慢性の症状については、事例がないために、報告資料がほとんどない。

有機リン系の農薬や神経ガスに急激にさらされた場合、血中のコリンエステラーゼ値は通常、正常値以下になるものだが、一般に入手できるデータは、有機リン系の農薬中毒や軍事訓練の際の濃厚な毒ガス曝露によるものしかないのである。

第2に、検査時にはすでにサリンを検知していたため、重症者には症状が出るとほとんど同時に特効薬であるパムという解毒剤を投与していた。よって、その治療効果もあって、コリンエステラーゼ値が正常範囲内であったことは当然と考えられる。

第3に、オウム真理教が受けている毒ガス攻撃の主体はイペリットである。イペリット被害はコリンエステラーゼ値と無関係なのだ。

◆採血検査でも異常

94年10月、最も毒ガス噴霧がひどいとされた富士宮市の道場で、出家修行者40名を対象に採血検査を行なった。

この検査では、G O P、G P T（いずれも肝機能を示す数値）等が異常な高値を示す異常者が8名出ている。

この40人という小グループで同時期に、20%にあたる8名もの肝機能異常者が出たのはなぜか。急性肝炎といった感染症は否定されているので、何らかの毒物による異常であると考えられることができる。

また、このグループのコリンエステラーゼ値は正常範囲内ではあるが、低値を示していた。

うち1名からは、時期が異なるものの、スミチオンという農薬が血中から検出されたのだ。この結果は、第三者の調査団体に依頼したものである。

検体No	No	2205724	先生
採取日	6年8月12日	採取時間	23時50分
受付日	6年8月13日	入列	
決定日	6年9月3日	病棟	
カルテNo	カルテ	尿量	ml
患者名		妊娠	週
材料	全血 血清 血漿	年齢	24才 男
検体コメント	乳ビ 溶血	血算 尿	その他
検体不足	凝固		
項目名			単位
(基準値)			(点数)
LCAT (55 - 124)		60	NEIU/ML (145)
有機リン系農薬			
(スミチオン)		8	NG/ML
EPN		検出せず	
マラチオン		検出せず	
サリチオン		検出せず	
CYAP		検出せず	
CYP		検出せず	
チオメトン		検出せず	
エチルチオメトン		検出せず	
ダイアジノン		検出せず	
MPP		検出せず	
フェリチン (4-70)		4	NG/ML (225)

◆ 結論：オウム真理教は毒ガス攻撃を受けている

ここで、オウム真理教が毒ガス被害を受けているという判断の論拠をまとめてみる。

1. 患者の発生した数十カ所の環境において、毒ガスの噴霧の事実が、科学的に認知されている。
2. 上記の環境にて居住・労働する者の症状・経過が、文献的に毒ガスによって起きるとされる一連のものと一致している。
3. 上記の症状の原因となりうる他の感染症疾患、その他の症候群（中毒）が除外される。
4. 毒ガスの中毒に対する解毒剤等の投与により、少なくとも一時的には、症状が緩和するという事実がある。
5. 外気に触れるとき、あるいは屋外などにいるときに症状を強く訴え、そこから離れると、その症状が一時的に緩和するという事実がある。
6. 大規模な疫学調査の結果、毒ガス噴霧の程度や期間別の各群における、各症状の発症率において、顕著な有意差

が見られた。

a) 外気にさらされる頻度が多いほど、症状を訴える率が高い。またその症状も強く出ていることがわかる。

b) 1993年以前の出家者と、1994年以降の出家者の2群においては、急性的な症状に関しては有意差は出ていないが、特に慢性的な蓄積で起きる症状に関しては、極端にはっきりした有意差が見られた。

7. 毒ガス中毒患者の発生が集団的、多発的、持続的である。

以上の根拠により、この症状は

大規模

かつ持続的に

外部から

行なわれた毒ガス噴霧攻撃によって生じた
毒ガス中毒症である。

と診断できる。つまり、毒ガスによる持続的な症状が出ていると結論付けられるのである。

◆オウム真理教の修行の効果

日々修行を行なっている出家修行者が健康被害を受けている。だが、それは修行が原因で起こったのではない。修行には、体調を整え、病気を癒す効果があるからである。

K・Tさんの体験談をご紹介します。

中学2年のころから喘息にかかり、季節の変わり目ごとに発作で苦しんでいました。オウム真理教に入会した年の11月、発作が起こり、浄化法を行なうことにしました。すると、10日ほどで治まってしまったのです。薬は飲んでいないので、純粹に浄化法の効果だったことは間違いありません。それから数年が経ちますが、一度も発作は起きていません。浄化法には、病気の本質を取り除いてしまう力があるのです。

また、結膜炎にかかり、「治療には数週間かかる」と医者に言われたたときも、簡単な行法でわずか1週間で症状をなくしてしまっただけでもありました。

このほか、皮膚病や肝臓病も、医学常識では考えられないほどの早さで除去してしまうのが修行なのである。修行によって健康被害が新たに生じることは考えられない。



【第6章】
出家修行者の毒ガス被害

◆ 毒ガスの激しい症状

◎A・Kさん

93年10月に出家し、第2サティアンで6日間、出家後の集中修行をしていました。そのとき、初めて体の異常を感じました。それは、修行中に息苦しさを感じたのですが、あまりにも息がハアハアするので、脈拍を見たところ、1分間に130から140もありました。立ちあがると立ちくらみがし、トイレに行くのもふらふらで、やっとの思いで行ってしまいました。ウインドトレーニング（気功）をやろうにも、立っていると貧血状態のようになり、倒れてしまうので、全くできませんでした。

出家後の集中修行が終わり、南青山の東京総本部道場に配属されましたが、そこも毒ガスが撒かれており、出家修行者は皆、ひどい肉体的、精神的苦痛を受けました。

93年11月ごろだったと思いますが、日中出かけていた営業担当の人を除く出家修行者全員が2日間くらい寝込んだことがありました。皆、咳が止まらなくて、ゼイゼイって呼吸をしていました。

建物の中でも、地下にある店が一番ひどい状態で、道場に来訪した信徒さんも体の異常を訴えていたほどです。毒ガスは空気より重いので地下に溜まるからだということを知りました。

目の痛みもひどく、1日に何回も重曹で目を洗っても良くなりませんでした。39度以上もある高熱を月1回の割合で出していましたし、体がだるくて、1日10時間寝ても、スッキリしないような状態が続きました。

94年7月に、富士宮の総本部道場にある第4サティアンに異動になりました。富士宮も毒ガスでひどい状態でした。4階からいったん外に出て帰ってくるだけで、手の平が真っ赤になり、ぶつぶつと水泡ができていました。かゆみも伴い、なかなか消えませんでした。

夏の夜には外の街灯などに蛾などの昆虫が飛んで集まってくるものですが、富士宮では、昆虫が飛ばずに落ちて死んでいるのをよく見かけました。これも毒ガスの影響だと思います。

体がだるくて、1日3時間しか仕事ができなくなり、また、1階から2階の階段を上がるのに5分から10分もかかっていました。階段をよく踏み外しますし、平らな所でもよく転んでいました。平均台の上を歩くようにまっすぐに歩こうと思っても、平衡感覚が失われ、まっすぐ歩けないのです。また、片足で立つこともできませんでした。呼吸困難にも陥り、頻脈もあり、脈拍も常時100以上ありました。

このようなひどい状態だったので、血液検査を受けました。その結果、有機リンが検出されたのです（113ページ参照）。

その後、体内の有機リンを排出するために、浄化法（体

内の不純物を取るためのヨーガ行法)を10回から20回くらい、またアーサナ(ヨーガ行法)等を行なっていましたが、ある日、急に体が軽くなりました。有機リンが排出されたくらい、10月中旬に行なった血液検査では、有機リンは検出されませんでした。

その後も毒ガスの影響を受けています。

作業をしていると、体が重い、起きるとめまいが起こって寝たきりの状態になる、睡眠時間が20時間にもなる……という状態だったのですが、そのような状態で、よく幻覚を見たり、幻聴を聞きました。空間に人の手や首が見えるのです。地上に死体が見えたときは、ゾッとしました。また、男性の低い異様な声が聞こえるのです。

そこで医師に相談し、1日3回、何日間か続けて注射を打ってもらったところ、幻覚を見なくなりました。何の薬か医師に聞いたところ、肝臓の薬でした。毒ガスの影響で肝臓の機能が弱り、毒を排出できなかったのが原因だったのです。

症状は、最初に目が痛くなり、その後鼻が痛くなり、頭痛がし、体がだるくなり、めまいがし、バランス感覚が欠如し、動けなくなる、そして幻覚を見るという状態でした。浄化法をしたときは、いったんは良くなるのですが、すぐに元の状態に戻ってしまいます。毒ガスを撒かれているときは何をやってもダメだと思いました。

◆ 体力自慢の「慢性疲労」

◎ I・Nさん

身体の異常を感じはじめたのは、94年の1月から3月ごろです。顕著な症状が現われたのは視力の低下です。高校時代から使用していた眼鏡が93年春ごろに壊れたので新しい眼鏡を購入しました。そのときは当然はっきり見えたのですが、たった1年後の94年の3月ごろには信号がぼやけてしまうまでに視力が低下してしまいました。

その後、現在まで外で活動していますが、視力の低下のほかにいろいろな症状が出てきております。

例えば、以前体力には自信があったのですが、今では、26歳の若さにかかわらず、身体がだるくなったり、気力が続かないという情けない状態に陥っています。また、集中力も続かず、雑念がよく出てきます。無気力状態にも陥ることがあり、睡眠時間も長くなりました。

◎ M・Oさん

まず、第8サティアンで作業をしていたころ、シャッターが閉まりきらず、隙間風が入ってくるような状態でした。94年6月から体のだるさが顕著になってきました。わたしはもともと大学時代にホッケー体育会に入部し体力には自信があったので、これはおかしいと思いました。

このころ、ひどい臭いが外から入ってきました。その臭いはとにかく気持ちが悪い、牧場の牛や糞の臭いとも違う異様なものでした。大体定期的に、夜になると臭いが強くなるような感じでした。ふだんは機械の音で外の音はあまり聞こえないのですが、ヘリコプターとか、小型飛行機が来て、第8サティアン付近を低空飛行をした後は臭いがひどくなり、物がほとんど食べられなくなりました。

第9サティアンでもワークをしているのですが、そちらの方に移動するといきなり体調が悪化し、ワーク自体体力を使わないものなのに、ぐったり疲れた感じがして体が重くなり、睡眠時間がどんどん長くなっていきました。出家直前のころは4時間も寝れば十分であったのが、10時間も寝るのが当たり前の状態になりました。目覚ましを使って無理やり起きても、体がだるい状態が取れませんでした。

このような体の異常な状態も、東京にワークでしばらく出ていたりすると、その間に体調が回復し、活力が戻ってくるのです。睡眠時間も4時間で十分になります。

首の柔らかい部分や二の腕、内腿^{うちもも}などがかゆくなり、かくと腫れてくるという症状がありました。体力も非常に弱り、階段を上がるだけで息切れがし、貧血のような状態になりました。視力もかなり悪くなってきました。

当時の第9サティアンは、シャッターが壊れて完全に閉まらず、また、窓ガラスも一部割れたままでしたので、外気が吹き込んできていました。その外気は異様な悪臭を放っていました。わたしは外に出て、舌を出して外気をなめた

ことがあるのですが、今まで味わったことのない異様な味がしました。

体の異常を訴える出家修行者が増えたため、解毒剤が配布されることになりました。解毒剤を飲むと一時的に体調が顕著に回復するので、毒の影響であることは明らかでした。

◎S・Yさん

わたしは94年の3月から4月ごろ、第6サティアンにいたのですが、そのときに身体に異常な症状が出ました。目に痛みを感じ、ショボショボするのです。咳がひどく、止まらなくなるという気管支喘息ぜんそくのような症状を呈しました。

同年の5月ごろから、建築班の電気班の作業をすることになりました。作業の大部分が外での作業ですので、当然身体が毒ガスの影響を受けました。身体に湿疹ができ、それが水泡になり、それを手をつぶすと汁が出ました。

また、意味のない咳がゴホン、ゴホンと出たり、目が痛くなりました。

夏になり、汗をかくようになると、身体の湿疹がひどくなりました。脇わきの下や股関節に、蚊にさされた後の1.5倍から2倍近くある水泡が多数できました。これは汗で濡れた場所に毒ガスが付着し、その影響で水泡ができるものと思われる。

このような湿疹は、作業の都合で富士吉田市や沼津に出

てきれいな空気に触れるときれいに治りましたが、上九一色村に戻ると再発しました。

また、水分をよけいに飲んでいるわけでもないのに、尿の回数が増えました。また、下痢にもなりやすくなりました。血生臭い唾^{つば}が出たり、ドロツとした痰が出たりしました。視力も低下し、近視と乱視が合わさったような症状も出てきました。

わたしは、電気班という作業の都合上、切り傷等をよくするのですが、その回復に1週間から2週間もかかっています。これも毒ガスの影響だと思われます。

上九一色で、ある新築の建物の電気工事をしたときも毒ガスの影響を受けました。この建物は、人の出入りがないと、外から入った空気が中にこもってしまうような構造だったのですが、この建物内に入ると、前述したような蚊に刺されたような水泡がたちまち身体にでき、なかなかひかない状態になりました。

◆毒ガスの諸症状

◎K・Gさん

わたしが最初に毒ガスの影響を知ったのは、94年からです。そのときは富士総本部および上九周辺の奉仕についておりました。

体調の変化を知ったのは、ずっと前からですが、徐々に変化が起きてきたので、単なる年齢のせいかと思っていました。

主な症状としては、

○視力低下（10代のころから悪かったのですが、眼鏡なしでも十分生活できました。医師の話では近視が出ているということですが、わたしの年齢（40歳）から近視になることはないと思います。暗いところが見えにくく、対向車のライトを大変まぶしく感じています。それ以降、ずっと眼鏡をかけています）

○疲労感

○下痢

○喉の痛み

が93年初めごろから起きており、現在でもその症状は続いています。

解毒剤を飲用するようになってからは、疲労感は減退し、日常生活を送る分については問題はありますが、毒ガスに侵される前と比べて何と軟弱な身体になってしまったの

かと情けなくなります。

毒ガス攻撃は自覚したころより、かなり前から行なわれていたと思います。少なくともその1～2年前から行なわれていたのではないのでしょうか。

当初、毒ガス噴霧は第1上九から始まったと思いますし、だれもが毒ガスが外からやってくるとは思っていませんでした。窓やドアを開けっ放しにしたり、戸外に出るの生活は、一般では当たり前ですが、今のわたしたちにはできません。

わたしはその後、富士宮中心の生活となりましたが、そのころには富士宮でも、空中、地上を問わず毒ガス噴霧が始まっていたので、現在までかなりのダメージを受けています。

◎I・Rさん

93年12月ごろ以来、毒ガスの影響でかなり体調が悪くなっています。主な症状としては、

○眼と鼻の症状

眼鏡ではよく見えなくなった。コンタクトでも2重に見える、ぼやける。

鼻血が出やすくなった。

○じんましん

上半身の肌の露出した部分に出やすい。建物の外に出ると特に出やすい。

○眠気

寝ても寝ても眠気がとれない。一度寝たら体がだるくなって起き上がるのが困難。突然眠気が襲ってきて車を運転すると眠たくなる。

○呼吸

咳がすごく、痰が出る。息が苦しい。肺が痛い。食欲がない。

○あざがしやすい

ぶつけたおぼえがないのに、いつのまにかあざができている。

○体のふしぶしが痛い

などがあります。今では配布された解毒剤を飲んでいますが、飲んでしばらくの間は、咳の回数が減り楽になるし、呼吸も少し楽になります。

◎O・Sさん

わたしが毒ガスを受けた症状が顕著になったのは、94年8月から9月にかけてです。その当時は、富士山総本部道場で修行を行なっていましたが、富士山総本部に移ってすぐに下記の症状が出てきました。

○呼吸器系統の障害

このころから、特に呼吸器系統に障害を感じるようになりました。特に肺が苦しく、普通に呼吸するのさえ、かなりの息苦しさをを感じるほどの状態です。

○喉の障害

最近、喉がいつもいがらっぽく、何か異物がからんでいるような感じがし、痰がよく出るようになりました。

○傷の治癒が異常に長期化

ちょっとしたかすり傷でも、きちんと消毒し、治療しているにもかかわらず、治りが異常に遅く、膿^うみやすくなっており、治癒しても傷痕^{きずあと}が残り、きれいに治らなくなりました。

○睡眠時間の長時間化

睡眠時間が今までより2時間から3時間長くなり、かつ目覚めも非常に悪くなりました。

これらの状態は、以前には全くなかったことです。これらの症状は、毒ガスを被曝したことによるものと考えられます。そして、これらの症状は現在も続いています。

解毒剤を服用するようになってから症状は多少軽減されたように感じられます。

◎N・Mさん

わたしが最初に毒ガスの影響を知ったのは、92年からです。そのときは富士宮で外気にさらされるワークをしていました。それ以来、毒ガスの影響でかなり体調が悪くなっています。主な症状としては、

○倦怠感があり、起きているのがつらい

○粘膜から血が出る

- 眠気が取れない
 - 眼が痛く、とても疲れる
- 等の症状があります。

特に94年の初めごろ、第2上九に移ってから、視力が落ちたり、乱視がひどくなるなどの症状が出てきました。

鼻粘膜についてはいつもただれていますが、一度他の土地に行くと治ることがあります。

◎D・Yさん

わたしは実際に外気に触れる奉仕作業をやっていましたが、作業中にどこからか「その臭い」がしてくると、

- 急に眠くなる
- 目がちかちかとする
- 気分が悪くなる
- 脱力感に襲われる
- 偏頭痛がする
- 肺が痛く息苦しい
- 鼻粘膜がやられ、喉も痛くなる

という症状が出、その臭いがないときはその症状は出ませんでした。

それと同時に、その臭いがしたときは小さな虫が飛べなくなって落下するなどの妙な現象を見たりもしました。

◆外気が入ると調子が悪い

◎N・Tさん

94年4月ごろ、第2上九に移り、警備をするようになったころから体がだるくなり、また、時々、呼吸困難に陥るという事態が体に起こりはじめました。

わたしが警備のために常駐していたボックスは、中に人が1人入れるような1メートル四方の広さで、木製で風通しがよく、屋外と変わらない状態でした。

その後、体の異常がひどくなり、寒気・吐き気・めまいといった症状が慢性的になりました。下痢もしやすくなりましたし、手首や靴下のゴムのところに水泡ができ、皮膚がただれて非常にかゆみがあります。これは、今も治っていません。咳も時々出るようになり、息苦しい感じがすることもあります。視力は急に落ち、目がかすんできたような感じがし、眼球に圧迫感があります。

6月ごろからは、第1上九で奉仕活動をするようになりましたが、そのころが病状のピークでした。体がドロツとした感じで、昏睡状態になり、一度寝たら12時間も目が覚めない状態になりました。

8月から、第5上九に移りましたが、昏睡とだるさは抜けず、慢性的になっていました。

第2上九にある第6サティアンで寝ると4～5時間で十分に体が動くようになるのですが、建物のシャッターが壊

れていたり、すきまや壁に穴があいて、外の風が入ってくる第8サティアンなどで一度寝ると10時間から12時間くらい目が覚めず、6時間くらいで目が覚めても、その後ボートとして奉仕活動をするのが困難でした。

第6サティアンにおいて睡眠時間が短かったのは、早くからコスモクリーナーが設置されていたからです。

以上のような症状に改善が見られるようになったのは、オウム真理教附属医院が配布してくれた解毒剤を飲むようになってからです。解毒剤を飲まない日は、体調が悪いのがはっきりしていましたので、毎日欠かさず解毒剤を飲んでいました。

10月ごろから第8サティアンでもコスモクリーナーが設置されるようになると、体調は少し回復しました。しかし、夜になると外からくさい臭いがシャッターのすきまから入ってくるものがあつたのですが、そのときは、体のだるさ・吐き気・寒気がひどくなりました。その色は無色ですが、枯れ草が腐ったような臭いや肥料が乾燥したような臭いがするときがあり、そのときは手がしびれてけいれんを起こすという症状が出ました。

◎S・Yさん

第8サティアンでワークをしていた94年4月ごろから体がだるくなり、胸の内部に強く圧迫感を感じるようになりました。睡眠時間もだんだん長くなり、出家当初は5時間

の睡眠でよかったのが、9～10時間くらい寝てしまうようになり、起きたあとも体がだるくて、グタツとした感じで、ワークどころか起きているのさえつらくて、集中できなくなり本当につらいものでした。また、喉とか鼻の中が腫れた感じで、鼻の穴が痛くなりました。

また、第8サティアンでシャッターが壊れたときがあり、そのときは外でワークしているのと変わらないような、自然の風が中に吹き込んでくる状況でした。そのときは特に症状が悪くなり、顔の頬のあたりから上が麻酔をかけられてマヒしたような状態になり、目もまるで酒を飲んで酔っ払ったようにしっかり開けられなくなりました。

体の皮膚の柔らかい部分は膨らんだもの（気泡状態）ができ、かゆいので掻くと、その痕が赤黒く変色するといった状態になりました。

自分の体の状態は出家前と全然違い、これは明らかに毒ガス攻撃を受けているための症状だという自覚はありました。

また、第9サティアンビルでのワークでは、しょっちゅう換気扇をつけ、入り口のシャッターも一部壊れていて閉まらない状態で、外気がしょっちゅう入る環境だったので、症状が一層悪化したのだと思います。

◆銀座の空気の方が「おいしい」

◎S・Mさん

1階の窓は締めていたのですが、2階の窓を開け放っていたことがありました。1階から2階へ上がってワークを始めると、たちまちひどい昏睡状態に陥り、体調が悪化しました。前後不覚になり、大声で呼ばれてはじめて気がつくということが何度もあったのです。その後、2階の窓を閉めるようになってからはそういうことはなくなりましたので、外から毒ガスが噴霧攻撃されていたのは間違いありません。

94年3月から切り傷などの治りが非常に遅くなりました。わたしはもともと治りが早かったのですが。

94年11月の終わりごろから12月上旬までの間、とうとうわたしも、急性の気管支狭さくと激しい胸の痛みで、点滴を受け続ける状態になってしまいました。

臭いについては、94年年末に、たびたび東京の繁華街に買い物にでかける機会がありました。上九一色村周辺に帰るたびに、表現しようのないひどい悪臭が、道場の外に漂っているということがよくわかりました。都会の雑踏の方がはるかに健康的な空気を感じました。東京の銀座の真ん中は空気が一番汚いところと言われていますが、そこで「ああ、おいしい」と深呼吸したくらいです。

◆ 解毒剤に効果あり

◎ K・Sさん

1994年の6月ごろになると、睡眠時間が6時間から、ひどいときには10時間も目が覚めなかったりしました。また、体がだるくてたまらなくなりました。このころから湿疹もできはじめました。かゆさはありませんでした。色は赤く、小さいぶつぶつができました。わたしだけでなく、一緒にワークしていた仲間全員に同じような湿疹ができていました。

毒ガス攻撃に対抗するため解毒剤が配布されるようになりました。それを飲むと湿疹がなくなり、徐々に回復しているのが明らかにわかりました。しかし、完全には良くなり、94年の12月ごろには、咳や熱が出始めました。また、鼻をかむと血が出るようにもなり、この症状は今でも治っていません。

◎ K・Kさん

わたしが、身体の異常を最初に自覚したのは、ワークの場所が第2上九に移った94年2月ごろです。

それまでは、3時間寝ると自然に目が覚めていましたが、目が覚めてもすぐに起きあがることができなくなりました。睡眠時間も7時間から8時間にも増えてしまいました。

94年4月ごろ、同じ敷地内の別の建物でワークするようになりましたが、そのときは鼻血が出て止まりにくくなりました。8月ごろには痰に血が混じったり、皮膚に湿疹ができたりしました。

毒ガスによる病状の治療のために、解毒剤を飲むようになりました。解毒剤を飲むと、睡眠時間も5時間くらいに短縮されるようになりました。しかし、以前のように3時間睡眠までは戻っていませんので、体調が完全になっていくわけではありません。

◎E・Kさん

わたしは、1989年6月にオウム真理教に出家しましたが、出家後現在まで、建築班で戸外のワーク（奉仕活動）をしてきました。ワーク上外気にさらされることがほとんどなのですが、出家当時と比較すると、1992年10月ごろから体調に異常を感じるようになりました。まず、目の焦点が合わなくなり、ものがはっきり見えなくなりました。身体がいつもだるさが抜けないような状態になり、疲れやすくなりました。また、息苦しさも出てきました。

睡眠時間も以前なら4時間で十分だったのが、7時間も寝るようになってしまいました。習慣上4時間くらいの睡眠で目覚めるのですが、身体がだるくて起きられないのです。

7月から8月ごろにかけては、突然鼻血が出るというこ

ともありました。

解毒剤を飲んだときは調子が良いのですが、薬の効果が切れるととたんに体調が悪くなります。解毒剤を飲むと調子が良い、切れると悪いというような状態が続きました。

現在、わたしは、目の焦点がいまだに合わない、身体が疲れやすいという症状が回復せず、睡眠時間が10時間と長くなっております。

◎Y・Sさん

94年7月になると、状態のひどいときは、体がしびれて動かなくなり、心臓と肝臓が痛くなりました。肝臓強化の点滴を受けると、2～3時間後には元気が戻りました。点滴を受けているときは、心臓と肝臓が熱くなりました。

このときのワークは運送関係で、1週間、第2上九にいたる間は症状がひどくなり、次の1週間、交替で東京にいと回復するという繰り返しの状況になりました。

毒ガス対策の肝臓強化の注射を受けると必ず元気になります。



【第7章】
攻撃は空から、地上から

◆不審な霧が迫る

上九一色村富士ヶ嶺地区は、確かに霧が多いところである。隣接する「朝霧高原」という地名からもその霧の多さがうかがえる。

しかし、オウム真理教施設周辺では自然のものとは考えられない、異様な霧が頻繁に目撃されているのだ。しかも、その霧に入ると気分が悪くなるのである。その臭いは、オウム真理教の出家修行者がかぎ慣れた「毒ガスの臭い」に間違いなかった。

第2上九をある日、不自然な霧が覆っていた。正確には、第2上九の体育館と「三角屋根」と呼ばれる建物の2つだけを覆っていたのである。この敷地には第6サティアンや倉庫などいろいろな建物が建っているが、この2つの建物だけを覆う異様な霧が発生していたのだ。

この霧は、体調を崩させる「例の臭い」を発していた。やはり、毒ガスが立ちこめていたのである。

なお、当時のこの2つの建物は化学物質とは全く無縁であり、何らかの化学物質から霧が発生したということは考えられない。

この霧の被害が特にひどかったのは、第1上九である。車で通過すると、オウム真理教の敷地の近くにくると、

霧の中に入り、遠ざかると霧が晴れるというような状況なのである。オウム真理教の敷地周辺だけ、乾燥したような霧に包まれているのだ。

風がほとんどないときに、この不審な霧の中を車に乗って通ると、気分が悪くなり、頭痛がして気持ちが悪くなり、吐き気がする。

また、毎日夕方6時過ぎから夜9時にかけてが特にひどく、第1上九敷地内では普通にしているだけでも咳き込まなければならぬほどであった。

94年7月中ごろのある日。夜8時ごろ、第1上九から第2上九に車で向かう修行者がいた。その日も霧が深く、月がかすみ、ほとんどよく見えなかったのである。ところが、南東へ向けて少し進んだところで、その霧は突然消え失せたのだ。

振り返ってみると、ある一角から第1上九に向けて濃い霧が進んでいくのがはっきりと見えたのである。

実際、霧の中にいるとき、車の正面からフロントガラスに向かって霧が突き進んでくるのがよくわかった。それは極めて奇妙な霧だった。普通の霧なら道路が湿っているはずだが、そのとき道路は乾燥したままだったのである。

このような霧は、頻繁に目撃されている。

なお、この霧は、オウム真理教から発生したものではないと考えられる。それは、この地区の風向きの問題がある

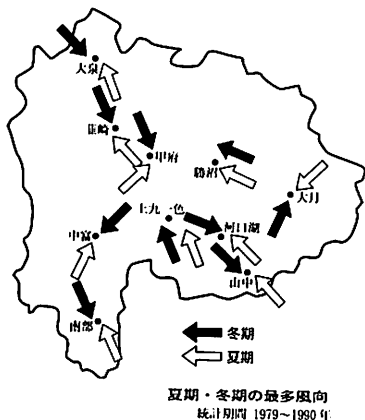
からだ。

第1上九から見て霧は、東～南東の方向に出現する。

甲府地方気象台編『山梨県の気象百年』平成6年8月版によると、

「夏期：富士五湖地方では富士山を回り込む風が地形に沿って吹き南東の風になる」

「冬季：御坂山地の山あいにある上九一色では、地形の影響を強く受けて夏期・冬季とも同一の最多風向きを示す」とある。



『山梨県の気象百年』

つまり、年間を通じて、不審な霧は第1上九の風上に出現しているということになる。

だが、この地上を這う不気味な霧以上に、オウム真理教に対する激しい攻撃者が存在する。では、最大の「攻撃者」は何か。それは、空からやってくるのである。

◆ 毒ガスの「空襲」

まるで戦争のような話だが、オウム真理教施設の上空や、出家修行者の上空には、軍用のヘリや飛行機等、さまざまな航空機が低空で飛んできて、毒ガスを散布していると考えられる。

近代化学戦では、航空機から化学剤をエアゾル（霧状）化して散布する場合（「雨下」という）、翼の下に雨下タンクを搭載して、民間で穀物に薬品を散布するのと同じ要領で散布できるといわれている。

冒頭「はじめに」で紹介した体験談では、94年4月13日13時41分ころに第2上九に飛来した陸上自衛隊ヘリUH-1が何かを噴霧していたことがわかる。このUH-1ヘリは、世界各国の軍隊で地上攻撃等に用いられてきたものだ。

このヘリ到来の直後から、急激に体調が悪化した者が第2上九に多く現われたことが判明している。何らかの有害物質を撒いていたことは間違いない。

その他の体験談を紹介しよう。

◎ Y・Mさん

94年7月下旬のある日の午後3時ごろ、第10サティアンの横で作業をしているとき、上空を低空で、青色を含むヘリコプターが飛び去りました。その後、わたしはひどい

頭痛、そして39度前後の発熱に侵され、熱が4日間続きました。このときは目が充血し、扁桃腺が腫れ、とても苦しい思いをした記憶があります。また、そのとき一緒に作業をしていた友人も、頭痛、目の充血、喉^{のど}の痛みを訴えていました。

◎J・Nさん

94年9月ごろのある日の昼前、第6サティアンの近辺屋外を歩いていました。そのとき、周囲にいた友人たちが、「ヘリコプターが来た！」と言って空の方を見上げていたので、わたしも見てみました。すると東側の空に、黒っぽいヘリが1機、低空で飛んでくるのが見えました。そして、そのヘリはオウム真理教の敷地のちょうど上空を通過した後、徐々に高度を上げて去って行きました。

その直後、何かの薬品が化学反応をしたような、嫌な臭いがしてきました。それで、頭が痛くなり、吐き気がし、体がだるくなっていきました。そのような状態が数時間続いて、やっと回復しました。

さらに、その2週間ほど後のある日の昼前、第10サティアンの横を歩いていると、前回とよく似た形のヘリが東から低空飛行でやってきて上空を通過し、西に向かって飛んで行くのを目撃しました。すると、また前回と同じような臭いが立ちこめ、前回と同じ症状に苦しめられました。

その上、その1週間ほど後のある日の昼過ぎにも、第5

サティアンの横にいたとき、一部にオレンジ色が認められるヘリが東から低空で接近してきて上空を通過し、西へ飛び去って行くのが見えました。そして、またもや前回、前々回と同じような臭いと苦痛を味わわされたのです。

◎R・Kさん

94年8月ごろ、わたしは第2上九施設で作業していました。そのときヘリコプターが、低空で飛んできて、施設の上空でホバリングしたり、セスナが白い煙を出しながら、ゆっくりと真上を通過したのです。その直後、吐き気と頭痛、そして左目が2重にダブって見え始めました。黄色っぽい飛行機雲を出している飛行機も見たことがあります。

◎S・Rさん

94年6月、富士ヶ嶺地区から数キロメートル離れた観光地で体力トレーニングをやっていました。すると、上空にヘリ1機が飛来してきました。機体は灰色、または黒く見えました。

しばらくすると、目・鼻・唇が痛くなり、ついで吐き気とだるさに襲われて、体力トレーニングを続けられなくなり、横になってしばらく休んでしまいました。その後で、トレーニングをしていた近くに設置されていたテーブルや椅子、雨よけのトタン屋根を見てみると、ものすごく細か

い黄色い粉が一面に付着していました。なお、その日は風はほとんどなく、周囲には広いグラウンドや山などがありました。土の色は茶色や黒色でした。

教団施設上空には、不審な航空機が頻繁に飛来する。

確かに、はるか上空はちょうど旅客機のコースになっており、定期便が通過しているのであるが、それとは全く違う低空飛行の不審な航空機が、教団施設を狙うかのように飛んでくるのである。

94年4月13日から95年1月11日までの記録によると（94年7～9月は調査中断）、6か月間で280回もの飛来が確認されている。これは月平均にすると47回、94年11月だけだと105回にも上る。これは、あくまでも不審な航空機だけに限定した数である。

また、1日13回の飛来を確認した日が2日、14回が1日、15回が3日という、通常では考えられないような頻度で「彼ら」はやって来るのだ。

もちろんただ単にやって来るだけではない。彼らは異常なほどしつこく教団施設の上空で旋回飛行を繰り返す。中には、2時間以上にわたって施設付近を旋回した軍用機、1時間35分にわたって上空を旋回したヘリが確認されている。

◆「夜間飛行」の恐怖

さらに奇妙なのは、日没後に飛来してくる正体不明の航空機である。旅客機を除けば、6カ月間で40回が確認されている。ヘリの場合、夜間飛行は危険なため、通常は行なわないのだが、例えば94年11月と12月には、毎日2～3機が確認されている。

第1上九・第3上九では6時～8時が「夜間飛行」のピークであり、第2上九では8時～9時がそのピークとなっていた。

これは、現地の地理を熟知している者の飛行か、特別の暗視装置等をつけた有視界飛行が考えられ、下に教団施設があることを知って飛んでいるのは明らかであろう。空は真っ暗だということに、施設の上空で爆音を立ててゆっくり旋回し続けるヘリの姿は、見た者にしかわからない不気味さがある。

たまに軍用機も飛来しているようだ。

また、音をほとんど立てない謎の航空機も飛来している。飛び方から考えてヘリと思われるのだが、地上300メートルほどの超低空を静かに飛んでいくのである。

◆ 無法軍用機

これに加えて不審なのは、軍用機の動きである。これまで麻原彰晃尊師や教団施設の上空に姿を見せ、不審な動きをしたりしているのは、自衛隊が使用しているP-3C対潜哨戒機、F-15戦闘機、C-130輸送機、OH-6ヘリ、UH-1ヘリ、US-1A飛行艇、さらには米軍が使用しているF/A-18戦闘攻撃機、E-2C早期警戒機、A-6E攻撃機など多種多彩である。

カラーページには、富士宮・上九一色に飛来した軍用機の写真のうち、はっきりと撮影できたもののみを掲載した。以下にその写真の一覧を示そう。

94年

- | | |
|-------------|---------------------------|
| 4月13日13:41 | UH-1 (第2上九) |
| 5月17日15:07 | HSS-2B 海上自衛隊 (第2上九) |
| 5月23日13:53 | E-2C 米海軍 (第2上九) |
| 5月25日 9:52 | US-1A 海上自衛隊 (第2上九) |
| 5月29日10:05 | F-15 百里-静浜間飛行 (第2上九) |
| 6月 2日 9:20 | C-130H (第2上九) |
| 6月17日15:16 | HSS-2B (第2上九) |
| 6月22日 9:29 | C-130H (第2上九) |
| 6月22日10:44 | OH-6 10:00と10:54にも (第2上九) |
| 10月13日10:50 | E-2C (第2上九) |

10月27日11:21 CH-47 (第2上九)
 12月 3日 9:52 C-130H (第2上九)
 12月 3日10:00 C-130H 同じコース (第2上九)
 12月 3日11:35 C-130H (第1上九)
 12月 6日14:33 A-6E 米海軍 (第1上九)
 12月16日10:40 OD色ヘリ 自衛隊 (第2上九)
 12月16日14:26 A-6E (第1上九)
 12月30日11:13 ? 4機編隊 (第2上九)

95年

1月 6日11:10 E-2C (第2上九)
 1月11日13:56 E-2C (第2上九)
 1月11日15:11 SH-60H 厚木第1ヘリ軽対潜飛行隊
 (第2上九)
 1月20日15:10 F-15 (第2上九)
 1月26日 9:32 CH-47 (第2上九)
 2月 1日12:43 E-2C (第2上九)
 2月13日14:05 C-130H (第1上九)
 2月13日14:05 C-130H (第2上九)

94年5月17日には、第2上九施設上空に海上自衛隊の対潜ヘリHSS-2Bが出現した。防衛庁に確認したところ、館山と小牧を往復しているとのことだが、「富士山の方へ航路をとるとは考えがたい」という回答を得ている。公式な航路を外れてやって来る自衛隊機の目的は、いったい何な

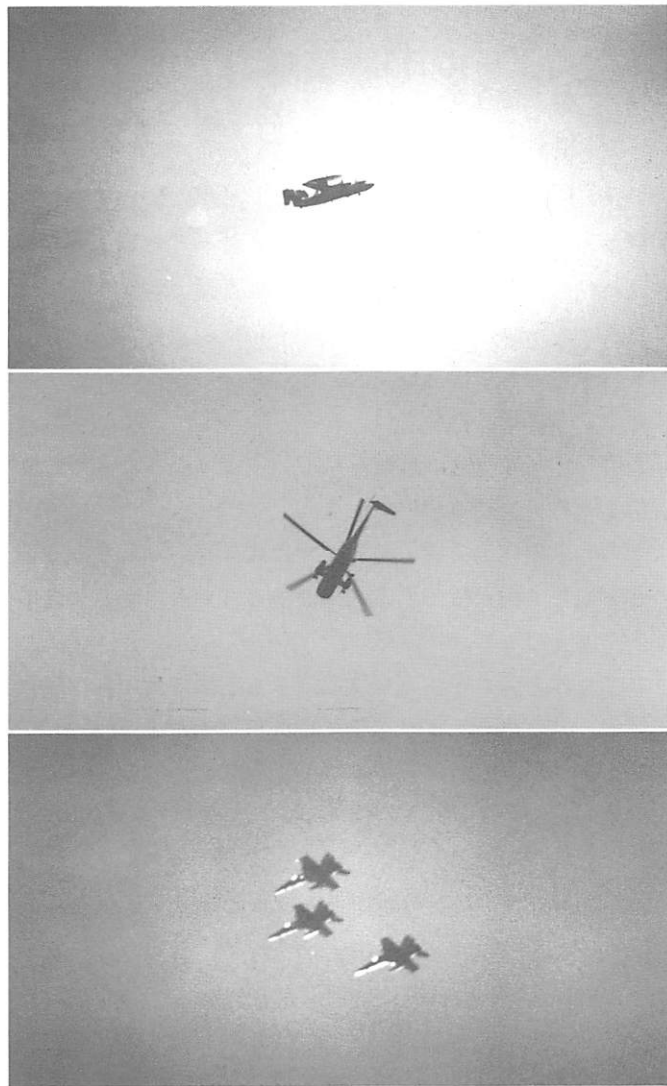
のか？

5月25日、第2上九上空を南西から北東へ飛行した海上自衛隊救難飛行艇US-1Aは、厚木から飛来したものである。また、5月29日に第2上九上空を2機編隊で北から南へ飛行したF-15戦闘機は、百里基地-静岡間を飛行するものである。

この他にも、以下のような例がある。

- 5月10日 陸自ヘリOH-6が第2上九上空へ飛来
- 6月1日 海自対潜哨戒機P-2Jが第2上九上空を飛行
- 6月3日 川崎T-4が第2上九北側を北東から南西へ飛行
(航空自衛隊浜松第1航空団の学生教育航法訓練機)
- 6月15日 海自対潜哨戒機P-3Cが第2上九北側を飛行
- 7月6日 空自中型輸送機川崎C-1が第1・第2上九、富士山総本部道場上空を飛行。

つまり、オウム真理教敷地上空を、陸・海・空の自衛隊機と、アメリカ空軍・海軍の軍用機が頻繁に飛行しているのである。実際に飛来したのはもちろんこれだけではなく、写真に撮れなかったものも多い。また、記録に残っていないものもかなりある。



上からE-2C、HSS-2B、F-15

◆C-130Hの11機編隊

95年1月31日、それは突然やってきた。

アメリカ空軍のC-130H輸送機が、山梨県上九一色村と静岡県富士宮市に点在する合計8カ所の教団施設上空に現われたのである。しかも、低空飛行で直進、急カーブを繰り返し、全施設の上空を狙ったように飛んだのだ。しかも何と11機の大編隊である。

地上から目撃した信者は、

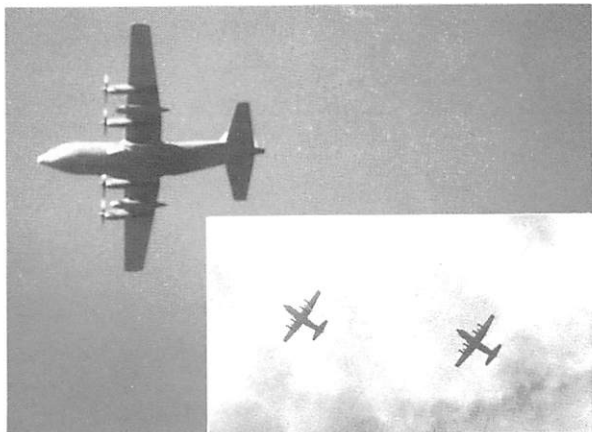
「まるでアクロバット飛行を見ているようだった」
と口をそろえて語る。

そのときの模様を撮ったビデオには「ゴーツ」という低い音を立てて向かってくる同機が映っており、まさに戦時下の空襲そのもの。

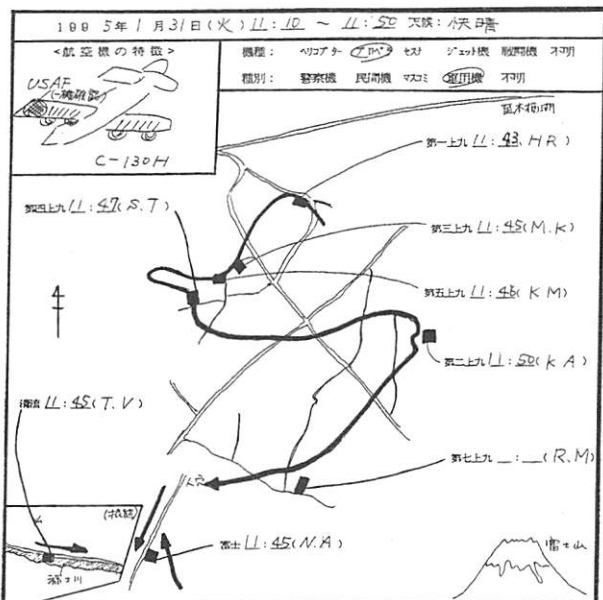
2キロ四方に点在する全施設（うち1施設は10キロ離れている）の上空をくまなく飛ぶには、直線状に飛んだり、進路を変えたりしたぐらいではできない。最初から対象物が下にあることを知って、アクロバットの的に飛ばなければできない芸当なのだ。

しかし、なぜアメリカ軍がそんなことを――。

C-130H——それは、近代的戦術輸送機の決定版といわれる4発プロペラ機で、湾岸戦争のときも、派遣するしな



教団施設に接近し急転進して去っていく米空軍C-130Hの編隊



C-130H編隊の飛行経路図。■印が教団施設を表わす。まさに狙い撃ちしているのがわかる

いでもめた有名な中型輸送機である。

オウム真理教では事態を重く見て、早速調査に入った。その結果、日本国内でC-130Hを11機以上保有しているアメリカ軍基地は、横田基地だけであることがわかった。そこで、同基地に対して照会したところ、何と驚くべき事実が判明した。

同基地広報部（日本人スタッフ）からの回答によると、

- 飛んだのは36エアリストスコードロン（空輸中隊）。
- 飛行目的は「投下訓練」で、実際に物資を落としかどうかについてはわからない。
- アメリカ軍側の話によると、ジグザグ飛行も投下訓練の一環であるが、法に触れるような低空飛行はしていない。
- 飛行した地域については、訓練の飛行ゾーンに入っているが、いつ入ったかについてはわからない。
- 作戦計画はアメリカ軍が立てているので、日本側ではわからないし、日米安保条約で演習可能となっているのでどうしようもない。
- こうした飛行をやめさせるには、国と国との話し合いになるので、防衛庁を通じてアメリカと折衝することになる。

ということだった。オウム真理教は低空飛行訓練ルートに入っているという回答である。

しかし、ここで知ってもらいたい事実がある。

昨年7月25日付朝日新聞で、日本国内にアメリカ軍の低

空飛行の訓練ルートが4か所（東北、中部、近畿、四国の山間部）あることが初めて判明した。これは敵のレーダーにとらえられないで、敵地に侵入し、目標を攻撃するための、極めて実戦的・攻撃的な訓練なのである。

その報道の時点では、上九一色村のオウム真理教施設上空はその訓練ルートに入っていなかった。それにもかかわらず、1月31日の時点では、すでにオウム真理教施設上空はそのルートに入っていたのだ。

1994年(平成6年)7月25日 月曜日 399

米軍機の低空飛行

国内に4訓練ルート

米軍低空飛行訓練ルート

東北・中部・近畿・四国の山間部

対地攻撃訓練も実施

全国各地に展開している米軍機の低空飛行訓練について、日本軍事情報誌「防衛」が、東北、中部、近畿、四国の山間部に、米軍機の低空飛行訓練ルートが4か所あることが判明した。これは敵のレーダーにとらえられないで、敵地に侵入し、目標を攻撃するための、極めて実戦的・攻撃的な訓練なのである。

この七年間に飛行ルートが変更されている。1991年10月、米軍機は、東北、中部、近畿、四国の山間部に、低空飛行訓練ルートが4か所あることが判明した。これは敵のレーダーにとらえられないで、敵地に侵入し、目標を攻撃するための、極めて実戦的・攻撃的な訓練なのである。

1991年10月、米軍機は、東北、中部、近畿、四国の山間部に、低空飛行訓練ルートが4か所あることが判明した。これは敵のレーダーにとらえられないで、敵地に侵入し、目標を攻撃するための、極めて実戦的・攻撃的な訓練なのである。

1991年10月、米軍機は、東北、中部、近畿、四国の山間部に、低空飛行訓練ルートが4か所あることが判明した。これは敵のレーダーにとらえられないで、敵地に侵入し、目標を攻撃するための、極めて実戦的・攻撃的な訓練なのである。

非武装中立論は

ワシントン、米連邦捜査局は、オウム真理教の非武装中立論を、米軍機の低空飛行訓練ルートが4か所あることが判明した。これは敵のレーダーにとらえられないで、敵地に侵入し、目標を攻撃するための、極めて実戦的・攻撃的な訓練なのである。

その目的は何だったのか。それは、わたしたちにはわからないし、証明することもできない。

ところで、オウム真理教施設は、これまで指定されていた4つのルートと違って、1000人近い出家修行者が集う空間である。富士の裾野は広大であり、無人の原野・森林があるにもかかわらず、なぜわざわざ教団施設上空を縫うようにして飛ぶ必要があるのか。

C-130Hは、その機能上、能力上、散布装置取付可能である。そして、C-130Hが飛来した約1日後から、咽頭痛を訴える出家修行者が急増した。ある者は3日間にわたって声がほとんど出せなくなり、「こんな喉の腫れ方をしたのは生まれて初めてだ」と語っていた。被害を受けている者にとっては、大変気になる事実である。

しかも、C-130Hが、教団施設上空を飛んだのはこれが初めてではない。94年5～6月だけでも8回確認されている。特に、94年12月3日は、95年1月31日のケースと同じような飛行形態をとっていたのである。

◆ 航空法無視の低空飛行

その上、異常な低高度で教団施設上空に侵入してくる航空機も多い。

高度50メートルという超低空飛行を行なう航空法違反のヘリのほか、130、200、270メートルといった航空法施行規則違反の航空機が確認されている。

高度は撮影したカメラの画角と三角関数により綿密に測定した。方法は以下の通りである。

高度の計算の全体的な流れを示すと、

- ①まず、航空機の実際の大きさと写真上の大きさとの比率、およびカメラの画角から、撮影者と航空機までの直線距離を出す。
- ②次に、写真上の航空機の傾きから、撮影者と航空機を結ぶ直線と水平線との間の角度を出す。そして、航空機の高度を導き出す。

条件として、以下の3点が必要である。

- ①航空機は撮影者に対して直角方向に飛んでいること。
- ②航空機は地面に対して平行に飛んでいること。
- ③撮影場所は平面であること（斜面ではないこと）。

①画角

望遠カルディア・スーパー（富士写真フィルム株式会社）

標準レンズ 63°

望遠レンズ 34°

ニコン株式会社

焦点距離 対角線方向画角

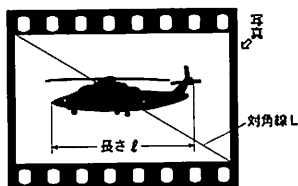
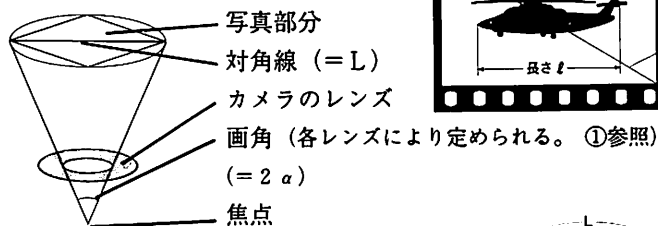
200mm 12°20′

500mm 5°

PENTAX（旭光学工業株式会社）

	焦点距離	対角画角
Zoom105	38mm	59.3°
	105mm	23.3°
F Z 35-105	35mm	63.5°
	105mm	23.3°

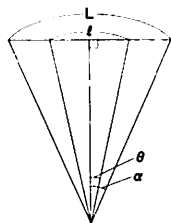
②解説図



$$\frac{\ell/2}{L/2} = \frac{\tan \theta}{\tan \alpha} \doteq \frac{\theta}{\alpha}$$

(α 、 θ が十分小さいので)

$$\therefore \theta = \alpha \times \frac{\ell}{L}$$



③計算式

◎撮影者との直線距離



1994.10.23 15:00-16:00 第2上九

①航空機の実際の長さ、幅を調べる。

(例) アグスタ109A II

10.76m (長) 2.3m (幅)

②写真上の長さ、幅を出す。

(例) 85mm (長) 5mm (幅)

③・撮影したカメラより、画角を調べる。

(例) ニコン500mm

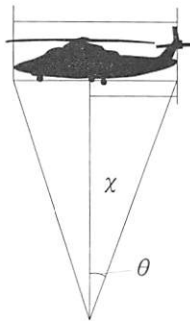
5°

・写真上の対角線を測る

(例) 173mm

④ ②、③ より、角度 θ は

$$\theta = \frac{5 \times 42.5}{173}$$



⑤ ①、② より、撮影者との直線距離 x は、

$$x = \frac{5.38}{\tan 1.23^\circ} = 250.2 \text{ (m)}$$

◎航空機の垂直距離

⑥・航空機の全長をもとに、見かけ上の幅を求める。

$$10.76 : 85 = x : 5$$

$$x = 0.63 \text{ (m)}$$

・航空機と地面との角度を求める。

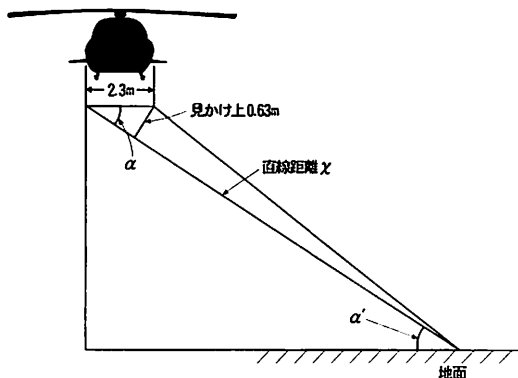
$$\arcsin\left(\frac{0.63}{2.3}\right) = 15.9^\circ$$

∴地面に対しての航空機を見た角度は 15.9°

⑦航空機の地上からの高度を求める。

$$250.2 \text{ (m)} \times \sin 15.9^\circ = 68.5 \text{ (m)}$$

航空機の高度は少なくとも 地上 約 70m以下 となる。





撮影日時 1994年 6月 1日 14時 20分

撮影場所 第2上九

撮影カメラ ニコン・ニコマートFTN,200mm 画角 $12^{\circ}20'$

備 考 目前すぐ横に飛行

1、 14.0m(長) 2.1m(幅)

2、 22mm 0.3mm

3、 $12^{\circ}20'$ 173mm

$$4、 \theta = 12.20 \times \frac{11}{173}$$

$$= 0.776^{\circ}$$

$$5、 x = \frac{7}{\tan 0.776^{\circ}}$$

$$= 516.8(\text{m})$$

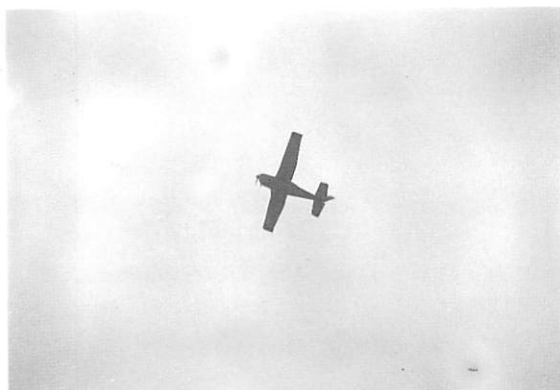
$$6、 14:22 = x : 0.3$$

$$x = 0.19$$

$$\arcsin\left(\frac{0.19}{2.1}\right) = 5.22^\circ$$

$$7、 516.8 \times \sin 5.22^\circ = 47.02(\text{m})$$

高度 約 50m



撮影日時 1994年 6月 10日 13時 14分

撮影場所 第2上九

撮影カメラ Cannon EF TAMRON SP

備 考 非常に低空である。

1、 8.59m(長) 10.91m(幅)

2、 18.6mm 23.5mm

3、 5° 173mm

$$4、 \theta = 5 \times \left(\frac{37.2}{173} \right) \\ = 1.075^\circ$$

$$5、 x = \left(\frac{4.295}{\tan 1.075} \right) \\ = 228.9(\text{m})$$

$$6、 8.59:18.6 = x:23.5 \\ x = 10.85(\text{m}) \\ \arcsin \left(\frac{10.85}{23.5} \right) = 36.87^\circ$$

$$7、 228.9 \times \sin 36.87^\circ = 137.34(\text{m})$$

高度 約 140m

これらの数値は、法的な根拠としては認定されるものではないが、誤差の枠内で最大の数値を使って算出しており、極めて確実性の高いものである。

航空法では、低空飛行を禁止している。それは、低空状態で不意のエンジン故障などが発生すると、事故を起こす可能性があるからだ。低空で失速に陥った場合、回復高度に十分な高度がなく、そのまま地面に激突してしまう。

低空では小回りが利くように飛行速度を落とす傾向がある。低速飛行であるほど失速しやすく、かつバンク角（航空機の横の傾き）を深めるほど失速速度が増大するので、不意の失速に陥りやすくなる。

軽飛行機でも失速すると100m程度の高度を失うため、超低空飛行では回復不可能となるのだ。

具体的な高度は、航空法施行規則第174条に定められている。

◎人又は家屋の密集している地域の上空にあっては、当該航空機を中心として、水平距離600mの範囲内の最も高い障害物の上端から300mの高度

◎人又は家屋のない地域及び広い水面の上空にあっては、地上又は水上の人又は物件から150m以上の距離を保って飛行することのできる高度

後者の場合は、原野の1軒屋などの場合である。オウム真理教上九一色村施設の場合は、建物数、周辺住民、敷地内の人口などを考えあわせると「人又は家屋の密集している地域」にあたるといえよう。つまり、前者の基準が適用されるべきなのである。

低空飛行による最近の事故例としては、94年10月、朝日新聞本社のヘリコプターが墜落、乗務員3名が死亡するという事故が起こっている。真っ二つに折れた尾翼側が民家の屋根に乗り、操縦席側は畑にたたきつけられて完全に分解していた。墜落時の衝撃がいかに強烈であったかを物語っている。

オウム真理教の修行者は、いつ航空機の墜落事故等の巻き添えとなって人命を奪われてもおかしくない状況に置かれているのである。

◆ 悪質な飛行方法

航空法第85条では、「粗暴な運転の禁止」を定めている。これは、必要のない低空飛行、その他他人に迷惑を及ぼすような方法で操縦してはならないという内容である。

オウム真理教施設上空に飛来する航空機は、この法律に反するものが非常に多い。中には、第30条で定める「非行」に相当すると思われるものまである。

同一地点での継続的な一点旋回飛行。

執拗な低空飛行。

旋回。

ホバリング。

それらに伴うけたたましい騒音。

これらの飛び方そのものが違法であり、オウム真理教に対する悪意が存在することを証明している。

数多くの航空機が、悪質な飛行方法を繰り返している。しかも、それは目的が不明であり、また無秩序なものである。それが単にオウム真理教施設上空に無目的にやってきたとは考えにくい。

しかし、これらの航空機が毒ガス噴霧の目的で飛来したものと考えれば、その異常さも容易に説明がつくのだ。

◆ 体育館毒ガス事件

94年3月のある夜、第2上九敷地内の体育館の入り口のドアの窓ガラスが何者かに破られた。中に入ると、何とも表現できない薬品くさいイヤな臭いが漂っている。

当時、この体育館は被服班が半分を使い、残りは倉庫になっていた。そして、昼間だけ使用し、夜間は人がいないようになっていた。

被服班のメンバーが作業を始めると、作業中にもかかわらず、たちまち昏眠状態に陥ってしまった。メンバーたちは全身体調を崩し、全員が昏眠状態になってしまって、その日は仕事にならなかった。

ある修行者は、そのとき胸に痛みを感じたという。「その日は特に激しく痛み、まるで生け花の剣山で突き刺されるようでした。気功の修行の時間も、胸の痛みがひどくて、ずっとうずくまっていました」

翌日も体育館の中は薬品臭さが残っていた。通常は毒ガス防衛策として窓を開けてはいけない規則になっていたのだが、この薬品臭さを除くため窓を開けると、体調が少し回復したのである。

体育館には、これといって盗まれるような高価なものはない。また、被服縫製作業と物置として使われていたため、毒ガスが内部から発生するはずはない。何者かがガラスを破り、毒ガスを放り込んだものと思われる。

【夜間の苦しみ】

警備担当の者は、一様に、
「昼間は毒ガスの影響が少ないが、夜になるときつい」と訴える。日が昇っている間と、日没後夜明けまででは、明らかに体調が変わるのだ。

高原にあるオウム真理教施設では、日が沈むと、気温が急激に下がる。その途端、がくんと力が抜け、眠りに陥ったり、あるいは目の痛み・頭痛などの不調を訴えるのだ。夜型の行動パターンを持つ修行者でも、日没後の屋外警備は非常につらいという。

この状態は、夜が明け、気温が上がりはじめると急速に治まるのである。もちろん、日中でも毒ガスを目の前で噴霧された場合は、即影響が現われるのは言うまでもない。しかし、昼と夜で影響に差があることは間違いない。

昼間は地面が暖められ、空気は上昇する。逆に、夜は冷やされ、空気が下降する。空気より重い毒ガスも、昼間は上昇気流に乗って舞い上がり、夜間、冷えるとともに地上に降り注いだという可能性が考えられるのである。

◆ 異常な糞尿散布

94年5月7日午前10時過ぎ、第2上九の東側の牧草地に糞尿が撒かれた。

そこには確かに糞尿が撒かれていた。それも普通の撒き方ではない。道から牧草地に向けて、大量に捨てられたという感じの撒き方なのである。

そもそも牧草地に糞尿を撒くのは、牧草を刈った後、牧草地がやせるので、その栄養分を補うためである。ところが、ここでの撒き方は、まるでそこに池を作るように、大量にびしゃびしゃになるまで撒くのである。平均的に一面にならすというのではなく、1カ所に集中して撒いているのだ。これは異常といわざるを得ない。こんな撒き方をしたら、かえって牧草が枯れてしまう。

それだけではない。本当にただの糞尿なのか。色はどす黒く、たしかに糞尿の匂いもするが、それ以上に強烈な何かの匂いと混合しているのである。

そのあたりは湿っていて、異様な臭気が立ちこめていた。まるで魚の腐ったような、耐え難い強烈な臭気である。

その日、すでに2度撒かれた形跡があったが、さらにもう一度、タンクトレーラーがやってきた。青いトラクターに銀色のタンク車をつけたものである。タンクの横には「B○○○○」というオレンジ色の文字が入っている。そして、タンクトレーラーはタンク車の尻を牧草地に突っ込

んで、糞尿を噴射し始めたのである。

この日、14時35分にまたもや糞尿をたれ流し、運転手は自ら第2上九に向かって写真撮影までしている。そして15時10分と15時53分にも撒いて、この日は終了した。

この第2上九の東の牧草地に撒かれた黒い糞尿は、多くの出家修行者の健康状態を悪化させた。

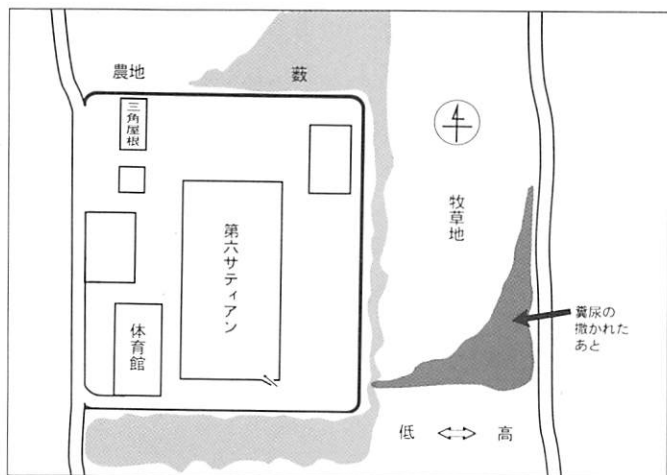
そもそも、この糞尿の撒かれ方自体が異常であり、とても牧草地のために撒かれたものとは思えない。いや、それどころか、この第2上九にある第6サティアンビルを狙って撒かれたとしか考えられないのである。

まず、撒かれた量が異常である。同じ所に、水たまりのようになるまで、ドボドボと集中して撒かれている。こんなことをしたら、牧草はかえって枯れてしまう。

また、糞尿の撒かれた範囲だが、なんとその西側にある第6サティアンと全く同じ幅で撒かれているのだ。

この牧草地は、第2上九の東側から南側にかけてかなり広い範囲を有する。その中のほんの一部だけ、しかも第6サティアンビルと全く同じ幅で撒かれているというのは、極めて意図的なものである。

その中でも、特に集中して糞尿が撒かれ、池を通り越して河のようになり、第6サティアンに向かって流れ出していた部分があった。その「川」の進行方向をたどると、当時第6サティアン内にあった、麻原尊師の居住していた区域に向かっているのである。



この日以来、体調の悪化を訴える出家修行者が続出した。それは今までの毒ガスによる症状とは明らかに違う、独特のものであった。喉の痛みが出、咳が止まらなくなり、熱が出る。それはちょうどひどい風邪をひいたときと同じような症状である。しかしそれがどのような病原体によるものかは、判明しなかった。

ある日突然、異常な形で糞尿が撒かれ、その日を境に場所を異にする多くのオウム真理教関連施設で同じような病状が続出。しかも病人が出ているのはオウム真理教関連施設だけで、その他の住民の間でこの時期そのような風邪が流行したという話はないのである。

これが何であったかは、結局わからずじまいである。ただし、何らかの細菌類が撒かれた——すなわち「細菌兵器」攻撃——の可能性も考えられるのだ。

◆真夜中の農作業

これに対して麻原尊師は、出家修行者全員にうがい薬を使ったうがいを義務づけ、また東の牧草地の滅菌作業を指示された。出家修行者たちはレインコートを着込み、塩素による滅菌作業を行なった。だが、攻撃はやむことがなかった。

5月25日の夜11時ごろのことである。第2上九の南の牧草地で、草刈機の作業の音が聞こえ始めた。

夜12時を過ぎても「農作業」は続いている。

南の牧草地は、草刈機のライトで照らし出されていた。月明かりと星明かり以外に照らされることのないその場所の明るさは、普通ではない。牧草地で動いているのは、4台の草刈機だった。

最終的に4台は、午前1時をまわったところに帰っていったのである。

5月28日午後7時前、南の牧草地から強烈な臭気が襲ってきた。第2上九敷地内の警備からは、南の牧草地でライトが見えたと報告されているので、このときから糞尿が撒かれ始めたのだろう。

翌5月29日午前11時には、例の「B○○○○」と書かれたタンクトレーラーが登場。南の牧草地で大量の黒い糞尿を撒き始めた。

25日の夜の草刈りは、この糞尿を能率よく撒くためのものだったのではないだろうか。

強烈な臭気が出家修行者たちを襲った。東の牧草地のときは、地理的には第2上九が下になるものの、風下になる時間が少なかった。しかし、南の牧草地からだとも、1日中ほとんど第2上九が風下に当たるため、その臭気はまさに耐え難いものであった。

糞尿の撒き方は、やはり異常であった。まんべんなく、できるだけ均等に撒くのではなく、ある所では大量に撒いて、ある所では全く撒かないという、まだら状の撒き方なのだ。とりわけ大量に撒いてある所はべちゃべちゃで、まるで沼のような様子を呈していた。

これ以降も何度も糞尿は撒かれるが、出家修行者たちはなすすべもなく、ただ強烈な臭気を浴び続けるしかなかった。もちろん、同時に体はむしばまれ、咳は激しくなるばかりだったのである。

◆すべてを知っている男

上九一色村のオウム真理教反対派のT氏が、94年5月4日の日中、不審な2人の人物と共に第2上九を訪れてきたことがあった。

このときT氏が連れてきた氏名不詳の不審人物は、実はオウム真理教に毒ガス攻撃が仕掛けられていることを知っていたようである。彼はうっかり、こう漏らした。

「俺たちもわざわざ危ないのを押して来てるんだよ」

対応した警備係がすかさず聞く。

「何が危ないんですか？」

すると、男は急にしどろもどろになり、

「一方通行の細い道でガタガタだから、向こうから対向車が来たら危ないし……」

などと支離滅裂なことを言い始めた。さらに警備係が、

「あ、変な臭いがする！」

と言ってみたところ、他の2人は何とも言わなかったのだが、この不審人物は突然青ざめ、うろたえたのである。

この男は「オウム真理教周辺は危険」であり、「変な臭いのものは怖い」ことを知っていたのではなかろうか。

出家修行者たちは、こういった事件を通じて、やはりオウム真理教に対して毒ガス攻撃がなされているということを確認していったのである。

◆毒ガス攻撃の方法

ここで、今までの事実を合わせ、オウム真理教に対する毒ガス攻撃において取られる可能性のある方法について、まとめてみよう。

1 周辺の何らかの施設

継続的に微量の毒ガスを噴霧することによって、気づかれず、秘かにオウム真理教の活動を弱めることができる。

2 不審車両

ジェットバック、タンクトレーラー、4トンアルミ車などが不審な動きを見せた後、健康被害が続出するという例が多く報告されている。毒ガスだけではなく、細菌兵器も含めた攻撃が行なわれていた可能性が考えられる。

3 上空からの散布

特に超低空飛行・風上でのホバリングを行なうヘリコプター、そしてオウム真理教施設上空を不審な航跡を描いて飛行する機体が頻繁に目撃されている。これらの機体であれば毒ガス噴霧も可能である。その他、戦闘機・攻撃機・偵察機が常識では考えられないほど頻繁に飛来している。

また、不審な民間機も多く目撃されている。

4 不審な侵入者

外部から敷地に何者かが侵入していた例も報告されている。開放的なオウム真理教施設の敷地内に何者かが忍び込むことは意外に容易であったかもしれない。

また、教団内部に何らかの破壊活動を目的としたスパイが入り込んでいる可能性も否定はできない。

体育館毒ガス事件などは、敷地内に入り込んだ何者かの仕業であると考えられる。



【第8章】
波紋

◆取り合ってくれない村当局

オウム真理教は、この毒ガス攻撃に対して、手をこまねいて見ていたわけではなかった。松本サリン事件が起こる前の94年6月以降、上九一色村役場に何度も赴き、村長ら村幹部に対して、毒ガス被害に関する必要な調査と対策を講じてもらうよう、申し入れをしてきている。

しかし、村は全く動いてくれなかった。

一つには「まさかそんなことはないだろう」という一般常識の観念があったことは想像に難くない。確かに「オウム真理教が毒ガス攻撃を受けているから調べてください」と言われて、すぐに信じろというのは酷かもしれない。

しかし、松本サリン事件など、毒ガスの存在が一般に知られるようになってからも村側は一向に取り合う気配がなかったのである。

上九一色村の一部住民は、オウム真理教を追放しようと考えている。彼らとの対立関係なども背景にあり、村側にはまともに調査する気もなかったのではなかろうか。

94年9月4日には、TBS報道局特別報道センターの岡野保氏に対し、青山弁護士らが詳細に毒ガス被害を訴えたこともある。しかし、やはり真面目に取り上げられることはなかったのだ。

なお、マスコミ報道では「オウム真理教の出家修行者のみに毒ガス被害が出ているのに、周辺住民に被害が見られないのはおかしいではないか」などと言われている。

しかし、それは事実ではない。

まず、地元住民に対する正確なアンケート調査などは今まで一度も行なわれていないのだから、周辺住民に被害が「ない」とはだれも断言できないのである。

また、この慢性的な毒ガス被害は、いきなり死に至るのではなく、微妙な健康被害が積み重なるものである。「何となく調子が悪いな」という程度の自覚でも、実は毒ガス被害ということもあるのだ。

上九一色村がオウム真理教の毒ガス被害の訴えを無視し続けたのは、実際には富士ヶ嶺地区の住民の健康を犠牲にし続けたことになるのではなかろうか。

◆「キーレーン」毒ガス殺人事件

94年12月17日、東京ベイN.K.ホールにて、ロシア・オウム真理教シンフォニー・オーケストラ「キーレーン」の東京公演が行なわれた。この会場に対しても毒ガスが噴霧された形跡がある。このとき、指揮者や演奏者、あるいは聴衆に症状が出ているのだ。突然多くの人が、同じような症状を同時に発するという状態は、普通の風邪や感染症では考えられないことである。

このとき、2人のお子さんを連れてきた信徒さんがいた。公演から帰ると、生まれたばかりの子供の方が発熱したため、医療機関に連れていったのだった。その間に、4歳になる子供の方が急死してしまったのである。

もしこれが毒ガスによるものだとすると、すでに死者が出ているということになる。オウム真理教に対する殺人実験のようなものが行なわれていると考えられるのだ。

◆「山梨サリン残留物」事件

1月1日付けの『読売新聞』朝刊の1面に、山梨県上九一色村において、サリンの残留物が発見されたと報道された。

一部マスコミは、94年7月に上九一色村で起きた悪臭騒ぎを取り上げ、「サリンの漏出事故である」という報道をしている。そして、第7サティアンでサリンが製造されたのは間違いのないという前提のもとに、そのような報道をなしているのである。もし、それがサリンであるなら、サリンの症状が出るはずだが、報告された中にはそのような症状は出ていない。

当初は「カーバイドのような臭いがした」と言っていたと報道されているのに、今ではまるで「サリンの臭い」であったかのように報道されている。そもそも、サリンの臭いとはどのようなものだろうか。

最大の問題は、94年7月に採取した土壌からサリン残留物を発見し、公表するのに半年も経っているということである。週刊誌によると警察はサリンを数日で検出できるといふ。しかし「検出できた」とされているのは11月末で、しかも発表したのは元旦である。極めて不自然だ。

そもそも、この「残留物」は、どこの土壌から採取した

のか全く明らかにされていない。これでは証拠能力を持たない。上九一色村のオウム真理教被害対策委員会のT氏ですら、このことを何も知らないのだ。

——警察が土砂を採取したという場所はわかりますか？

(T氏) わかりませんよ。

——いつごろ来たんですか？

(T氏) それもわかりませんね。立ち会った人がいないし、見た人もいないからね。

(ナレーション) 不思議なことに、いつどの場所で採取した土壌からサリンの残留物が検出されたのかがはっきりしないのである。採取を行なったという山梨県、分析したとされる警察庁でも、メチルホスホン酸ジイソプロピルが検出されたかどうかは、正式には発表していないという。

(「ニュースステーション」より)

つまり、警察が正式に発表していないものを『読売新聞』が取り上げて、1月1日の朝刊の1面に堂々と載せたのである。これはマスコミの暴走ともいえる。

ここ数カ月のオウム真理教関連報道では、警察の公式発表でないものを「警察によると」として伝えている事例が極めて多い。こうして事実が見えなくなっていく。

◆告 訴

1月4日、オウム真理教の信者18名は、山梨県上九一色村の教団施設に毒ガス・サリン等を噴霧した疑いで、「氏名不詳者」等を告訴した。

それは、1月1日の『読売新聞』の報道が、教団に対するサリン攻撃の事実を裏付けるのではないかと考えられ、これまでまともに取り合ってもらえなかった毒ガス攻撃の事実が、真面目に取り上げられるのではないかと期待されたからにはほかならない。

この報道によって、教団がこれまで村当局などに対して主張してきた「毒ガス攻撃の存在」という事実の一端がようやく証明された。まだ攻撃箇所や攻撃方法の明確な証明はできなかったが、これ以降は捜査機関によって捜査してもらえると確信し、告訴に踏み切ったのである。

なぜ被害届でなく、告訴でなければならなかったのか。教団側では、空気清浄機の設置や解毒剤の服用等の自衛措置をとらなければ、最終的に数百、数千の出家修行者が死に至る可能性があった。それは残虐にして非道な犯行であり、彼らにこれ以上の犯罪を犯させないため、あえて犯人の処罰を求める告訴手段をとったのである。

また、サリンについては、昨年の松本サリン事件以来、日本中で解決を求められている事件で、公共性が高く、また実際に数百という出家修行者が死の危機に瀕しているこ

とからも、捜査を急いでもらうために告訴に踏み切ったのであった。

残念ながら、教団の限られた調査能力では限界があり、噴霧方法等までは解明できなかったが、数々の状況から毒ガスを噴霧している状況証拠がいくつかあったため、告訴に踏み切ったのである。そして、捜査機関による一刻も早い真実の解明を待ち望んでいたのである。



【第9章】

新たなる攻撃——Q熱リケッチア

◆未知の症状の発生

94年12月下旬、上九一色・富士宮の出家修行者の間では「風邪」が流行った。

発熱 激しい頭痛 胸痛
筋肉痛 関節痛 発汗
悪寒 食欲不振 嘔吐

などが起こったのである。

これだけならば、通常のインフルエンザと考えられる症状である。しかし、これ以外の異常な状況が存在した。

まず、これらの症状が集中的に、しかも一斉に発生している。自然発生ならば、一斉に発症することはない。また、インフルエンザとは考えられない症状があった。

目の奥の激しい頭痛

発熱が7日以上も続く

ペニシリン系・セフェム系の抗生物質を投与しても

症状が改善しない

これらの理由から、単なるインフルエンザではないのではないかと考えられた。

「95年のインフルエンザは重かった」と、全国的に言われている。だが、発生時期が違っているのである。オウム真理教においては94年12月下旬に流行したのに対して、全国的には1月に流行しており、時期的にずれがある。これを同じものと見なせるかどうか。

もちろん、毒ガスとも考えられない。

さらに不審な点がある。

急性の激しい症状が過ぎた後も、出家修行者の間で慢性的な疲労を訴える人が多かった。

そこで、オウム真理教の医師が検査したところ、なんと「Q熱」という聞き慣れない病気であることが判明したのである。

◆Q熱リケッチア

さて、このQ熱リケッチアとはどのようなものだろうか。これに関する文献資料も、毒ガス文献と同様、さほど苦労することなく入手することができた。

まず、毒ガスの資料としてすでに述べた『生物化学兵器』ならびに『生物化学・毒素兵器の歴史と現状』には、リケッチアや細菌兵器に関する資料が載っている。Q熱に関する概要はこれでわかる。

また、Q熱リケッチア自体は、細菌兵器「にも」用いられるものの、本来は自然に存在する病原体である。兵器としてではなく、「Q熱」という伝染病の症状、感染経路、その対処法などについては、医学文献に掲載されているものを探せばよかった。

微生物関係の医学誌、またそれに関する研究論文を当たってみる。Q熱に関しては国内の研究家の発表もいくつかあり、予想したほど難しい検索作業ではなかった。むしろ、難解な医学用語を読み解く方に時間がかかった。

こうして、聞き慣れない病気であるQ熱についても、次のようなことがわかった。

1935年、オーストラリアにおいて食肉解体従業員の間に熱性の病気が多発した。これを調査したデリックが「Q熱」の名付け親である。この疾患が今までに報告のない感染症であることから、当初原因が不明であったため“query (疑問)”の頭文字をとり、Q-feverと呼んだのであった。

Q熱という病気の原因はリケッチアである。

リケッチアとは、細菌とウイルスの中間的な微生物の一群を指す。長さ0.3~0.5ミクロン、幅0.3ミクロン程度で、ウイルスと同様、細胞の中に入らなければ増殖できない。

Q熱を起こすリケッチアは *Coxiella burnetii* と呼ばれる。

Q熱は、人および動物共通の感染症である。Q熱リケッチアは世界中に存在し、しかも広い宿主域を持っている。マダニ類、鳥類、野生あるいは家畜獣類、それにヒトなどあらゆる生体内で増殖する。

感染ルートの第1は〈ダニー野生動物（鳥類）—ダニ〉で、これが潜在的な汚染源となる。このルートの中に家畜（愛玩動物^{あいがん}）やヒトが介入して第2の感染ルート、〈ダニー—家畜—家畜またはヒト〉の感染に進展する。また、Q熱リケッチアは感染家畜の胎盤や羊水を汚染し、土地をも汚染する。

ヒトが感染するのは、次のような場合である。

Q熱リケッチアを含む粉塵を吸入する（最多）

乳肉製品などから経口的に感染する（多）

Q熱リケッチアを持つダニから感染する（まれ）

ヒトからヒトへ感染する（ほとんどない）

つまり、ヒトの感染は、主にチリ・ホコリの中のリケッチアを吸うこと、あるいは汚染した肉や牛乳などが主な感染源であり、ダニによる感染はほとんどない。

リケッチアは外界に対する抵抗性が強い。このため、保菌家畜や汚染された畜産物による輸入感染症の増多が懸念されている。

Q熱リケッチアは、特異な性質を持つ。

感染した細胞の中で増殖するとき、もしpH4.5以下であれば「芽胞」のような形に変わるのである。これは物理的・化学的な影響に対して抵抗性が高い。熱にも強いので、リケッチアが芽胞に変化した場合、根絶するのは極めて困難になる。

この芽胞は細胞の中に長期間とどまり続け、その後再発することもある。つまり、Q熱は慢性化することが怖い病気なのだ。

◆ Q熱の症状

Q熱の症状は急性と慢性に分かれる。

〈急性〉

潜伏期は14日から26日だが、感染量が多いと短い。一般に高齢者が発症しやすいといわれている。

症状は、インフルエンザに似ている。その激しさと持続期間はさまざま。

発熱、激しい頭痛、胸痛、筋肉痛、関節痛、発汗、悪寒、食欲不振、嘔吐などを起こす。

また、咳^{せき}などから肺炎、気管支炎、肝炎、髄膜炎、脾臓の腫れなどを伴う。まれに皮膚の発疹を示す。ときには黄疸^{おうだん}も起こり、肝機能異常も起こる。

多くは約12日で下熱し、回復する。

〈慢性〉

急性感染後の回復から心内膜炎^{*}へと移行する。この発生率は2%から20%で認められ、死亡率が高くなる。その他、肺繊維症などの種々の病像を呈する。

急性の症状が起きたのちに慢性へ移行するのだが、発病しない場合もある。慢性に移行したかどうかは、次のことでわかる。

- ①激しい症状は起きないが、細胞内に潜伏して慢性疲労症候群にかかる。
- ②半年から3年後にリケッチアが細胞から血液中に出て、病状が再発し、心内膜炎などの症状が起こる。

「慢性Q熱の場合は、数カ月から年余にわたる長期間の化学療法を必要とする。通常、tetracycline系とrifampicinの併用が行なわれるが、必ずしも十分な効果が得られない場合が多く、内科的治療のみでは発症後3年以内に死亡する例が多いという」

(『臨床と微生物』Vol.21 No.6 1994.11参照)

※心内膜炎について

慢性Q熱の場合、ほとんどは感染性心内膜炎となる。

心内膜炎とは、リケッチアなどの微生物が心臓の弁膜や心内膜に付着して、イボを形成し、細菌のコロニーから菌が血液中に流出して、菌血症、全身に菌が行き渡り、発熱・衰弱を起こすものである。

毒力の強弱により、急性の経過をとるものと慢性経過をとるものとに分類されている。

この症状は、心臓弁膜に炎症を生じさせ、弁を破壊するために、血行の異常を来たす。ときとしては急激かつ重篤な心不全に陥ることがあり得る。また一方で、急性ないし慢性の感染症として発熱、倦怠感などのほか各種臓器の塞栓症（血栓を作り血液の流れが阻害さ

れる)を合併するなど、多彩な病状を示す。

感染性心内膜炎は、未治療のままでは必ず死に至り、自然治癒はまずありえない。治療しなければ、急性型のものでは4週間以内に、慢性型のものでは6カ月以内に死亡する。

イボに潜んでいる細菌のコロニーに対しては、手術を必要とする。それでも3割程度は死亡するという文献もあるのだ。

麻原尊師の場合、すでにこのイボが飛び、左前頭葉に血栓ができてしまっている。

一部の報道で、ある医師が「現代は抗生物質ができているのでQ熱は簡単に治る」というようなことを言っているが、そんなに甘くはない。

急性の場合の症状を抑えることは可能だが、慢性になった場合の治療は非常に難しいのである。というのも、食細胞のphagolysosomeの中で、芽胞となり、抗生物質などの物理的・化学的な影響を受けない状態で、細胞中にとどまり続けるからである。

Q熱の治療にはテトラサイクリン系が有効。しかし、慢性感染の際にはあまり効果がなく、12カ月も投与しなければならぬこともある。

◆ 血液検査の結果

オウム真理教においてはオーストラリア製のキットを使い、血清学的検査を実施した。

リケッチアが体内に入ると、肉体の自己防衛機能が働き、リケッチアを防ぐための「抗体」ができる。血液中の抗体を検査すれば、リケッチアが体内に入ったかどうかわかるのである。

Q熱に対する抗体としてはIgM抗体、IgG抗体、IgA抗体の3種が存在するが、今回の検出では、IgM抗体をElisa（エライザ）法によって測定した。

対象としては94年12月末から95年1月14日までに38.5℃以上の発熱、筋肉痛を伴った患者の中から91名を選び、そしてCoxiella burnetii（Q熱リケッチア）に対するIgM抗体価を測定した。なお、IgM抗体は、発症から約12週まで出現する抗体とされている。

結果：	陰性	42名		
	+-	7名	1+	8名
			2+	23名
			3+	8名
			4+	2名
			5+	1名
			<hr/>	
			計	91名

陽性率（1 + 以上）は $42 \div 91 \times 100 = 46.2$ （%）にのぼる。この数字と、動物や畜産関係者や一般健康人における陽性率とを比較してみると次のようになる。

日本国内の乳牛の約30%、獣医の約22.5%（9名中2名）が抗体陽性であった。

（鹿児島大学医学部細菌学教室 小田らの調査）

乳牛の46.6%、ヒツジの28.1%、ヤギの23.5%、獣医の22.5%、食鶏処理場従業員の11.2%、一般健康人の3.3%において抗体が陽性であった。

（岐阜大学農学部 平井らの調査）

この報告から考えると、オウム真理教の修行者の陽性率が46.2%というのは異常な数字である。獣医の倍以上の数字が出ているのだ。

疫学的には、人への感染源として重要なものはウシ、ヒツジ、ヤギなどの家畜であり、人から人への感染はほとんどないといわれている。もちろん、オウム真理教には家畜はいないため、一般健康人の3.3%と比較しなければならないのである。

いずれにしても異常な発症率であるといえよう。

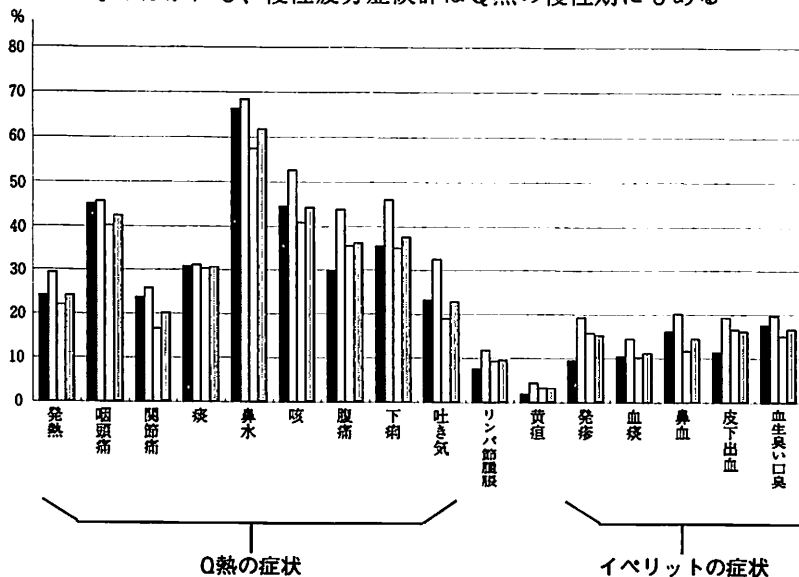
◆処置をしなければ命はあと3年

出家修行者に対し、95年2月26日にも健康調査を行なった。グラフをご覧ください。

このグラフに現われた出家修行者の症状を検討してみると、Q熱の急性の症状によく似ていることがわかる。

血痰その他はイペリット等の毒ガスの症状と考えられるが、発熱、激しい頭痛、胸痛、筋肉痛、関節痛、発汗、悪寒、食欲不振、嘔吐などが特に集中的に一斉に12月下旬から起きているのは、毒ガス被害としては不自然である。

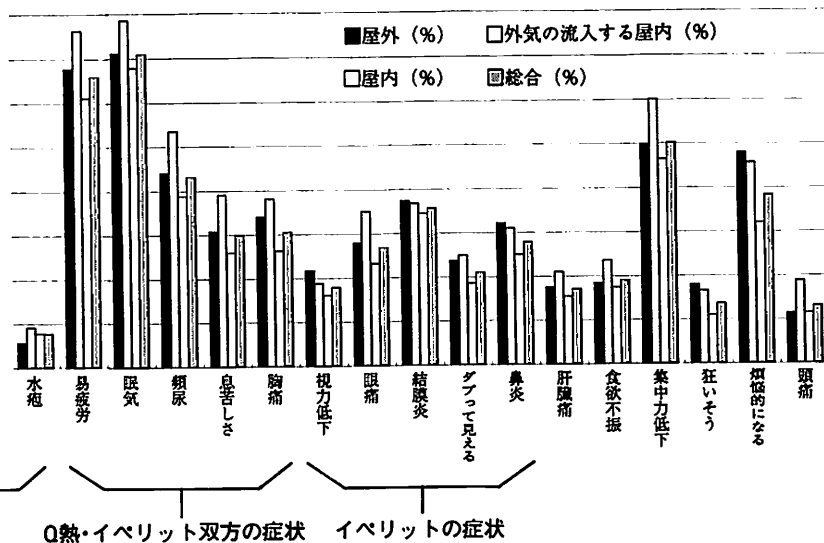
そのほかにも、慢性疲労症候群はQ熱の慢性期にもある



症状である。イペリットの症状にも「疲れやすさ」というものがあるが、イペリットを中心に撒かれていた昨年6月の時点では57%であったが、2月26日の健康調査では66%に増大している。

グラフ全体を見たときに、イペリットの影響が弱まっている中で、Q熱的な症状が強まっていることは、血液検査の結果を裏付けているといえよう。

症状および血液検査により、出家修行者のうちの約半分近くが、Q熱リケッチアに感染していることが判明した。しかも、Q熱リケッチアの慢性期に入っている。これは、現代的な処置をしなければ、3年以内に死ぬということの意味する。



◆生物兵器・Q熱リケッチア

では、どのようにして感染したのだろうか。

先ほどのデータから、畜産関係者において発症することが知られているが、患者たちの中には、これらの動物と接する者は全くいない。

可能性を消去していくと、これは何らかの方法によりQ熱リケッチアが「噴霧」されたためと考えざるを得ない。

考えられるものとして、エアゾール式、スプレー方式で噴霧するという方法がある。

特に12月は頻繁に飛行機やヘリコプターが来たので、そこから空中散布をした可能性が高い。つまり、Q熱リケッチアは「生物兵器」として、オウム真理教に対する攻撃用に噴霧された可能性が出てきたのである。

ところで、2月26日の調査結果グラフで、屋内と屋外にあまり差がないのはなぜか。それは、毒ガスと違って被曝量あまり関係なく、細菌が体内に入ったか否かだけが問題になるためと思われる。

◆ 生物兵器として特異なリケッチア

次の表は、軍事関係者が「生物兵器として有効な潜在性を持っている」と認めた細菌・リケッチア・ウィルスの表である。1956年、69年、83年の3つの文献を比較すると、生物兵器として使われるものの推移がわかる。

表で+とされているのは、文献に記載されているという意味である。

	文献公開年		
	1956	1969	1983
【ウィルス】			
天然痘	+	+	+
日本脳炎B型	+	+	+
ベネズエラ馬脳炎	+	+	+
黄熱病	+	+	+
デング熱	+	+	+
リフトバレー熱			+
ラッサ			+
クリミアーコンゴ出血熱			+
マールブルグ			+
エボラ			+

	文献公開年		
	1956	1969	1983
【リケッチア】			
Q熱	+	+	+
オウム病	+	+	
発疹チフス	+	+	
ロッキー山紅斑熱	+	+	
【細菌】			
炭疽菌	+	+	+
野兎病菌	+	+	+
ブルセラ菌	+	+	
コレラ菌	+	+	
ペスト菌	+	+	
馬鼻疽菌	+	+	
腸チフス菌	+	+	
ジフテリア菌	+	+	
サルモネラ食中毒起因菌	+	+	

(『生物化学兵器』『生物化学・毒素兵器の歴史と現状』より作成)

この表からわかることは、生物兵器の中心が細菌・リケッチアからウイルスに移行しているということである。特に細菌は炭疽菌・野兎病菌以外のものは廃れてしまった。逆

にウイルスは、新しいものが次々と出現している。

ウイルスは細菌・リケッチアより小さい。そして感染性が強く、抗生物質が無効であり、診断技術が複雑、などの理由で、ウイルスが重視されるようになったものと思われる。

この表の中の、リケッチアの項目を見ていただきたい。リケッチアも大半が使用されなくなってきたが、唯一残っているのがまさにQ熱リケッチアなのである。この事実は、Q熱には、単なるリケッチアとしてではなく、何か特異な性質が存在することを暗示している。

その「特異な性質」こそ、慢性化すると3年で宿主を殺すという脅威ではないだろうか。オウム真理教の出家修行者は、毒ガス以上の脅威にさらされているのである。

◆攻撃は今も続いている

彼らの攻撃は、完全にQ熱リケッチアに切り替わったわけではなく、毒ガス攻撃もいまだに続いている。

オウム真理教福岡支部において、95年4月中旬、5時から6時ごろ、何日か続いて、生臭い臭い、硫黄に似た臭いがするようになった。支部の者が呈した症状は、イペリット特有のものであった。

この支部がある建物は9階建てで、6階に道場がある。不思議なことに3階と5階の人が夜に引っ越しをした後にこの臭いがするようになったのである。そして、ふだんは女性の掃除員が階段の掃除をしているのに、強制捜査の前には男性が来て掃除をしていった。すると臭いも消えたのである。

その他、警察が来ないときには、各施設に対して毒ガスなどが噴霧されている形跡がある。オウム真理教は今日も「彼ら」の攻撃にさらされているのだ。



【追補編】

国家権力による毒ガス使用

少数反対派抹殺、そして人体実験

◆毒ガス使用の歴史

「オウム真理教に対する毒ガス攻撃があるなどとは信じられない。そもそも、どんな目的で攻撃したりするというのか」

おそらく、その目的は、化学兵器の生体実験を兼ねたオウム真理教への弾圧であると考えられる。

「少数者抹殺」

「生体実験」

毒ガスが用いられるとき、この2つのキーワードが常につきまってきた。

では最初に、毒ガスが少数者の抹殺のために使用されてきた歴史を概観してみよう。

◎ラオスのメオ族抹殺

1976年6月から8月にかけて、ラオス人民解放軍は「反動的なメオ族を消滅させる」ことを目的として「破壊消滅作戦」という作戦を極秘裏に展開した。それは、航空機からメオ族の部落に対して化学物質を散布するというものであった。ラオスの化学作戦の攻撃目標はレジスタンス運動の中心になっているH'Mong村に向けられており、攻撃方法は飛行機またはヘリコプターによる散布、爆弾あるいは空対地ロケットを使用している。

そして、ラオスでは1975年から1981年12月にかけて、260

回の化学兵器による攻撃を受け、少なくとも、それによって6500人が死亡しているといわれている。

化学物質は、黄色の雲を形成して地面にゆっくり降り注ぐことが多かったので、その物質が降るさまは「黄色い雨」のようだったと形容された。この黄色い雨をまともに被った部落民や家畜は、その場で倒れて呼吸困難を起こし、そのほとんどが死んだ。

西側の調査によって、「この黄色い雨の本体はマイコトキシシン（カビ毒）の1種、トリコテセンである」と確定されている。

黄色い雨による被害者の症状は次のとおりであった。

- 1 悪寒
- 2 目の痛みと視力不明瞭
- 3 咳
- 4 呼吸切迫
- 5 皮膚に小さな堅い水疱
- 6 嘔吐（しばしば血液を伴って起こる）
- 7 血性の下痢

（『市民よガスマスクを装着せよ』グリーンアロー出版社、
『生物兵器と毒素兵器の歴史と現状』不二出版を参考に
した）

麻原尊師の車に黄色い粒がついていることがあったが、この2つの「黄色」の関連性も気になるところである。

◎イラクのクルド人虐殺

1988年3月末、イラクは、国内の反政府勢力であるクルド人を殲滅^{せんめつ}するため、イラク北東部にあるクルド人の支配地域・ハラブジャに、神経ガスとマスタードガスを使った攻撃を行なった。その結果、婦女子や老人を含む3000名から5000名といわれるクルド人が虐殺された。91年4月には、クルド人村落の真ん中に毒ガスを入れた樽^{たる}を投下するという実験を行なっている。

◎アメリカFBIの宗教団体潰し

1993年、アメリカ連邦捜査局（FBI）は、テキサス州の宗教団体「ブランチ・ダヴィディアン」の本拠地を攻撃した。その際に使用された化学兵器には、クロロベンザル・マロニトリルと呼ばれる物質が含まれていたのだが、これは化学兵器禁止条約で戦時の使用が禁じられている。大統領広報官は、「戦時の使用は禁止されているが、治安維持のための使用は除外されている」とコメントした。

（93年4月23日付『朝日新聞』夕刊）

◎中国共産党

チベットの僧侶を弾圧する際、毒ガスを用いている。

このように、毒ガスは、反体制的な少数者を抹殺するために各国の国家権力によって密かに用いられてきた歴史を持つ。

◆軍隊が行なう毒ガス生体実験

毒ガス噴霧は、軍による実験の可能性もある。

常に軍人は新兵器の効果を試してデータを収集したいと考えている。湾岸戦争でもそうだったが、戦争は新兵器の格好の実験場だ。化学兵器についても、戦争のたびに投入され、敵に対して堂々と「生体実験」が行なわれてきた。

ところが、それだけでは十分なデータがとれないのか、軍部は自国民等の味方に対しても、十分な説明をせず、または全く知らせないまま、秘密裏に生体実験を行なってきたのだ。

ここでは、国家権力や軍隊が、何も知らない市民を対象に生物・化学兵器等の人体実験をしてきたことをうかがわせる歴史的事実を示すことにする。以下は、表面に現われた事例のごく一部である。

◎イギリス・アメリカ軍は、第2次大戦中、ニューギニアで見つけた日本軍の毒ガス弾をもとに、オーストラリアに化学戦の研究施設を造り、オーストラリア兵50人を使って人体実験をしていた。

◎アメリカ政府は、第2次大戦中、化学兵器用防護服や治療法の開発を目的にして、6万人以上のアメリカ軍兵士らを対象に大規模な人体実験を行っていた。

◎イギリス軍の生物・化学戦の中枢をなすポートン研究所

は、軍人から志願者を募り、過去25年間にわたって、毎年200人の男女兵士を対象に、さまざまな毒ガス実験を秘密に行なってきた。その実験には、被験者を気密ガス室に閉じこめて、致死性のサリンやソマンといったガスを吸わせるというものもあった。

(以上3例は日本の新聞報道による)

◎1944年にアメリカ海軍が軍人に対してマスタードガス実験を行なった。

◎1945年にアメリカ海軍は2人の入院患者に放射線実験を行なった。文献化された事例の中で、アメリカ軍が人体放射線実験に関与した最初期のものにおいて、2人の入院患者に放射線化合物を注射し、その有毒化合物がどれくらいで体外に排出されるかの研究が行なわれている。

◎アメリカ陸軍とCIAは、1960年代、ワシントンの空港、シカゴとニューヨークの地下鉄に密かに細菌をばらまいた。アラバマやサンフランシスコでも同様の実験を行なった。

(以上3例はカナダの新聞『タイム・コロニスト』による)

◎アメリカ空軍は、冷戦時代の研究プログラムの一環としてミズーリ大学その他4つの学校で、LSDを使った実験を行なった。

◎アメリカ陸軍は、1950年代にサンフランシスコで、人の住んでいる地域全体で秘密の細菌戦争テストを行なった。軍は疑うことを知らない民間人にバクテリアを噴霧したの

である。

◎アメリカ軍は、アラバマ州・タスキーギにおいて、梅毒が人体をどのように蝕むのかを研究するために、黒人男性たちに人体実験を行なった。しかも治療されないままにされた。

◎1950年代と1960年代の間に、アメリカ陸軍の生物戦争部隊が個体群を通じた微生物の移転を研究するために、何も知らない民間人の群衆に微生物を感染させた。数人の科学者によると、いくつかの病気の重大な発生が生じた可能性があったという。

(以上4例はアメリカのデータベース【NewsAbs】による)

◎アメリカ軍は、1952年～53年、メリーランド州ほか5州で、亜鉛カドミウム剤を散布した。

◎アメリカ軍は、1956年～58年、フロリダ州とジョージア州の黒人居住区域を中心に、黄熱病に汚染させた蚊を大量放出した。

◎アメリカ軍は、1966年、ニューヨークの地下鉄に、ある種の細菌を散布した。

◎アメリカ軍は、1968年～69年、ワシントンの食品・薬品局のビルの水道に化学物質を投入した。

(以上4例はアメリカで確度の高い会員制情報誌として知られる【インサイダー】による)

さらに大規模な実験めいた話もある。

1986年8月、西アフリカのカメルーンのニオス湖から突然ガスが噴出し、1746人が死ぬという「事故」が起きた。公式説明では、湖底にたまった二酸化炭素が噴き出して住民が酸欠死したということになっている。しかし、犠牲者の体にはそれを裏付ける形跡はなかったばかりか、化学熱傷等を負っている者がいた。「卵が腐ったような臭いがした」「湖の上にキノコ雲が上がった」との証言もあり、その状況は、化学兵器の使用を疑わせるものがあったという。

なお、この「事故」発生後、イスラエルの軍医療チームのほか、アメリカ、フランス、西ドイツなど、西側軍事大国の医療チームが直ちに「救護と調査」のため現地に急行しているとのことである。

◆ 自国の軍人も実験台に

軍関係者がいかにむごいことをするものなのか、以下の例でもわかる。この場合、その対象は、民間人ではなく、自国の軍人である。自分たちの味方をも簡単に見殺しにしてしまうのである。つまり、権力側についたところで、安全になるわけではなく、捨て駒にさせられるだけである。

(以下、『ワシントンポスト』より引用)

◎戦時中のガス実験の被害は

想像以上にひどいことが判明

～復員軍人省は曝露に関連する病気のリストを拡大

ビル・マッカリスター (ワシントンポスト紙専属記者)

それは「マン・ブレイク (人間破壊)」テストと呼ばれる。その目的は単純であった。つまり、密閉されたガス室に入れられた若い新兵が2つの有毒化学薬品に打ちのめされるまでにどれくらいの時間がかかるかを確かめることである。

多くの者は繰り返し曝露された。アナコスチャにある海軍の実験室では、多くの者が典型的なガス中毒の症状——目の膨張・咽喉炎・悪寒——に苦しんだが、そうした不調

を無視してガス室に戻るように指示された。第2次大戦中に、メリーランド州ワシントンの軍事研究施設およびその他の場所でのテストを、合計で何千人という海兵と兵士が受け、そのことについては秘密を守るように誓わされた。

.....

この結果を述べるに際して、復員軍人省はテストに関連するとして、1991年に認証した7つの病気のリストに、4つの呼吸器系統のガン、皮膚ガン、慢性閉塞性肺病、急性非リンパ球白血病を加えることに同意した。

.....

全米医学協会によって構成された委員会が行なったこの研究は、「6万人を超える新兵が塩素化マスタードガスおよびルイサイトと呼ばれている、砒素^{ひそ}を含有している化学薬品にどのように曝^{さら}されたのか」を、ところどころ恐ろしいほど詳細に発表している。このテストの目的は立派なものだ。つまり、陸軍省がアメリカ人が直面すると確信していた化学兵器から連合軍人員を守るための衣服と軟膏^{こう}を作るためというものであった。これらの兵器は戦闘では決して使われることがなかった。しかし、推定で4000人の新兵がテストを受け、全面化学攻撃で遭遇するであろう量のガスに曝された。

新兵の前腕に数滴の化学薬品が直接置かれることもしばしばあった。しかし、ワシントンでは、推定2500人の水兵が10×15フィートのガス室に一度に10人追いやられ、最大4時間までガスに曝された。

保護具を着用することを許されないことが時々あった。そして、ガスマスクを着けている者たちはゴムのホースに漏れがあり、効果がないということに気づくこともしばしばあった。あるとき、保護された縦長の皮膚と曝露された皮膚とを研究者が比較することができるように、シャツの上から身に着ける、炭素を染み込ませたサスペンダーを与えられたことがある。

.....

昨年8月に復員軍人省は給付金の資格のある7つの病気を列挙する最終の規定を公開した。復員軍人省がマスタードガスの犠牲者に恩給を与えると最初に発表して以来、187人の復員兵が給付金の申請をしたが、資格を与えられたのはそのうちの24人でしかない。復員軍人省のスポークスマンは、復員軍人省は新しい医学報告に基づいて請求を再検討すると述べた。

◆日本でも軍の実験

外国だけの話ではない。日本人も密かに生体実験を行ってきた。

有名なのは、旧陸軍「満州第731部隊」だ。1939年初めごろから45年8月ごろにかけて、スパイ容疑者や抗日活動家を「マルタ」＝実験台とした。このマルタ3000人以上を、生物化学兵器の生体実験によって殺したとされている。

日本政府・厚生省は「証拠がない」と否定するが、元関係者の証言やアメリカに渡った資料などは、この実験が実在したことを示している。

89年7月には、新宿区の旧陸軍軍医学校跡地で、銃の傷跡や切り傷のあるものを含む人骨約100体が発掘された。それは、^{ずがいこつ}頭蓋骨と^{だいたいこつ}大腿骨だけの異常な状態だった。

真相究明にあたる常石敬一神奈川大教授は、「医学部でやる死体の実験は、あとで焼骨して埋葬する。これは切り刻んで捨てただけ。人体実験の物証だ」と断言。元731部隊関係者も、「軍医学校と731部隊は切っても切れない関係。骨は絶対に731部隊のもの」と語った。

一方、政府・厚生省は人骨の調査を拒否した。

(以上、集英社『Bart』92年6月22日号による)

政府は、なぜか生体実験の事実をもみ消そうと必死になっ

ている。しかし、どんなに否定しようとも、731部隊や陸軍第6技術研究所等による生物化学兵器の研究成果・データは、「軍」すなわち自衛隊やアメリカ軍に継承され、現在も脈々と生き続けているのである。

そして94年6月、松本でサリン事件が起きる。

陸軍第6技術研究所に勤務していた元技術将校は、犯人の手口の鮮やかさからみて、「犯人はプロ、軍関係者」と言いきる。そして、「犯人は合成した毒物について、もっと大きな犯罪に用いるため、どうしても実験をやってみる必要があったと考えれば、犯行の動機の説明がつく」という。
(下里正樹氏の取材による)

松本のサリン事件は、サリンの効果を試すために、自衛隊やアメリカ軍の特殊部隊が仕組んだ生体実験だった、と氏は述べていたのである。

それからしばらく経った9月1日、奈良県の橿原市から北葛城郡広陵町などの8つの市町にわたって、刺激臭を伴う気体が蔓延まんえんするという事件が発生した。高校生20人が、目の痛みを訴え、あるいは湿疹症状を起こし、病院で治療を受けた。手当をした医師は「鼻をつく化学薬品のにおい」がしたといい、患者は「今までかいだことのない硫黄のようなおいだった」と語る。最終的な被害者数は209人に達した。

原因は農薬でもなく、光化学スモッグでもなく、真相は

不明。結局、「異常気象のもとで突発的に起こった一過性の現象では？」という推測で、事件はうやむやになった。

このほかにも、ここ近年、東京や大阪等の大都市で、警察や消防庁、環境庁が調べても原因が突き止められない——正確には「原因を突き止めさせない」——不審な事件が多発してきている。

これらの説明のつかない事件も、何らかの生体実験なのだろうか？

専門家が指摘するように、外国であれ、日本であれ、猛毒のガスを適切に扱えるノウハウを持つのは軍隊だけである。そして、歴史が示すように、軍隊は常に生体実験を欲し、ときには民間人を対象に水面下で行なってきた。

◆毒ガスはアメリカ軍・自衛隊が持っている

ほんの1滴が肌に付着するだけで大人1人が死亡する猛毒サリン。それが存在する場所がある。アメリカ軍・自衛隊基地である。

戦時中、ドイツ政府から日本陸軍省へと渡ったサリンの極秘文献は、陸軍技術本部所属の第6技術研究所（6研）に回った。戦後、埼玉県大宮市の陸上自衛隊化学学校（毒ガス学校）が、6研関係者の受け皿となり、サリンの知識は自衛隊へ継承されていった。

ある自衛隊化学学校の関係者が、松本サリン事件について、

「われわれだと犯行は数分間で可能。サリンは大宮の化学学校に30cc入りのアンプルがあります。サリンやその噴霧器を持っているのは、われわれのところだけでしょう」と語ったという。

また、日本陸軍にきた分厚いサリン文献は、戦後アメリカ軍へも渡っている。サリン開発・合成のノウハウを引き継いだアメリカ軍はサリン量産が可能になった。

現にアメリカ軍は大量のサリンを保有している。

1969年には、沖縄の知花弾薬庫に保管していた8300トンのサリンの一部が漏れて犠牲者を出すという事件を起こし

ている。その騒ぎをきっかけに、米国はサリンを撤収した
ことになっているが、当時の関係者によると「まだ大量に
日本国内に残っているはずだ」という。

その一部が、日米軍事技術双務協定によって自衛隊に提
供されている可能性も指摘されている。事実、複数の元自
衛隊関係者は、自衛隊にサリンの現物が存在していること
を証言しているというのだ。

(以上、下里正樹氏の調査による)

自衛隊とアメリカ軍——彼らが、この平和国家日本で、
サリンの現物はもちろん、そのノウハウまで独占的に蓄積
しているのは疑いようのない事実である。

【公安とアメリカの接点】

元警視監・松橋忠光氏がその著書の中で「エリート警察官僚
が、毎年アメリカのCIAに派遣され、盗聴技術や、錠前破り
などの特殊工作の研修を受けている」と指摘している。つまり、
CIAと警察には太いパイプが存在する。

また、警察（特に警備公安警察）が、スリ・盗聴・窃盗・ス
パイ工作・脅迫などありとあらゆる手段で収集した情報は、大
臣や警察OBの代議士に流れているというのも公然の秘密となっ
ている。特にG氏がすべての情報を握っているというのは有名
な話だ。

【あ　と　が　き】

正しい理論は、終局においては、勝つべきものにちがいないけれども、現実には、そのときどきの支配的な力によって抑圧されることが少なくない。ことに、理論が真実に基づくとき、それに対する抵抗は強烈であって、力づくで理論をおさえつけようとする無謀な企てが展開される。

世の中には真実を知られたり語られたりしては困る人たちがいて、そういう人たちが現実には力を有しているからである。

すなわち、政治的、経済的、宗教的その他社会的の支配力を有している人たちやその階層は、自己の支配力をどこまでも持続し現状をそのまま維持しようと焦慮するが故に、その支配力について批判したりその現状について疑惑をもったりするものをおそれきらって弾圧しようとするからである。

(法学の権威・末川博 博士『法と自由』岩波書店より)

◆「人を犯す者は乱亡の患いあり」

本文をお読みになった方は、もうおわかりになったことだろう。「毒ガス・細菌兵器攻撃」とは、決してオウム真理教の妄想や思いつきによるいい加減な発言ではなく、事実に基づいた抗議であることを。

最初に述べたとおり、この事実を国家権力・警察は抹殺しようとしている。本書を発行すること自体、極めて危険な状況に追いやられつつある。警察は本書を口実に不当逮捕を続けるかもしれない。しかし、事実を埋もれさせるわけにはいかないのだ。

繰り返して言うが、だれがどんな目的でこの生物化学兵器攻撃を指示したのか、それはわからない。しかし、わたしたちがイペリット、サリン、Q熱リケッチアなどの攻撃を受けたことは紛れもない事実である。また、オウム真理教施設の上空に米軍機・自衛隊機が頻繁に飛来しているのも事実である。この事実を埋もれさせるわけにはいかないのだ。

今、日本は狂っている。

毒ガス事件の被害者が、逆に犯人に仕立て上げられようとしている。外部からの毒ガス攻撃を防ぐために用意したものが、毒ガス製造のためということにされつつある。

こんなバカげたことがあっていいものだろうか。

しかし。

どんなに国家権力が法をねじ曲げて圧力をかけたとしても、1000人をはるかに超える出家修行者が見、聞き、そして経験してきた事実を打ち消すことはできない。いくら権力が圧力をかけようとも、地球が太陽の周りをまわっている事実を否定できなかったように、毒ガス・細菌攻撃がオウム真理教に対して行なわれた事実もまた、決して否定できないのである。

警察、裁判所、そしてマスコミが一刻も早く本来の使命にのっとして真相を究明するよう、願うばかりである。そのためならば、オウム真理教は協力を惜しまない。だが、彼らがもし真実をねじ曲げようとするならば、わたしたちは最後まで屈することはないだろう。

古書に言う、「人を犯す者は^{らんぼう}乱亡の^{うれ}患いあり」と。人を迫害した者は、その報いが自分に及び、乱れ滅びることになるという意味である。

すべての真実が明らかになり、地上に正義が行なわれんことを。

1995年 6月

矢上直樹

参考文献

和気朗「生物化学兵器」中公新書

清水勝嘉「生物化学・毒素兵器の歴史と現状」不二出版

宮田新平「毒ガスと科学者」光人社

永瀬唯「市民よ毒ガスマスクを装着せよ」

グリーンアロー出版社

磯貝陽悟「サリンが来た街」データハウス

早乙女勝元；岡田黎子編「母と子でみる毒ガス島」

草の根出版会

武田英子「地図から消された島」ドメス出版

松橋忠光「わが罪はつねにわが前にあり」

オリジン出版センター

「自衛隊装備年鑑1994」朝雲新聞社

「在日米空母航空団 CVW-5」文林堂

「月刊宝石」

「週刊現代」

「臨床と微生物」Vol.21 No.6 1994.11

International Journal of Dermatology Vol.30, October,
1991

Arch Dermatol Vol.127, August, 1991

Annals of Emergency Medicine Vol.21, March, 1992

Journal of Forensic Sciences, May, 1991

九日前に予言されていた阪神大震災？。

——それは世紀末の日本に襲いかかる。

数々の恐怖と惨劇のプロローグにすぎない。

想像を絶する規模で忍び寄る戦慄の世紀末？

次に日本を襲うのは……？

この空前の危機が

あなたを呑み込もうとしている？



『報道写真全記録 阪神大震災』朝日新聞社

緊急出版！

日出づる国、災い近し

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著

B6版／定価1285円(税込み)

『日出づる国、災い近し』それは、正確な
近未来予言と、科学と神秘力に裏づけられた
確固たる対処法が記されている秘密の書。



全国の書店で絶賛発売中！

読者の熱い要望に応じて!

ガネーシャセット

PRESENTED BY AUM PRES.



発売開始

「麻原尊師の本を、オウムの本をもっと読みたい……」
そんな読者の熱い要望に応じて、この度「ガネーシャセット」
ができました。
オウム出版が自信を持ってお勧めする数々の本を特別価格
で提供。さらに、なかなか手に入らない「オウムグッズ」まで
プレゼント。これは、またとないチャンスです。

確実に手に入る!

今、爆発的な人気を見せているオウム出版の書籍。
残念ながら書店では手に入りづらい状態になっています。これでは、読者の皆様の「オウム真理教ってなに?」という素朴な疑問にもなかなかお答えすることができません。

そこでオウム出版では、自信を持ってお勧めする「ガネーシャセット」を通信販売で提供することになりました。しかも今回は、発売記念特別価格で、お安く皆様にお届けします。

さらにビッグチャンス

「ガネーシャセット」をお申し込みになった
皆様にもれなくオウムグッズをプレゼント!
特製ポストカード、アニメーションビデオ、尊師の歌のテープ等、
一般ではなかなか手に入らない貴重品です。最近は類似品が出て
いるという噂も……。

わたしは、わたしの生きていく限り、
真理を説き続けていきたい。

真理の御魂

みなま

最聖 麻原彰晃尊師

ガネーシャセット
5つのラインナップ

- まずは、何も言わずに

Aセット (20冊)
特別価格 **22.000円**

- さあ、もう1歩深く!

Bセット (26冊)
特別価格 **24.500円**

- これで聖者になれる

Cセット (25冊)
特別価格 **21.500円**

- これでもかこれでもかの

Dセット (117冊)
特別価格 **105.000円**

- あなたのお好きな本を——

Eセット (よりどり20冊以上)
定価の **5%OFF**

※ A～Dセットは、特別価格につき、定価の10%OFFになっております。

※ 上記の価格は、消費税+送料込みの価格です。

- 詳しいご案内をさしあげます。

まずはお電話かハガキにてお問い合わせください。

- お申し込み・お問い合わせ先

オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 郵便振替/東京5-109325

TEL.03 (3439) 6043 FAX.03 (5450) 3558



オウム真理教

真実に一步

現在、大変混雑しており、
回線がつながりにくくな
つています。つながらな
い場合は、しばらく時間
をおいてからおかけ直し
ください。

これが尊師の教えだ！

最聖 麻原彰晃尊師説法
いにしへの真理を掘り起こす。
そしてだれも解けなかった最
奥義も説き明かす。魂が歓喜
する、光のダルマを学ぼう。

みんなでわいわいカヤカヤ
フリートーク
魂の自由を求めて自由
に語る、可能性無限の
自由空間。

オウム真理教ネット

アクセス番号 03-3396-7405

Tri-p利用可能
(CXAUMNET)

通信速度 1200/2400bps

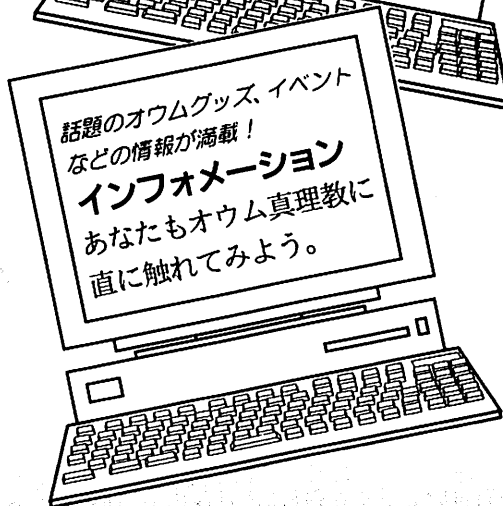
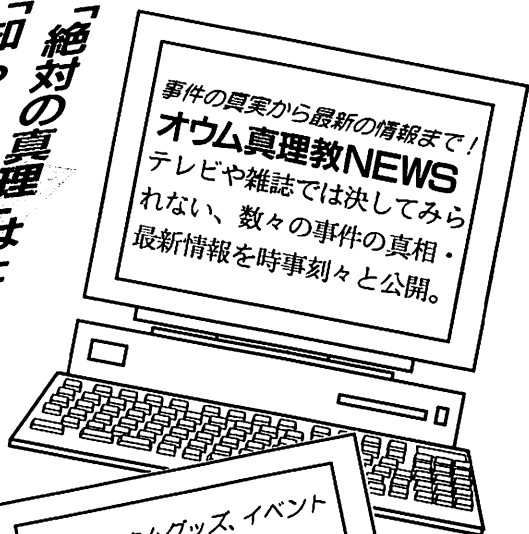
連絡先 オウム真理教ネット事務局

03 (3396) 9393

ネット

近づきたい方へ

「絶対の真理」はたしかにある。
「知られざる事実」は存在する。



あなたの様々な疑問に、解脱者が直接答えます。



あなたの知らない あなたの秘密 そっと教えます

最奥儀を初公開!

神秘と科学が一体化した絶対最強の運命学

❖ 占いの館 **黎明 REIMEI** ❖

ついに個人鑑定郵送システム スタート

あの阪神大震災をはじめ、数々の事象を的中させてきたオウム真理教の運命学。——その秘密は、さまざまな要素をコンピューターで速やかに分析・占断できることにあります。占いの館 黎明では、数ある運命学の中でも的中率の高い6種類の鑑定を提供します。

その奥儀を利用してあなたの運命をのぞいてみませんか？

1 **大宇宙占星学** 「驚異の運命学」、その秘密は異次元の奥儀

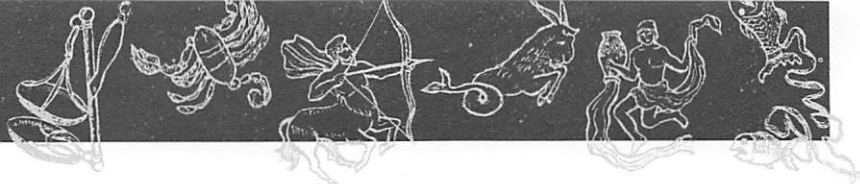
麻原彰晃導師が異次元世界の神から授かった奥儀を用いて、星々の織りなす角度を算出。その的中率の高さには定評があります。

総合鑑定料 **6000円**

2 **西洋占星学** ポピュラーな「星占い」で驚くほど詳細な運命が!

星々の位置の組み合わせ(ホロスコープ)が与える示唆をコンピューターが解析。さまざまな角度から“本当のあなた”を告げてくれます。

- 総合鑑定 16の基本鑑定、1年の運勢、オリジナル鑑定、サビアン占星術など、27もの項目で鑑定します。 **総合鑑定料 5000円**
- 相性占い 気になるあの人とあなたの相性を占断。 **特別鑑定料 4000円**
- 吉日占い 総体運・仕事・恋愛・金運など10項目のベスト/ワーストデーをお教えます。 **特別鑑定料 2000円**



3 算命学 最も精密な中国の秘儀が、あなたを変える

最も神秘的でありながら、最も精密かつ合理的であるといわれる算命学は、一人の運命を10通り以上の方法を用いて占います。

- 総合鑑定 29の項目であなたを分析。
より正確な“自分”を知りたいあなたに。 総合鑑定料 **8000円**
- 結婚鑑定 結婚を真剣に考えているお二人に。 特別鑑定料 **3000円**
- 才能占い 今ある才能をより生かし、未知の才能を開くために、ぜひお試しあれ。 特別鑑定料 **3000円**
- 60日の運勢 あなたの指定する60日間の運勢を、1日ごとに占います。毎日の行動の指針に。 特別鑑定料 **3000円**
- 100年の運勢 100年間にわたるあなたの運勢を1年ごとに鑑定します。マクロな視点での人生計画に。 特別鑑定料 **3000円**

4 姓名判断 一生使う名前だから、知らずには過ごせない

姓名は予想以上にあなたの運命に大きな影響を与えています。全10項目の鑑定で、名前の秘密を教えます。 総合鑑定料 **5000円**

5 紫微斗数 しびとすう 中国幻の秘法が、今甦る

古来、中国で「幻の秘法」と呼ばれてきた紫微斗数。西洋占星学とはひと味違った東洋的な具体性が魅力です。 総合鑑定料 **4000円**

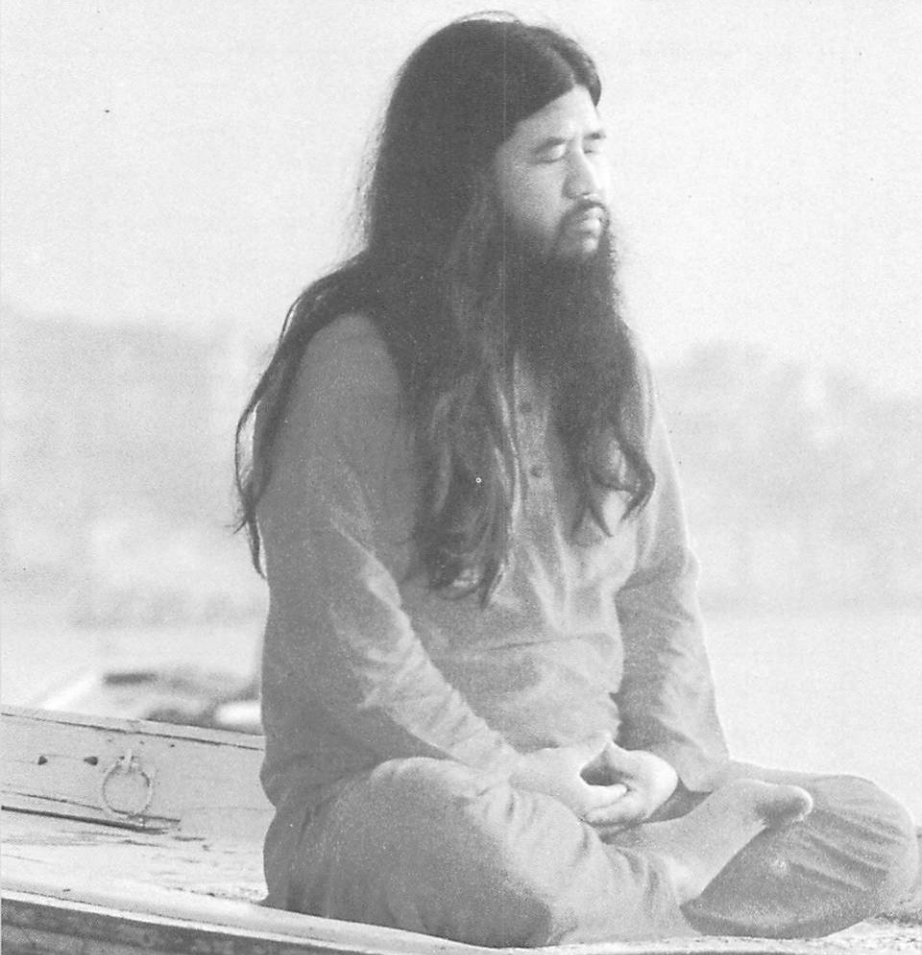
6 星座・血液型占い 最もポピュラーな占いをお気軽に

気軽に占いたい方におススメ。ご存じ星座と血液型、そしてその二つを組み合わせた鑑定を行ないます。 総合鑑定料 **1500円**

◆くわしいご案内を差し上げます。ご希望の方は、ハガキに右の資料請求券を添付して、氏名・住所・電話番号をお書き添えのうえ、次の宛先にお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 オウム出版「占いの館 黎明」係
TEL.03 (3439) 6043 / FAX.03 (5450) 3558

◆
「占いの館 黎明」
資料請求券



宗教法人 オウム真理教

(キリトリ)

サリン日本
ゆくえ知れず
資料請求券

資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて
最寄りの本部・各支部までご連絡ください。
入会案内等、詳しい資料をお送りします。

本物の実感!

集え! 千年王国のために……

日々の生活に流され
本当に求める人生を
忘れていませんか。

世界でただ一人の最終解脱者
真理の御魂
最聖 麻原彰晃尊師が説き明かす
真実の法則が
本当の自由・幸福へと
あなたをいざないます。

新しい世界が
今まさに始まろうとしている
この時代に
新人類へと
進化の道を尊師と共に
歩んで……

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。
あなたのご意見を、ぜひ下記の「[サリン日本ゆくえ知れず] 読者係」まで
お送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版 「サリン日本ゆくえ知れず」 読者係

◆各道場のご案内◆

富士山総本部

〒418-01 静岡県富士宮市人穴381-1

東京総本部 03 (5467) 2745

〒107 東京都港区南青山7-5-12 マハーポーシャビル2,3F

世田谷道場 03 (3327) 8565

〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F

杉並道場 03 (3396) 9393

〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F

札幌支部 011 (241) 4938

〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F

仙台支部 022 (268) 3904

〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F

水戸支部 029 (226) 8044

〒310 茨城県水戸市中央2-1-17 HDビル6F

高崎支部 0273 (46) 1573

〒370-12 群馬県高崎市倉賀野町1081-5

船橋支部 0474 (66) 4965

〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18

横浜支部 045 (243) 8079

〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204

藤枝支部 0546 (46) 2068

〒426 静岡県藤枝市築地堤下11-5

松本支部 0263 (28) 7429

〒399 長野県松本市芳川野溝527-3

名古屋支部 052 (252) 0709

〒460 愛知県名古屋市中央区栄5-8-14 万国ビル3F

金沢支部 0762 (51) 8457

〒920 石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F

福井支部 0776 (26) 6145

〒910 福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F

京都支部 075 (371) 3759

〒600 京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F

大阪支部 06 (251) 4264

〒541 大阪府大阪市中央区久太郎町3-2-15 マルイビル2F

堺支部 0722 (21) 1843

〒590 大阪府堺市海山町4-168-9

和歌山支部 0734 (24) 2859

〒640 和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F

広島支部 082 (264) 7252

〒732 広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F

高知支部 0888 (84) 8286

〒780 高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F

福岡支部 092 (474) 2877

〒812 福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F

那覇支部 098 (866) 9537

〒902 沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F

深谷出張所 0485 (74) 8143

〒366 埼玉県深谷市荻場441-8

(海外支部)

ニューヨーク支部 212 (421) 3687

8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.

ボン支部 (0228) 616647

Auf dem Hügel 48, 53121 Bonn, S.R.Germany

スリランカ支部 (AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)

Horahena, Watte, Angulugaha, Galle, Sri Lanka

サリン日本ゆくえ知れず
——生か死か・毒ガスとの死闘500日

1995年7月17日 初版発行

定 価 ————— 1200円
著 者 ————— 矢上直樹
発行者 ————— 長嶋広明
発 行 ————— 株式会社オウム

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17

T E L 03(3439)6043

振 替 東京5-109325

※乱丁・落丁はお取り替えいたします

©Naoki Yagami 1995
ISBN4-87142-116-3 C0030 P1200E